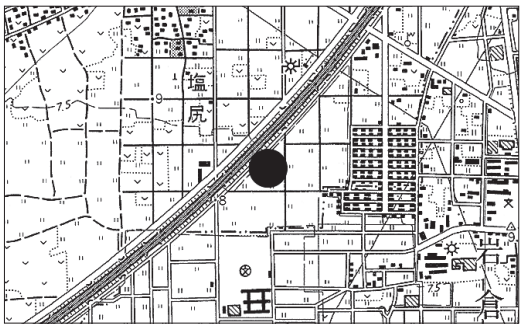
Ⅱ．遺跡調査の概要

猫島（ねこじま）遺跡

所 在 地　一宮市千秋町塩尻
調査理由　一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査
調査期間　平成 11 年５月～平成 12 年３月
調査面積　22,500 ㎡
担 当 者　赤塚次郎・飴谷　一・加藤博紀・川添和暁・洲嵜和宏



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

調査の経過　調査は名神高速道路下り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成 11 年４月に範囲確認調査を、平成 11 年５月から平成 12 年３月にかけて本調査を実施した。本調査については、調査面積 21,500 ㎡を便宜上Ａ～Ｉ区の９つの調査区に分割し、発掘調査をおこなった。

立地と環境　猫島遺跡は、一宮市千秋町塩尻に所在し、五条川・青木川によって形成された標高 7.5 m前後の微高地上に立地する。本遺跡の周辺には、西に弥生時代前期の集落として著名な元屋敷遺跡、南に弥生時代中期の水田と銅鏃が出土した伝法寺野田遺跡、東に縄文時代後晩期～弥生時代にかけての拠点的な集落である大地遺跡、弥生時代後期の墓域と考えられる蕪池遺跡など、多くの遺跡が分布している。

調査の概要　今回の調査により、遺跡の南側には北東から南西方向にのびる、大きな谷地形が広がっていることが確認され、この谷の縁辺部からその北側に展開する微高地にかけて弥生時代から中世にかけての遺構が検出された。その結果、本遺跡は弥生時代から中世にいたる複合遺跡であることがわかった。特に弥生時代中期前葉から中葉にかけての多くの遺構・遺物の存在が確認できたことは、朝日遺跡を除いた尾張地域ではほとんど例がないことから、大きな成果であるといえる。

時期区分　検出された遺構・遺物の時期から以下のように大別できる。Ⅰ期（縄文時代晩期～弥生時代）、Ⅱ期（古墳時代）、Ⅲ期（奈良～平安時代）、Ⅳ期（鎌倉～室町時代）である。

Ⅰ　期　Ⅰ期は、遺構・遺物から、以下の４つの小期に細区分できる。Ⅰ―１期（縄文時代晩期～弥生時代前期）、Ⅰ―２期（弥生時代前期末～中期前葉：朝日式期を中心とする）、Ⅰ―３期（弥生時代中期中葉前半：貝田町式期古段階を中心とする）、Ⅰ―４期（弥生時代中期中葉後半～中期後葉：貝田町式期新段階を中心とする）である。

今回の調査で、環濠・掘立柱建物・竪穴住居・土壙墓及び方形周溝墓、水田など集落の構成要素となる遺構が検出されたことは、弥生時代中期前半の集落を理解する上で評価できよう。特に、低地部に掘削された２重環濠の両側から、土塁状遺構が検出されたこと、集落の南西側では、環濠の出入口をはさんだ南側に大型掘立柱建物およびそれを中心として形成された墓域がひろがり、北側居住域にも方形周溝墓・土壙墓が造営される、といった特異な景観が見られることは、大いに注目される。

Ⅰ－１期　99 Ｇ区以外の調査区において、縄文晩期に属する深鉢や弥生前期に属する壺・甕などが、少量であるが出土しており、99 Ａ・Ｉ区及び谷の上層では該期の遺物を含む包含層が見られた。これらから、この時期に遺跡が形成されたと考えられるが、遺構については確認で

きなかったため、性格は不明である。

Ⅰ－2期　弥生中期初頭には、内環濠ＳＤ01・外環濠ＳＤ02の２重の環濠が掘削される。それぞれの規模は、内環濠は幅約3.5ｍ、深さ約0.7ｍ、外環濠は幅約３ｍ、深さ約0.6ｍで、共に断面は逆台形を呈する。これらは、99Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｈ区にのびており、Ｃ区では北東に、Ｅ区では北西に、それぞれ弧を描きつつさらに北側へと続くことから、環濠に囲まれた居住域の大きさはおよそ200ｍ程度と思われる。居住域が展開する微高地から南東側へやや下がった低地部分では､環濠を掘削した際に土を盛り上げたと見られる高さ0.3～0.4ｍくらいの土塁状遺構が確認できた。99Ｅ区の北東から99Ｄ区の中程にかけて見られた洪水性の砂層は、部分的に外環濠をも埋没させており、遺構との前後関係から中期前葉末頃に大規模な洪水が付近一帯にあったことが想定される。99Ｃ区では外環濠が途切れる部分があり、その南側に隣接して３×３間の掘立柱建物ＳＢ01が検出された。居住域の出入口付近に位置し、南北長約５ｍ・東西長約６ｍの規模を持つ掘立柱建物は、他地域と比べても例がなく、特殊な建物であった可能性が高い。この建物の南側に築かれた方形周溝墓ＳＺ02は、周溝の四隅が切れるタイプのもので、１辺約11ｍの規模をもつ。この墳丘墓が造営されて以降、この付近には墓域が形成されていく。

Ⅰ－3期　一時的に２重環濠が再度巡らされるが、次第にその機能は低下していく。それと共に、中期前葉において居住域であった99Ｃ区では、中期中葉には環濠の内側にも墳墓が造営されるようになり、居住域の様相が変化する。そして、集落の北東側にも墓域が設けられ、南と西側には、一時的であるが、小規模な水田が見られるようになる。

中期中葉初頭に、外環濠は再掘削され、土塁状遺構も再構築されるが、中期中葉の貝田町式期古段階には、２重環濠はなかば埋没していたようである。こうした２重の環濠に挟まれた特異な場所に位置する99Ｅ区の竪穴住居ＳＫ95は、赤色顔料の塊も検出されていることから、非日常的な活動（祭祀？）に関わる施設であったと思われる。一方、99Ｅ区では外環濠から枝分かれして調査区の東へとのびていく溝ＳＤ04が掘削されていることから、部分的には機能していたと見られる。

集落の南側の墓域はＢ・Ｃ・Ｉ区にわたって拡大する。整然と配置された状況から、環濠の出入口およびそれに南接する99Ｃ区ＳＢ01を意識していたようである。検出された９基の土壙墓は、概ね長軸約２ｍ、短軸約１ｍを測るが、99Ｃ区ＳＫ41は長軸約３ｍ、短軸約２ｍとやや突出した規模をもつ。また方形周溝墓はいずれも周溝の四隅が切れるタイプのもので、99Ｂ・Ｃ区で検出されたＳＺ01・03・05・07は、前段階に築かれた99Ｂ区ＳＺ02と主軸を同じくする。これら４つの墳丘墓のうち、ＳＺ01とＳＺ05は１辺約11ｍを測る正方形のもので、主体部を検出することができた。そしてＳＺ05及びＳＫ41・43・54は、環濠の出入口の北側に隣接する居住域内に造営されていることから、特殊な墳墓であったと考えられる。この墓域の東側で南北線上に並んで検出された竪穴住居ＳＢ02・03・04は、これらの方形周溝墓とほぼ主軸を同じくしている。また99Ｃ区ＳＺ06･99Ｉ区ＳＺ01･02は、東西軸約５～７ｍ、南北軸約７～９ｍの長方形のプランをもち、前述した４基の墳丘墓とは形状や主軸方向を若干異にする。墓壙は主体部を含めて12基が検出され、うち６基において組み合わせ式木棺の痕跡が認められたが、構造を明らかにす

ることはできなかった。また副葬品と思われる壺などが出土した。そしてＳＢ01と基軸を同じくするＳＤ45からは、廃棄されたと思われる多くの土器が出土した。一方、居住域の南東側の99Ｄ区でも土器棺ＳＺ01が検出され、99Ｆ区でも３基の方形周溝墓が確認できたことから、調査区のさらに北東側にも墓域が展開していくと思われる。

99Ｈ区から99Ｃ区の谷地形に近接する低湿地部には、小規模な水田がつくられ、微高地の周縁が生産域として利用されていた状況が窺える。１つの区画の大きさは、長辺５ｍ以上、短辺３～４ｍ程度である。遺構の残存状況はあまり良くなく、短期間で廃絶されたようである。99Ａ・Ｉ区でも、西墓域の西端を区画する溝と考えられるＳＤ11の西側に、畦畔状の高まりによる区画がいくつか検出されたことから、この付近にも小規模な水田域が広がっていた可能性もある。99Ｄ区・99Ｈ区から炭化米が出土していることも、この集落で稲作が行われていたことを示す傍証となろう。

Ⅰ－４期　貝田町式期古段階に再度の大規模な洪水に見まわれたことにより、遺構の展開規模は急速に縮小していく。99Ｂ区ＳＺ04は、１辺約６ｍの規模を持つ墳丘墓で、西側の周溝からは供献土器と思われる壺が出土した。99Ａ区ＳＺ01は、幅約３ｍの周溝が２本検出されたのみであるため形態は不明であるが、１辺約10ｍ以上の規模を持つ大型の墳丘墓であることが推測される。

中期末段階では、99Ｃ区で土坑ＳＫ61が検出されたのみで、調査区全域においても該期の遺物は見られない。したがって、弥生時代の猫島遺跡の終焉をこの時期と考えることができる。

Ⅱ　期　99Ｅ区でのみ遺構が確認できた。溝ＳＤ27は、調査区の北東から西へ向かって緩やかな弧を描きながらのびている。この溝の東側に位置する土坑ＳＫ123からは、古墳時代前期初頭（廻間Ⅰ式期）に位置づけられるパレススタイル土器などが出土している。また、99Ｄ・Ｅ区の東側を覆っていた洪水性の砂層の上層や谷地形縁辺の包含層中から、「Ｓ字甕」などの古式土師器や６世紀後葉～７世紀前後のものと推定される須恵器片など、古墳時代前期から後期にかけての遺物が散見された。

Ⅲ　期　99Ｂ・Ｅ・Ｆ区で遺構が確認されている。99Ｂ区中央付近で検出されたＳＥ01は、底部に曲物が設置されていた井戸である。平面は、長径1.7ｍ、短径1.3ｍの楕円形で、検出面からの深さは約0.8ｍ、断面逆台形を呈するすり鉢状の掘形である。井戸底部に設置された曲物の製作技法からみて平安時代以降であろうと推測された。しかし、供伴する須恵器盤が型式的には８世紀中葉段階に属すると見られるので、この遺構の掘削年代もその時期まで遡る可能性がある。99Ｅ区ＳＫ84と99Ｆ区ＳＫ01も、井戸と考えられる大型の土坑である。99Ｅ区で検出された溝ＳＤ22下層からは、ほぼ同時期に掘削されたと思われる土坑を数基検出した。このうち土坑ＳＫ81では底面に曲物の痕跡が見られた。ＳＫ149は複数の小土坑が連結した土坑である。これらの遺構からは、９世紀前後くらいに比定される灰釉陶器椀、須恵器杯、須恵器甕などが出土した。

Ⅳ　期　調査区全域にわたって灰釉系陶器片が出土し、溝や井戸などが検出されていることから、中世段階においては生活領域内であったことが窺われる。99Ｃ区の西側から検出された柱穴と思われる３基の小土坑のうち、ＳＫ29からは14世紀後葉～15世紀初頭に比定され

る北部系灰釉系陶器椀が完形で出土した。99 E区で検出された溝SD 29・31は、北東から南西方向へほぼ並行して走ることから、微高地に沿った道の側溝とも考えられる。室町時代の後半になると、これらの溝に直交する小溝や東西南北の方位とほぼ同一方向に走る溝などが掘削される。こうした状況は他の調査区においても、多く見られる。また99 E区SK 51の底面からは2段に積み上げられた円形曲物桶が、良好な状態で検出された。99 I区SK 01からは、12世紀後半頃に比定される灰釉系陶器椀が伏せられた状態で出土した。

谷地形の縁辺にあたる低湿地部には、方形土坑が掘削される。プランは隅丸の長方形もしくは方形に近いものとがあり、大きさも長軸辺が1m程度の小型のもの、1.5m～3m程度の中型のもの、4m以上の大型のもの、との3種類に分かれる。また主軸方位も、中型・大型のものは南北もしくは東西方向であるが、小型のものは谷地形の方向と同じくする。出土遺物は稀薄だが、99 D区SK 02からは14世紀頃に位置づけられる灰釉系陶器の皿が出土した。

ま と め　今回の調査によって得られた成果は、以下の4点である。

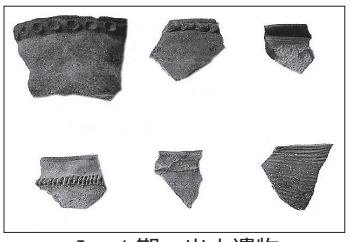
①弥生時代中期初頭から中葉段階に属する2重の環濠・掘立柱建物・竪穴住居・土壙墓・方形周溝墓・水田といった、集落を構成する要素となる遺構が検出された。この時期の遺跡で、これほどまとまった遺構が検出された例は、尾張地域ではほとんど類例がなく、当該期の集落を理解する上で評価できる。

②集落の西側に造営された土壙墓・方形周溝墓は、環濠の出入口および南接する大型掘立柱建物SB 01が設けられた「場」を意識していたようである。こうした遺構の配置から、当時の精神生活の一端を窺うことができる。また、低地部に掘削された2重の環濠の両側には、土塁状の高まりが築かれていたことが確認できた。

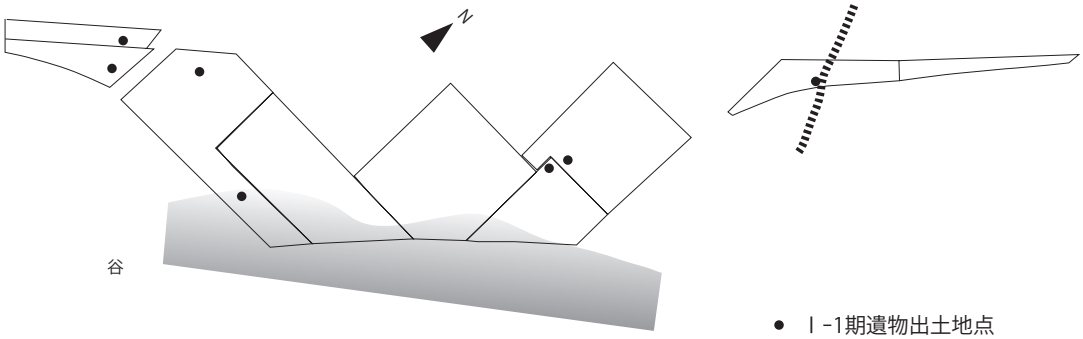
③遺構を検出することはできなかったが、調査区のほぼ全域で縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺物も散見されたことから、遺跡の初現はこの時期まで遡る可能性が高い。

④古墳時代から中世にかけての遺構・遺物は稀薄である。

（赤塚次郎・飴谷　一・加藤博紀・川添和暁・洲嵜和宏）



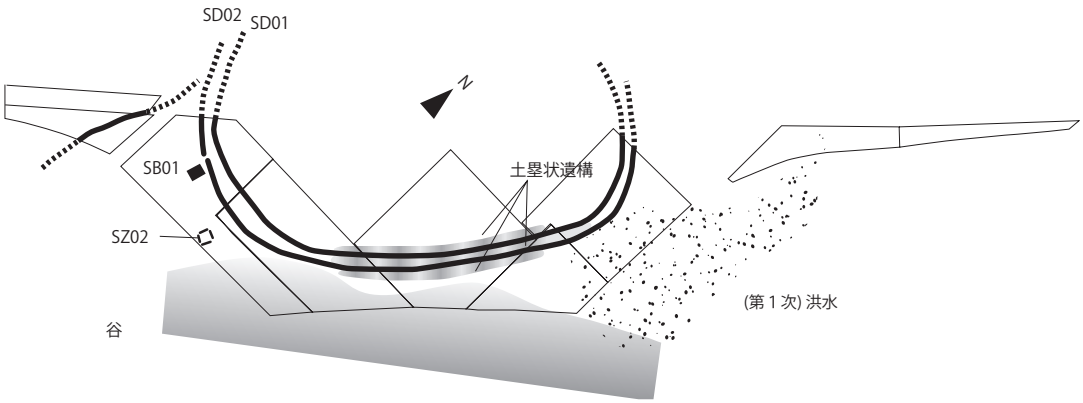
Ⅰ－１期　出土遺物



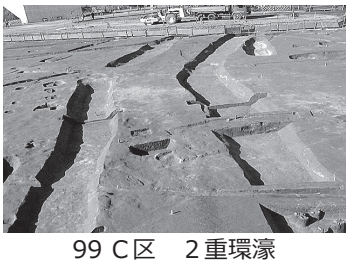
第１図　Ⅰ－１期



99 D区　土塁状遺構



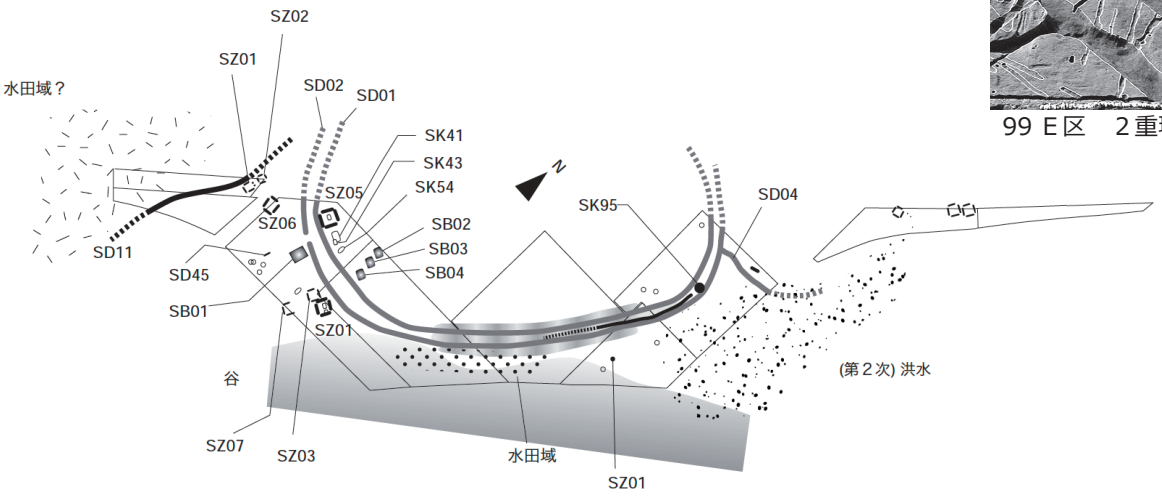
第２図　Ⅰ－２期



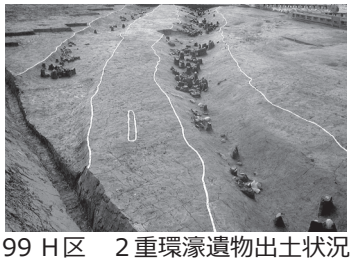
99 C区　２重環濠



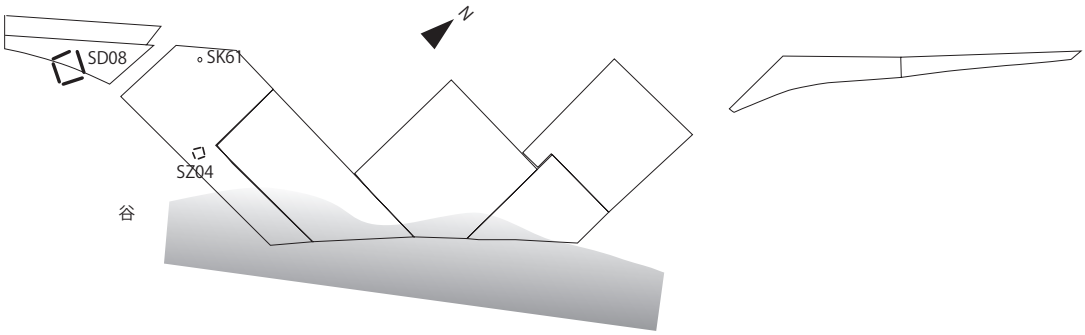
99 E区　2重環濠



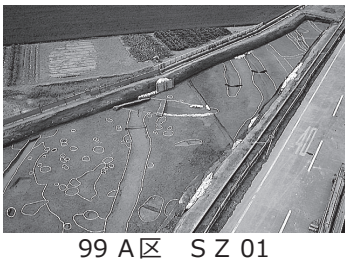
第３図　Ⅰ－３期



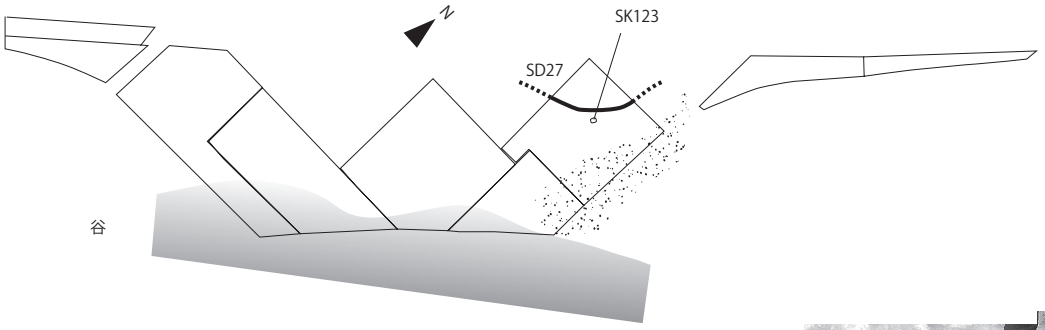
99 H区　2重環濠遺物出土状況



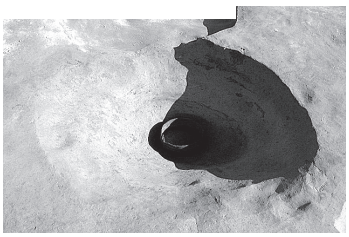
第４図　Ⅰ－４期



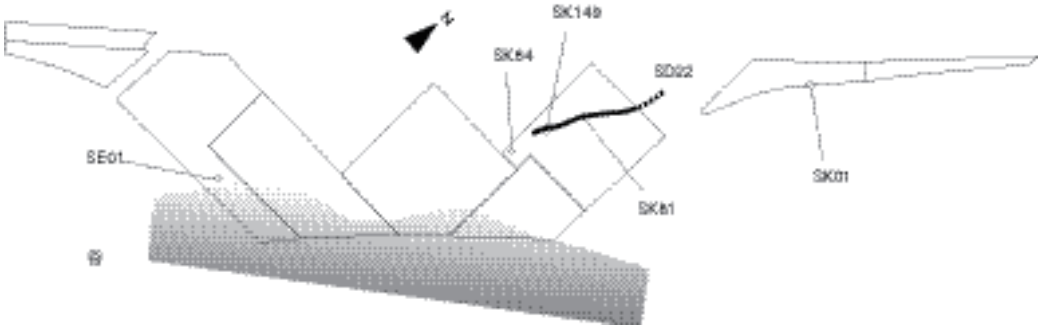
99 A区　S Z 01



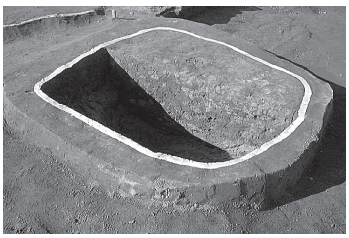
第５図　Ⅱ期



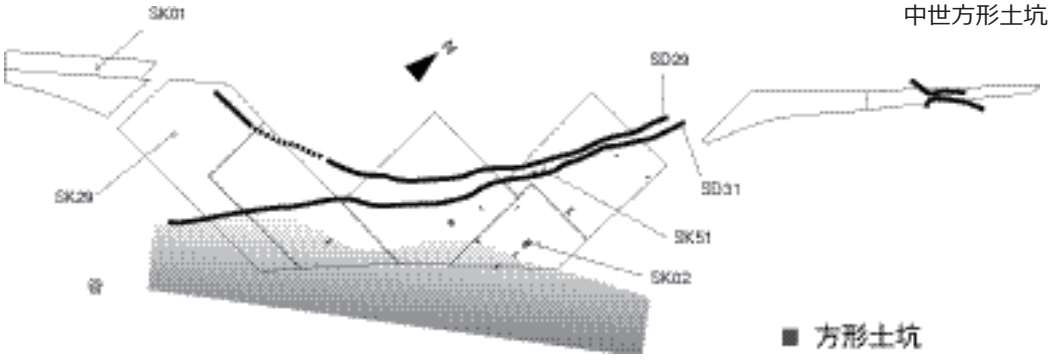
99 B区　ＳＥ 01



第６図　Ⅲ期



中世方形土坑



第７図　Ⅳ期



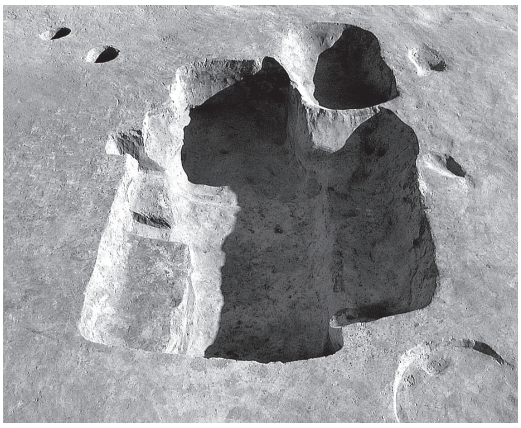
99 B・C区　S Z 05・2重環濠・S B 01



99 C区　S B 01



99 C区　S B 01 柱痕



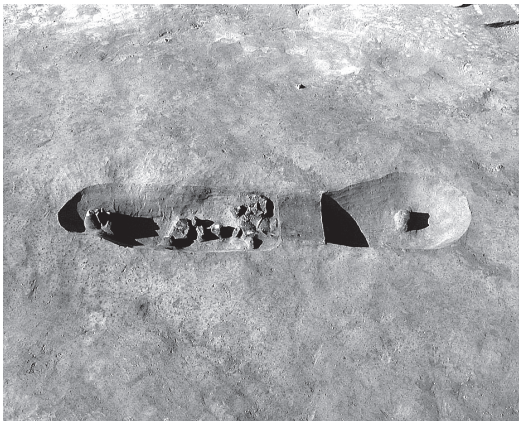
99 C区　S K 41



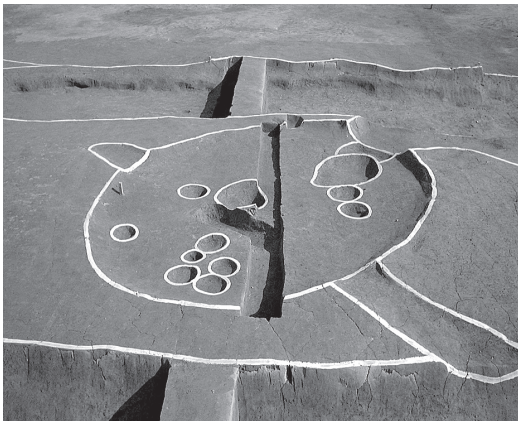
99 C区　S Z 05



99 C区　S Z 05 主体部（S K 42）



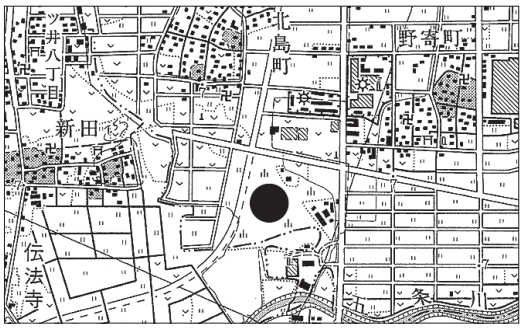
99 C区　S D 45



99 E区　S K 95

伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

所 在 地　一宮市丹陽町伝法寺地内
調査理由　五条川右岸流域下水道建設
調査期間　平成 11 年 4 月～ 8 月
調査面積　2000 ㎡
担 当 者　春日井　毅・伊藤太佳彦・木川正夫



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

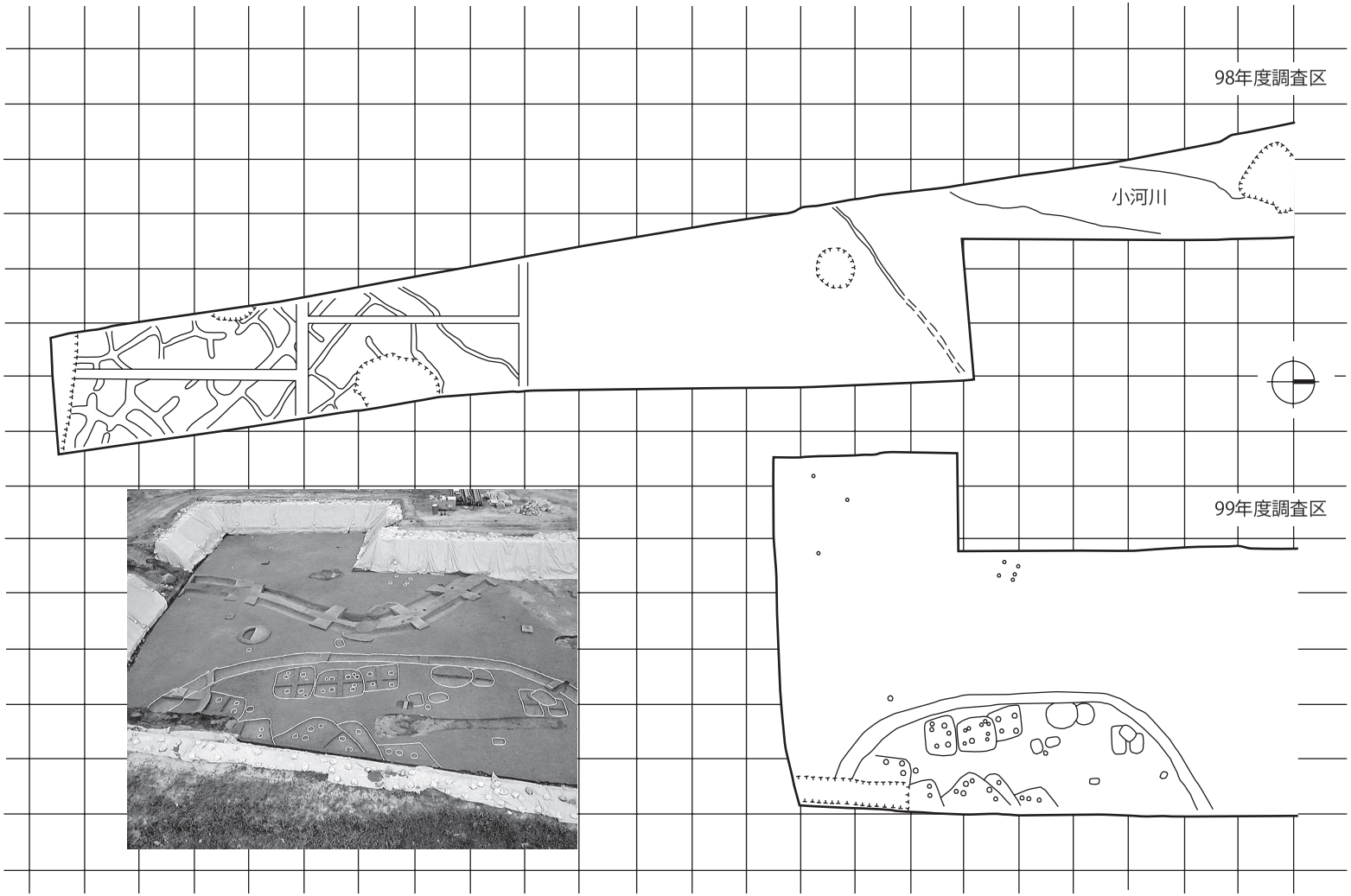
調査の経過　伝法寺野田遺跡は一宮市の南東端、丹陽町伝法寺地内に所在し、五条川がそのなかほどで大きく蛇行する地点の右岸域に立地する。発掘調査は五条川右岸流域下水道建設に伴うもので、平成 10 年度調査区の東側、2,000 ㎡の調査を行った（調査区の位置については、権現山遺跡の調査区位置図に一緒に示しておいた）。

調査の概要　昨年度の調査では、弥生時代中期中葉と考えられる水田が検出されており、大畦畔の脇からは無茎銅鏃が出土している。今回の調査区は、その水田域の北東にのびる微高地上に位置していて弥生時代中期中葉の遺物包含層の堆積はうすく、間層の灰黄色シルト層の堆積は認められなかった。

弥生時代の遺構としては、調査区の南東部分で大きく円弧を描くように溝（ＳＤ 10）が走っており、出土遺物から水田と同時期の遺構と考えられる。そしてＳＤ 10 の内側の部分では、溝に隣接する形で 4 基、その東側で 4 基の竪穴状遺構を検出することができた。いずれの竪穴状遺構からも遺物はまったく出土していないが、弥生時代中期の遺物包含層を掘り下げていく段階で検出された遺構であり、やはり水田域と関連する遺構であると考えられる。ただし西側の竪穴状遺構と溝とはかなり近接しており、少なくとも西側の竪穴状遺構については、溝よりもやや先行する可能性が高い。

中世の主な遺構としては、調査区南西部分で北東から南西方向に大きくカーブしながら並走する 2 本の溝がある。幅はそれぞれ 50 ～ 60 ㎝程度だが、深さは西側（ＳＤ 15）の溝が東側の溝（ＳＤ 14）よりも深くなっている。またＳＤ 14 については、陸橋状に掘り残された部分を確認している。さらにこれらの溝の 20 m程北には、幅 200 ㎝、深さ 50 ㎝の東西方向の溝（ＳＤ 07）がある。いずれの遺構も南部系の灰釉系陶器が主体で、おおむね 12 世紀のものが中心となっている。それ以外の遺物としては、ＳＤ 07 からは須恵器や清郷型鍋なども出土しているが、古代の遺構は確認することができなかった。

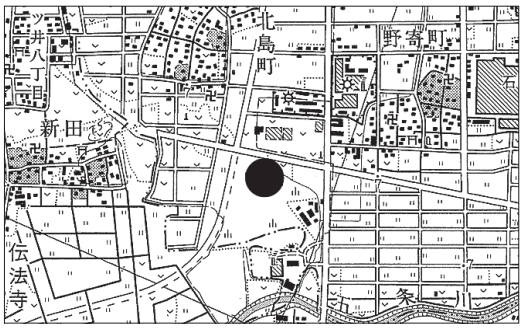
今回の調査では、昨年度の水田に加えて、微高地上に溝や竪穴状遺構を検出することができた。竪穴状遺構に関してはさらに細かく検討していく必要があると思われるが、弥生時代の集落景観を復原していく上で大きな成果であるといえよう。　（伊藤太佳彦）



弥生時代中期の遺構配置図（１：600）

権現山（ごんげんやま）遺跡

所 在 地　岩倉市北島町および野寄町地内
調査理由　五条川右岸流域下水道建設
調査期間　平成 11 年５月～８月
調査面積　500 ㎡
担 当 者　春日井　毅・飴谷　一・加藤博紀・伊藤太佳彦・木川正夫・蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

調査の経過　権現山遺跡は、岩倉市の南西部にあたる北島町および野寄町地内に所在し、五条川右岸に形成された自然堤防状に立地している。発掘調査は五条川右岸流域下水道建設に伴うもので、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成８年度より実施している。今年度は本調査と範囲確認調査を合わせて 500 ㎡の調査を実施した。

調査の概要　今回の調査区（Ａ～Ｄ区）は、96 年度調査区と 97 年度調査区を結ぶ形でトレンチ状に設定されている。現在は標高６m程の平坦な地形であるが、各調査区の状況から判断すると、かなり大規模に削平されているものと考えられる。おそらく 96 年度調査区と 97 年度調査区の間が谷状にくぼみ、その両側の微高地状の部分に遺構が展開していたものと思われる。

これまでの調査では縄文時代後期（Ⅰ期）・弥生時代後期～古墳時代初頭（Ⅱ期）・古墳時代後期（Ⅲ期）・奈良時代後期（Ⅳ期）・江戸時代後期以降（Ⅴ期）の遺構・遺物が確認されている。今回の調査ではＡ区でⅠ期の、Ｃ区ではⅡ期の遺構を検出し、Ｂ区とＤ区では新たに中世の遺構・遺物を確認することができた。

Ａ区では北東のコーナー部分で竪穴状遺構が検出され、炭化材や焼土といっしょに縄文土器や石器がまとまって出土している。

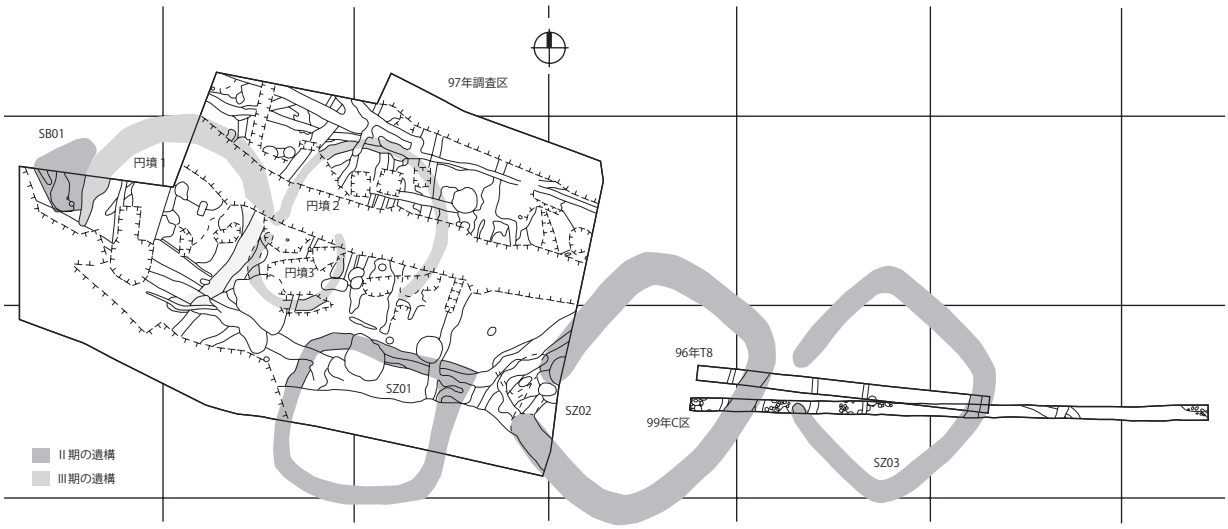
Ｃ区で検出された溝は、97 年度調査および 96 年の範囲確認調査（Ｔ８）の結果から、97 年度調査区のＳＺ 02 と、その東側に位置すると考えられる墳丘墓（ＳＺ 03）の一部である可能性が高い。いずれの溝も遺物の量は少ないが、ＳＺ 02 の一部と考えられる溝からは廻間Ⅰ式の甕が出土している。

Ｂ区とＤ区では、幅 3.5 m、深さ 1.3 mの東西方向の溝を検出している。この溝は２度掘り直されており、何らかの区画を意識したものと考えられる。溝からは灰釉系陶器や古瀬戸の卸皿などが出土しているほか、須恵器がまとまって出土している。今回の調査ではⅣ期の遺構は確認できなかったが、この時期の遺構が周辺に展開しているものと考えられる。

また範囲確認調査の結果から、遺跡の南側の部分は大規模な削平によって大半がすでに破壊されてしまったものと考えられる。（伊藤太佳彦）



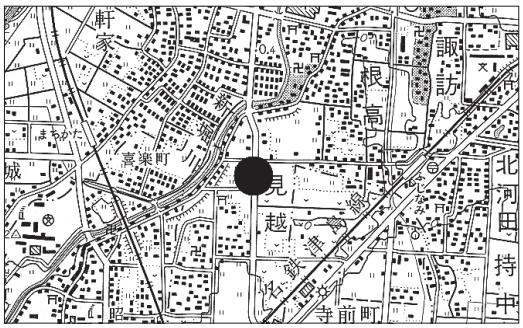
第１図　調査区位置図（１：5,000）



第２図　Ⅱ～Ⅴ期遺構図（１：800）

川田（かわだ）遺跡

所 在 地　海部郡佐織町大字見越字川田地内
調査理由　県道一宮・弥富線建設工事
調査期間　平成 11 年８月～ 12 年１月
調査面積　1,800 ㎡
担 当 者　春日井毅・伊藤太佳彦・木川正夫



調査地点（1/2.5 万「津島」）

調査の経過　調査は、県道一宮・弥富線建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。平成 11 年８月から平成 12 年１月まで、1,800 ㎡をＡ・Ｂ区の２つの調査区に設定して実施した。

立地と環境　川田遺跡は、佐織町中心部から津島市寄りの佐織町大字見越字川田に所在する。大字見越は海抜０メートル地帯が面積の半分近くを占め、一般的に海抜０メートル以上を宅地と畑地に、０メートル以下を水田に利用しているようである。遺跡は領内川とその支流の新堀川の右岸の沖積地に立地しているが、江戸時代以降の河川改修で付近の河川は流路をかなり変更しているので、遺跡の基盤層の砂は木曽川水系の河川によるものであろうが、具体的にどの河川の堆積物かは不明である。付近の遺跡として、南東方の津島市域には弥生時代の埋田遺跡が、東方には日光川を挟んで古墳時代初期の奥津社古墳が、同じく東方に奈良時代の諸桑廃寺等の遺跡が分布する。今回の調査区付近は、江戸時代後期の村絵図によると畑地であり、現在も調査区の東西両側は畑地である。畑の表面の標高は約＋ 30 ㎝、古墳周溝の検出面の標高は約－ 50 ㎝、古墳周溝の底部の標高は約－ 110 ㎝であった。付近に弥生時代や古墳時代の遺跡がかなり存在することから、川田遺跡に古墳が造営された頃にはすでに海岸線はかなり南方にあったと考えられる。

調査の概要　川田遺跡は古墳時代から中世（鎌倉時代）へと続く複合遺跡である。検出された遺構・遺物は、古墳時代（５世紀末）、古代（７世紀中葉～８世紀）、中世（平安末～鎌倉時代）の３時期に区分できる。

本年度の調査成果としては、古墳時代（５世紀末）の埴輪や須恵器・土師器を伴う古墳の周溝が確認されたこと、その古墳の周溝を古代（７世紀中葉）に再利用して須恵器・土師器等を遺棄した溝が確認されたこと、古墳を削平しながら中世（平安末～鎌倉時代）に山茶椀片を伴う土坑墓が 70 基余り確認されたことなどがあげられる。

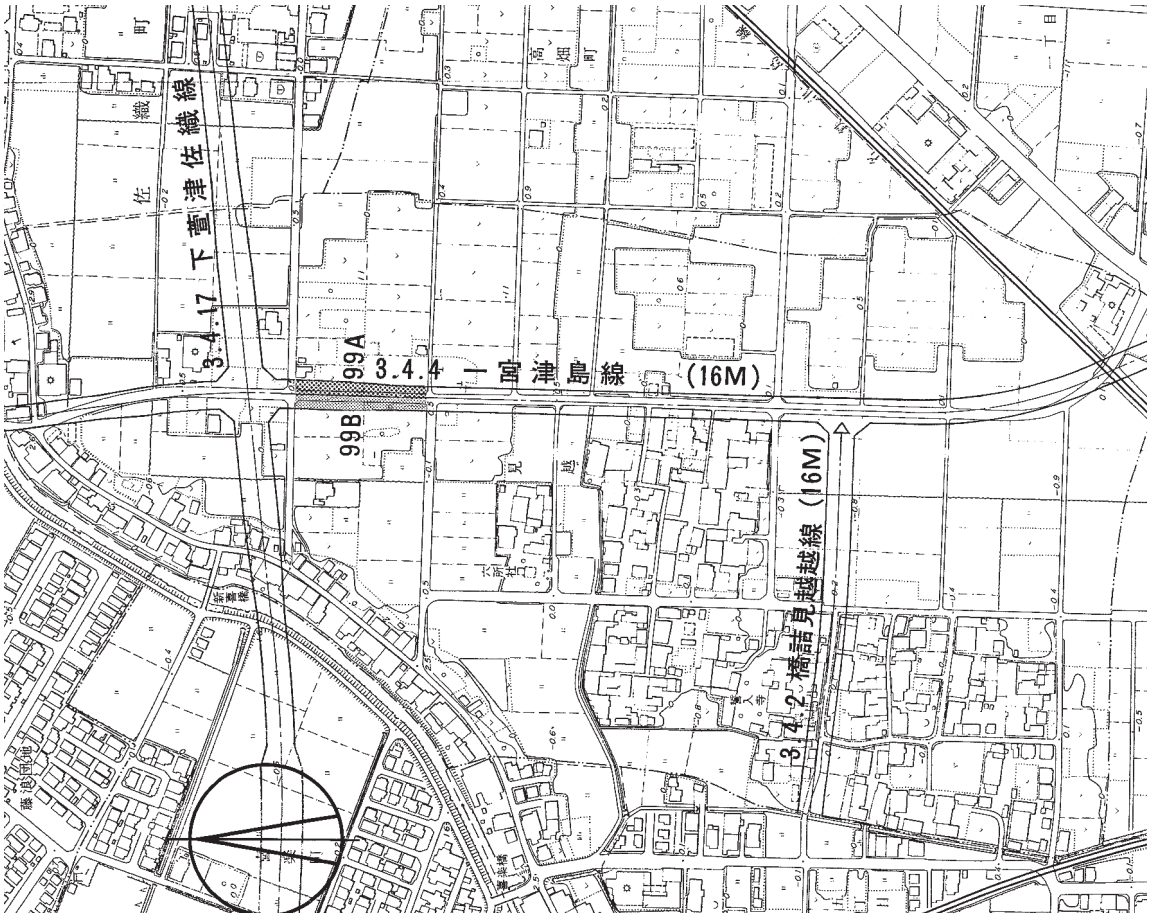
古墳時代　古墳時代（５世紀末）の遺構としては、調査区中央付近で円墳と思われる古墳（ＳＺ 01）の周溝（Ａ区ＳＤ 25・28・Ｂ区ＳＤ 06 下層）が検出された。円墳とすれば周溝の中心から中心までの直径は約 22 メートルである。Ａ区ＳＤ 25 の南とＡ区ＳＤ 28 の間にはそれぞれの溝に並行するかのように浅溝ＳＤ 30 と 29（周溝検出面から深さ約 20 ㎝。ＳＤ 29 で埴輪片若干出土）が検出されている。そして、ＳＤ 25 は東壁に接近するにしたがって浅く収束し、並行するＳＤ 30 も閉じているので、東壁にもぐった辺り（つまり円墳の主体部から見て北東方向）に陸橋があった可能性がある。埋葬施設については検出されなかった。墳丘部にそれがあったとすれば、中世にはすでに削平されていたと考えられる。また、Ｓ

Ｚ 01 の南方でほぼ同時期の溝が数条（A 区ＳＤ 27･31・32・33・34・Ｂ区ＳＤ 04･05・08・15･18）検出された。この時期の遺構からの主な遺物としては、円筒埴輪片や形象埴輪片（ＳＺ 01 南辺周溝付近で多く、北辺では最下層ではりついた状態で若干出土した。形象埴輪は盾形と思われるものがある。）・須恵器（H -11 式期）・土師器・馬歯（ＳＤ 25・28 の最下層）などがあげられる。

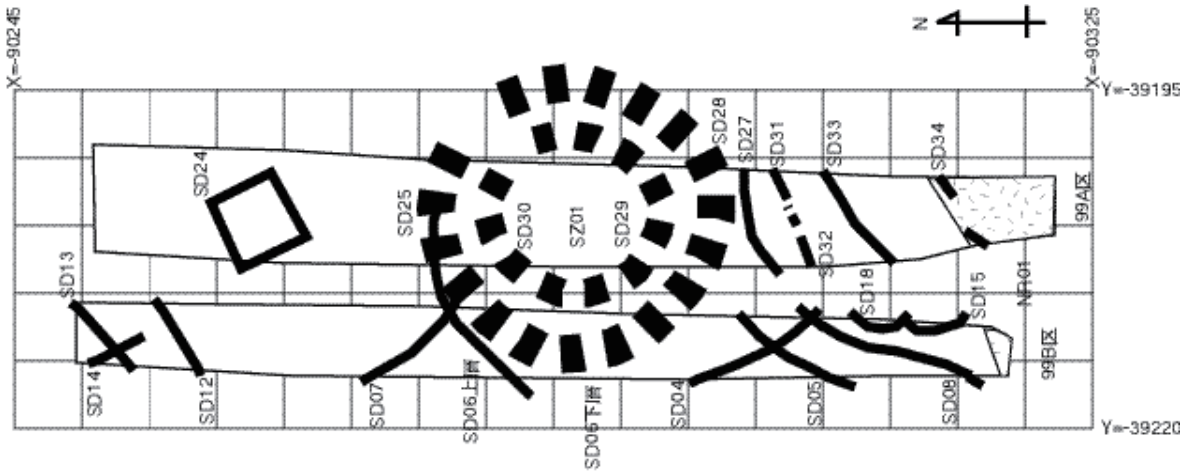
古　代　古代（7 世紀中葉）の遺構としては、調査区中央付近で古墳の周溝を再利用した溝（A 区 SD25・Ｂ区ＳＤ 07）や北部で一辺約 5 メートルの正方形にめぐる溝（A 区ＳＤ 24）、それとほぼ方向の合っている溝（Ｂ区ＳＤ 12･13･14）等が検出された。Ｂ区ＳＤ 06 上層は古墳周溝であるＳＤ 06 下層の北西辺をさらに深めるように掘られており、Ｂ区西壁へ抜けていく。以上の溝は、ほぼ北東方向に平行または垂直なので、この時代にはなんらか（例えば当時付近にあった河川）の規制により方向付けられていた可能性がある。主な遺物としては、A 区ＳＤ 25 から須恵器（I-17 式期。器種は多岐にわたる）・土師器・鞴の羽口など、A 区ＳＤ 24 から土師器・管状土錘の集積（約 30 点）があげられる。また、A 区南東部の上層の遺構や最南部の自然流路（A 区ＮＲ 01）から 8 世紀の瓦片が若干出土しているので、付近に古代寺院があった可能性が考えられる。

中　世　中世（平安末～鎌倉時代）の遺構としては、A 区北東部とＢ区中央中軸部で主に南北方向に長辺をとった方形土坑が 70 基余り検出された。単独のものもあるが、ほとんどが切り合っている。掘り形は立ち上がりが急な箱掘りで深さ数十㎝。大きさは大小さまざまあるが、平均的なもので長辺 180 ㎝、短辺 90 ㎝程度である。主な遺物として山茶椀片等が出土している。墓穴として掘られたと思われるが、人骨等の遺体はいっさい出土していない。A 区北部のピット（Ｐ 227）からは完形の山茶椀（平安末）が 1 点出土している。また、最南部の自然流路（A・Ｂ区ＮＲ 01）は中世のものと考えられる。A 区南端で掘りきった底部の標高は－ 170 ㎝であり、さらに南へ落ち込んでいくようである。主な遺物は、古墳時代の溝を削って混入したと考えられる 5 世紀末の須恵器・埴輪片、古代瓦（8 世紀）、山茶椀、馬歯・馬骨などである。

ま と め　今年度の調査によって、主に 3 時期に区分されることが分かったが、住居跡などの直接生活に関係する遺構はいずれの時期においても検出されなかった。生業の痕跡として古代の土錘群や鞴の羽口が出土しているので、付近に居住域はあったと思われる。現在調査区南東に隣接するように墓地があり、江戸時代後期の村絵図にその墓地とその南西に位置する見越村の集落がすでに描かれているので、中世にはすでにその集落が存在し自然流路を挟んで北東方に墓地が形成されていたと思われる。なお、滋賀県醒ヶ井松尾寺所蔵鰐口銘文に「尾州海西郡三腰（現在の見越）極楽寺金鼓　弘安六年癸未（1283 年）十月十八日大工西善」とあるのが「みこし」の地名の初見である。（木川正夫）



第１図　調査区位置図（１：5,000）



第２図　古墳時代・古代遺構配置図（１：600）



A区　ＳＤ 25・28 上層（北より）



B区　ＳＤ 06（北より）



A区　ＳＤ 28 埴輪片・馬歯出土状況（南より）



B区　ＳＤ 06 須恵器等出土状況（西より）



A区　ＳＤ 25 須恵器等出土状況（西より）



A区　ＳＤ 25 中央部須恵器等出土状況（西よ



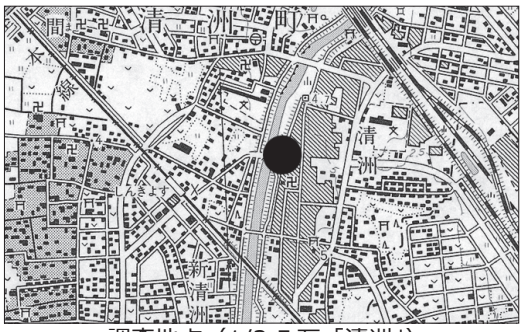
A区　ＳＤ 24 管状土錘群出土状況（南より）



A区　ピット 227 山茶椀出土状況（北より）

きよすじょうかまち 清洲城下町遺跡

所 在 地　西春日井郡清洲町
調査理由　五条川河川改修
調査期間　平成 11 年 12 月～ 12 年 3 月
調査面積　1,700 ㎡
担 当 者　春日井　毅・伊藤太佳彦・木川正夫



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

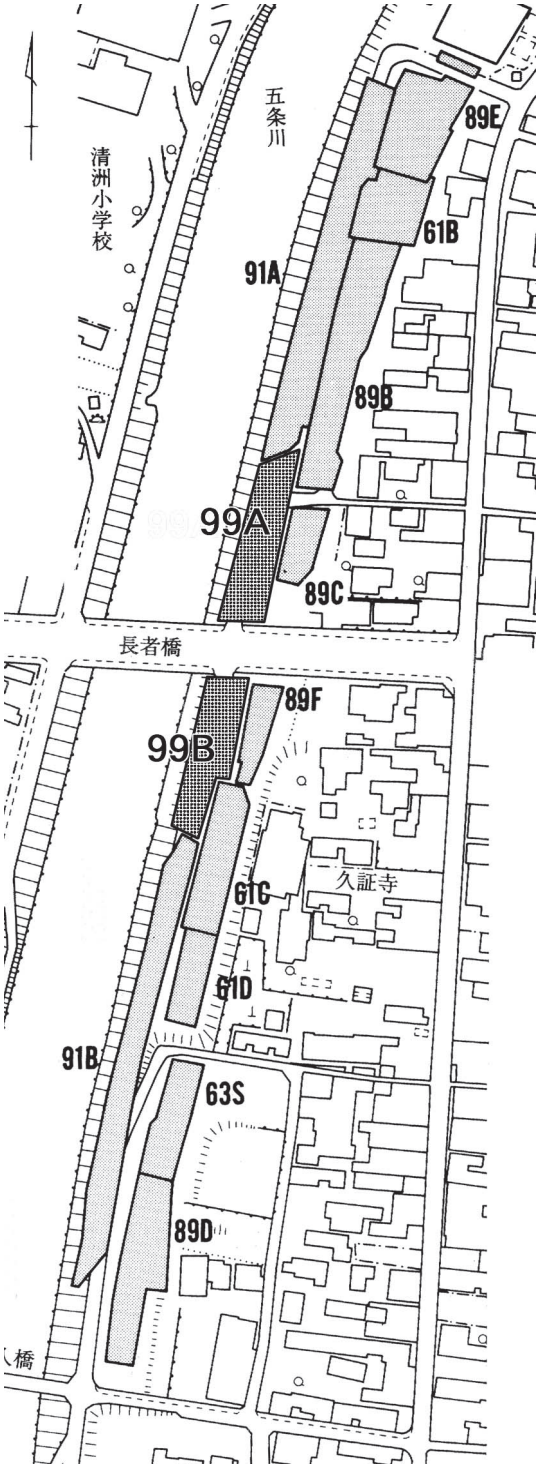
調査の経過　清洲城下町遺跡は五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。今年度は五条川の左岸、長者橋の北側のＡ区と南側のＢ区の調査を行った。

調査の概要　99 Ａ区は本町地区の一番南に位置し、標高 2.5 ｍを第 1 面、地山の砂層直上を第 2 面として調査を行った。調査区東側は大きく削り取られた状態になっていて、第 1 面から約 50 ㎝程低くなっている（ＳＸ 01）。ＳＸ 01 は南側ではクランク状に曲がっており、89 Ｃ区で検出されたような畝状遺構が展開する。もともとは城下町後期の遺構が東側部分から 89 Ｃ区にかけても展開していたものと思われる。

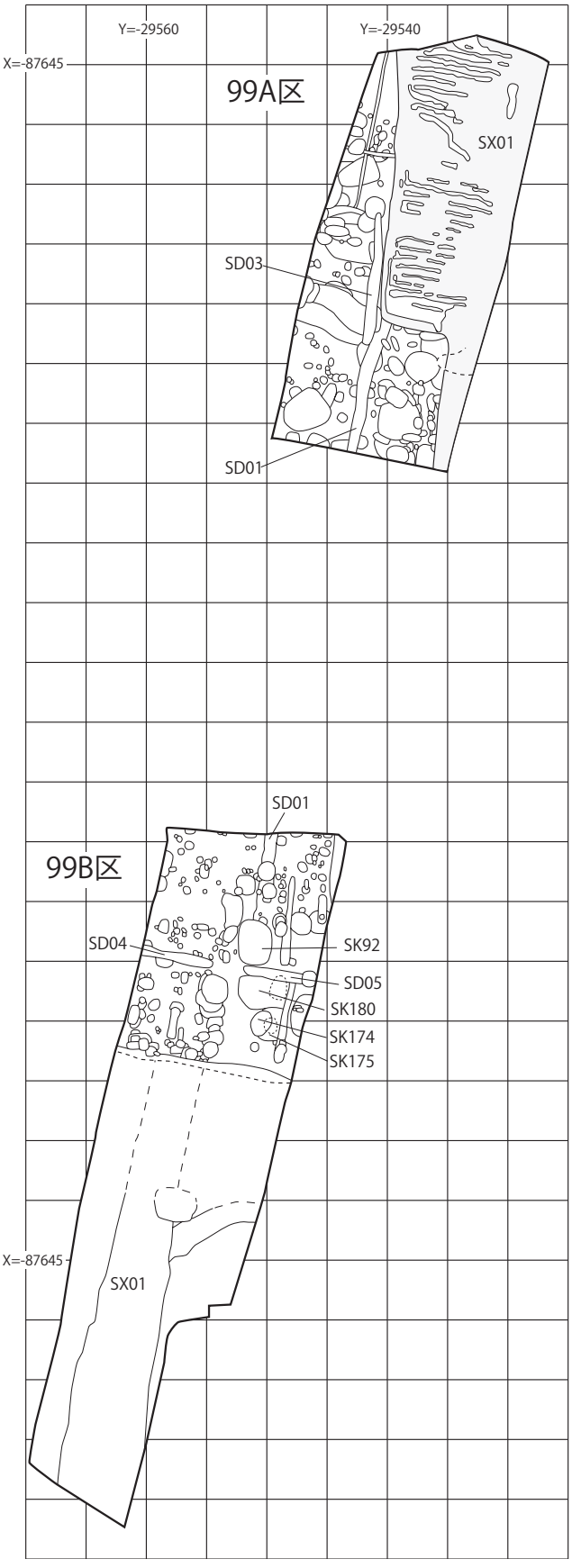
調査区中央には南北方向に溝があり（ＳＤ 01 およびＳＤ 03）、その両側に井戸や廃棄土坑が展開している。廃棄土坑内からはトリベや銅滓などが多く確認でき、鋳造関係の遺構があったと思われる。第 2 面ではＳＤ 03 に切られる東西方向の溝を 3 条検出したが、その内の 1 条は城下町期前期の区画溝と考えられ、天正地震の痕跡が確認できた。

99 Ｂ区は南部地区の一番北に位置し、標高 2.4 ｍを第 1 面、地山のシルト層直上を第 2 面として調査を行った。調査区の南側には 91 Ｂ区の北半部と同様に江戸時代以降の整地層が堆積しているが、今回この部分で旧堤防（ＳＸ 01）を確認することができた。一方、調査区北側では城下町期後期の遺構を確認できた。南北方向の溝であるＳＤ 01 は 99 Ａ区のＳＤ 01 とつながる溝と考えられるが、これと直交する形で区画溝であるＳＤ 04 および 05 が存在する。ＳＤ 04 および 05 の周辺にはやはり井戸や廃棄土坑群が展開し、99 Ａ区と同じような状況がうかがえる。

ま と め　今回の調査区では江戸時代以降と思われる整地層などによって半分近くが削られているものの、城下町期後期の遺構群がかなり密に展開している様子を確認することができた。整地層部分についても同様に遺構が展開していたものと考えられ、城下町期後期の町屋の状況を復原するうえで重要な情報を提供できたと言えるだろう。さらに整地層部分でも、Ａ区では 89 Ｃ区の畝状遺構との関連を、Ｂ区では旧堤防の存在を確認できたことは大きな成果であった。（伊藤太佳彦）



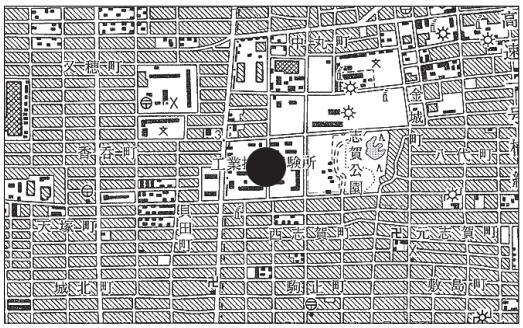
第１図　調査区位置図（１：2,500）



第２図　遺構図

平手町（ひらてちょう）遺跡

所 在 地　名古屋市北区平手町１丁目１番地
調査理由　環境整備工事に伴う事前調査
調査期間　平成 11 年４月～９月
調査面積　1,500 ㎡
担 当 者　赤塚次郎・加藤博紀・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「名古屋北部」）

調査の経過　発掘調査は通産省名古屋工業技術院名古屋工業技術研究所内の環境整備工事に伴うもので、通産省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 11 年４月～９月にかけて試掘・立会調査を含め 1,500 ㎡を対象に行った。

立地と環境　平手町遺跡は、名古屋市北区平手町１丁目に所在する。名古屋市の北東から南西に流れる庄内川と矢田川の合流地点から約２㎞南下した標高５ｍ前後の沖積地に立地する。隣接する遺跡としては、南西に弥生時代の拠点集落として有名な西志賀遺跡、北東に弥生時代から戦国時代にいたる複合遺跡である志賀公園遺跡がある。

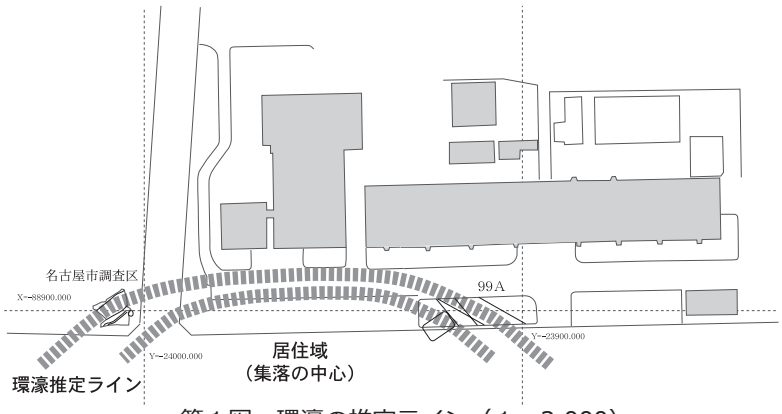
調査の概要　調査区はＡ～Ｃ区を設定した。そのうちＢ区は遺構・遺物ともに希薄であったため、トレンチ調査を行った。Ｃ区は調査対象深度が上面遺構の検出面に相当したため、遺構検出に留めた。遺構・遺物が確認できたＡ区について、弥生時代に関して概要を記す。

弥生時代　弥生時代の遺構としては、環濠と推定される溝２条、竪穴住居１軒、墳丘墓の溝１条などを検出した。

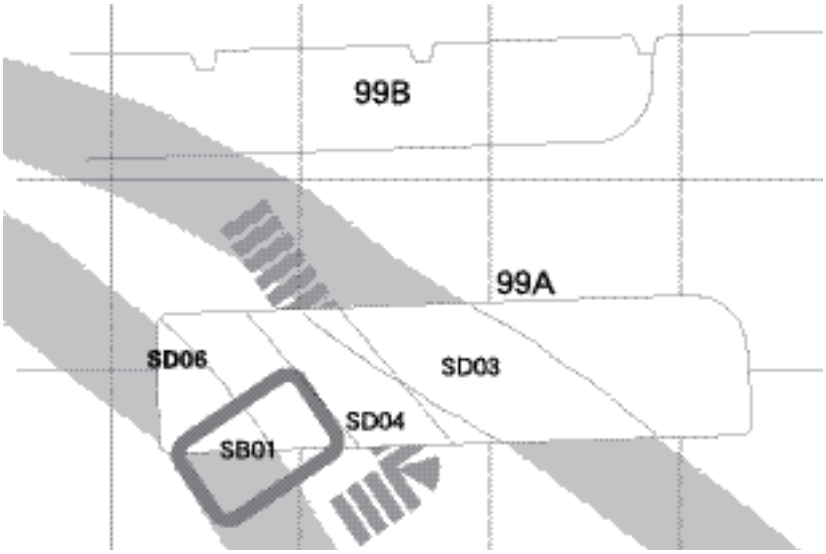
環濠と推定される溝は調査区を東西に縦断するＳＤ 03 と調査区南西隅にかろうじて検出されたＳＤ 06 がある。ＳＤ 03 は断面形が逆台形、上部幅約７ｍ、下部幅約２ｍ、深さ 1.2 ｍの規模を有する。堆積状況については、ハマグリを主体とする混貝土層が大きく３層、その間に炭化物層や焼土層を挟むことが観察できた。溝の埋没時期については、出土土器から中期中葉（貝田町式）を中心に、中期前葉（朝日式）～中期末葉（高蔵式）が比定できる。一方、ＳＤ 06 は調査区隅で検出されたため規模が推定できない。堆積状況については、カキ主体の混土貝層とハマグリ主体の混土貝層が観察できた。溝の埋没時期については、出土土器から前期後半を中心に上層では中期前葉（朝日式）が比定できる。

その他の遺構としては、土塁と推定できる版築状の堆積がＳＤ 03 とＳＤ 06 の間に確認できた。また、土塁の上位には中期末（高蔵式）の竪穴住居、ＳＤ 03 に重なって確認できた後期前半（山中式）に比定できる墳丘墓の溝（ＳＤ 04）がある。

今回の調査で検出した溝（ＳＤ 03）は名古屋市教育委員会の調査（1995 年）によって検出された溝の規模や出土遺物の時期から同一遺構の可能性が高い。したがって、ＳＤ 03 は西志賀遺跡の北端を取り囲む環濠として捉えられる。（永井宏幸）



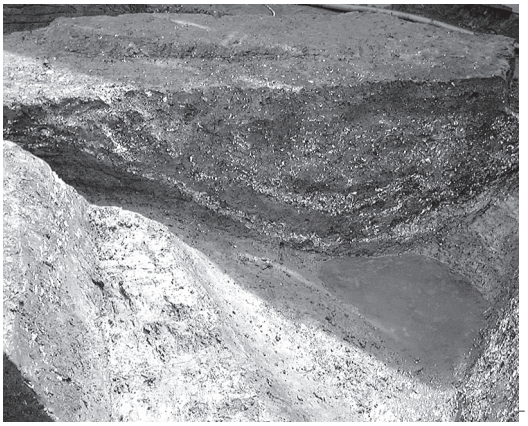
第１図　環濠の推定ライン（１：2,000）



第２図　遺構全体図（１：400）



ＳＤ 03 断面



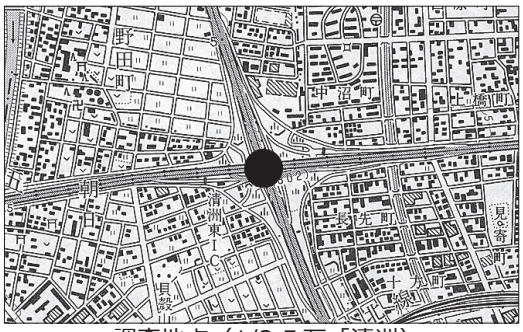
ＳＤ 06 断面



99 Ａ弥生時代の遺構（西から）

朝日（あさひ）遺跡

所 在 地　西春日井郡清洲町、新川町、春日町、名古屋市西区
調査理由　名岐道路建設
調査期間　平成 11 年 10 月～平成 12 年 3 月
調査面積　2,400 ㎡
担 当 者　赤塚次郎、鈴木正貴、蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過　名岐道路建設に伴い、朝日遺跡にかかる部分について事前調査を行う必要があった。そこで昨年度より名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通して委託された当埋蔵文化財センターにおいて発掘調査を実施している。今年度の調査は平成 10 年度年報における朝日遺跡「調査区の表記について」に準じてＡ区に 99Aa 区～ 99Ae 区の５ヶ所、Ｂ区に 99Ba 区・99Bb 区の２ヶ所、Ｃ区に 99Ca 区～ 99Ci 区の９ヶ所、Ｄ区に 99Da 区・99Db 区の２ヶ所の併せて 18 ヶ所の調査区を設定し、2,400 ㎡を調査した。調査期間は平成 11 年 10 月から平成 12 年３月である。

立地と環境　朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に同春日町、新川町、名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落で、現在では五条川左岸の後背湿地に当たる地域となっている。

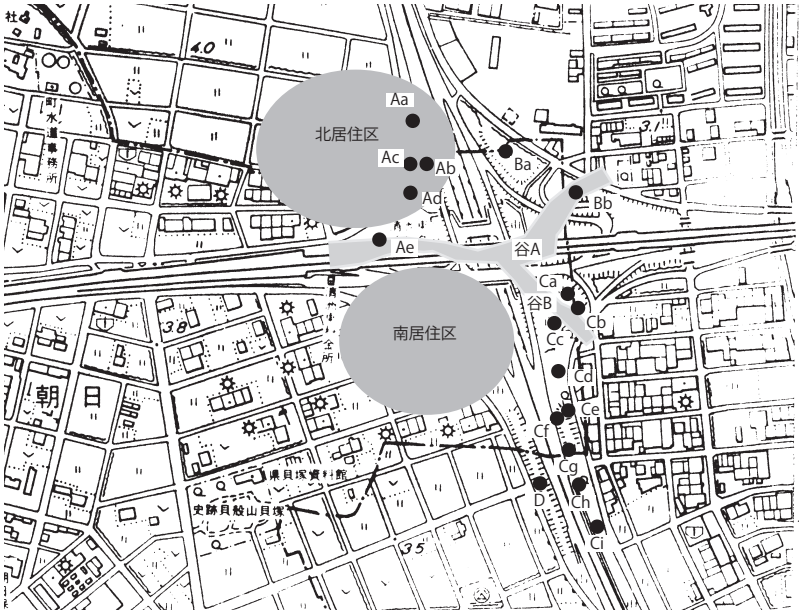
調査の概要　99Aa 区～ 99Ad 区は、これまでの調査で「北居住区」に想定されている地域で、表土下、標高 2.6 ｍにおいて灰褐色粘質シルトが 20 ～ 40 ㎝堆積しており、以下 60 ～ 80 ㎝の層厚で弥生時代の遺物包含層となる黒色シルトがあり、標高 1.8 ｍ前後で地山層となる灰オリーブ色砂が堆積していた。遺構遺物は弥生時代後期から古墳時代前期初頭のものが主体で、遺構では竪穴住居、土坑、溝等を検出した。竪穴住居は短辺が３ｍ～５ｍ、長辺が４ｍ～６ｍ程の平面方形から長方形の掘り形を持つもので、深さ 30 ㎝前後の深さで残存しているものがあった。

99Ba 区は「北居住区」の環濠帯を挟んで東に広がる弥生時代中期の居住域と墓域が想定される地域で、表土下の標高 2.6 ｍから下に 50 ㎝程の弥生時代の遺物包含層である黒色シルト層が堆積していた。上面において弥生時代中期後葉の方形周溝墓１基、下面にて弥生時代中期前半の竪穴住居２棟、方形周溝墓１基、土坑を検出した。上面の方形周溝墓は、検出した１つのコーナー部が陸橋部となり、下面で検出した方形周溝墓は、４隅が切れる平面長方形のマウンドになる。下面の方形周溝墓の北溝と東溝において 30 ㎝程深くなる長さ 1.25 ｍと 1.35 ｍの溝内土坑があった。

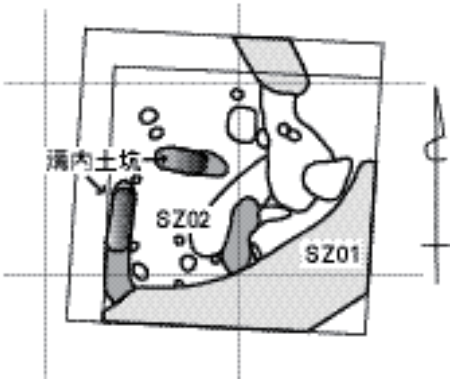
99Bb 区は「谷Ａ」にあたる地域で、表土下標高 2.1 ｍ前後にて旧河道上面を検出した。確認できた河道底は標高－ 0.8 ｍで、それより下層は灰色粗粒砂層となる。旧河道は１～６層に分けて掘削した。１層は弥生時代後期以後の堆積で、２層が弥生時代中期後葉、３層～５層が弥生時代中期中葉、６層が弥生時代中期前葉～中葉の堆積であった。５層は溝状に堆積したマガキを主体にハマグリ、シジミ、アカニシが混じる貝層で、貝層の西側から東に順に堆積していく４つの貝層に分けられた。貝層からは装飾のある柄、銛などの骨角製品、獣骨などが検出された。

99Ce 区は昨年度の 98Ca 区に隣接する調査区で表土下標高 1.7 mにおいて灰褐色粘質シルトが 10 ㎝前後堆積しており、以下 40 ㎝前後の弥生時代遺物包含層である黒色シルト層が堆積し、標高 1.3 m前後にて地山の灰オリーブ色シルトの層となる。遺構遺物は弥生時代中期後葉のものが主体で、黒色シルト層上面において溝２条、方形周溝墓３基を検出した。溝は「南居住区」の南東に位置する居住区の南限を画すると思われるもので、どちらも幅 3.5 m前後、深さ 0.8 m～ 0.9 m前後の断面逆台形状で、北東から南西にめぐり、溝の上層は古墳時代前期の洪水と思われる砂の堆積で埋まっていた。溝の南側にはマウンドの大きさが５m前後の方形周溝墓が３基検出され、溝の南東に幅 10 m程の墓域が展開する。

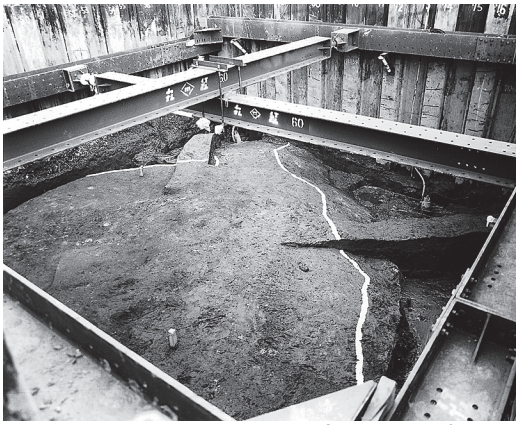
99Cg 区～ 99Ci 区は 98 年度調査のＣ区と同様、遺構遺物とも稀薄で、弥生時代の遺物包含層と思われる黒色シルト層も薄く、湿地状の堆積が確認された。　（蔭山誠一）



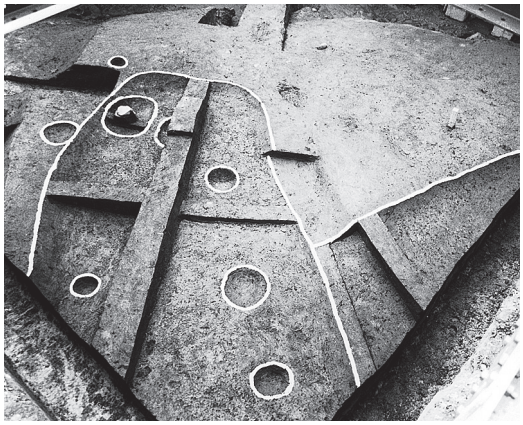
第１図　調査区位置図（約１：10,000）



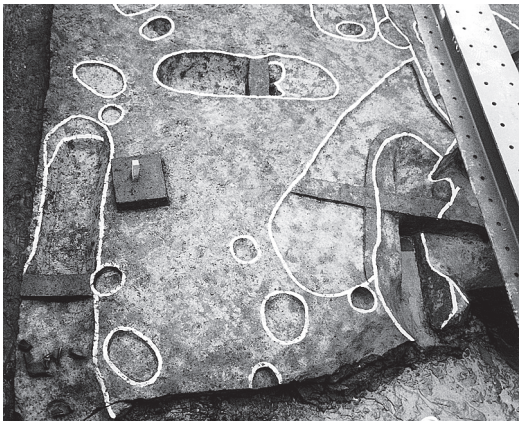
第２図　99 Ｂａ区下面（１：200）



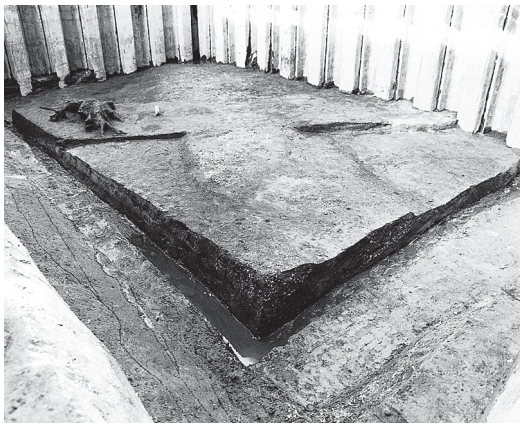
99 Ｂａ区上面の方形周溝墓（ＳＺ 01　南西か



99 Ｂａ区　下面の竪穴住居（北西より）



99 Ｂａ区　下面の方形周溝墓（ＳＺ 02　南よ



99 Ｂｂ区　旧河道の貝層上面（南東より）



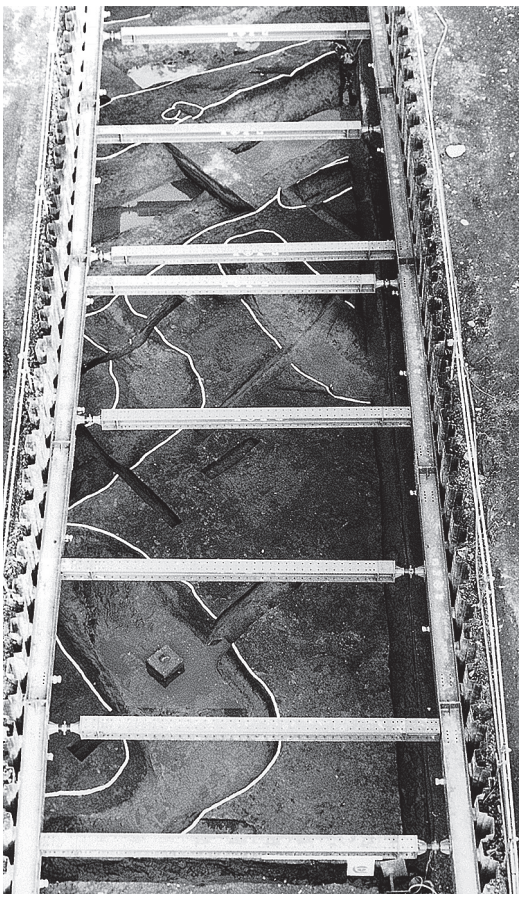
99 Ｂｂ区　旧河道の堆積（西より）



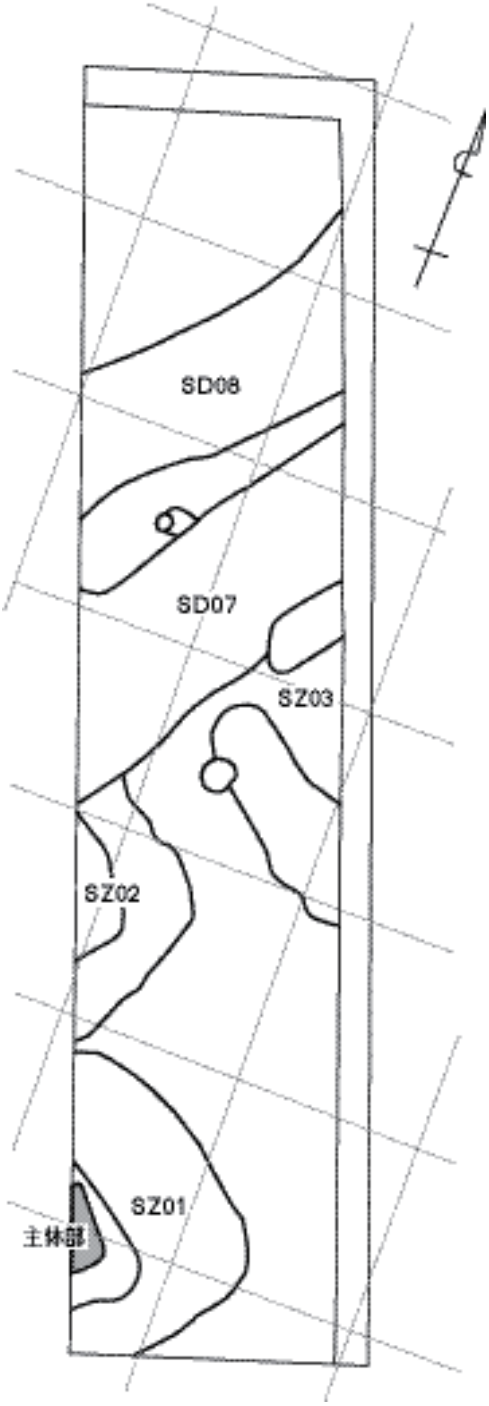
99 Ｂｂ区　旧河道の貝層（西より）



99 Ｃｅ区　全景（２面　南より）



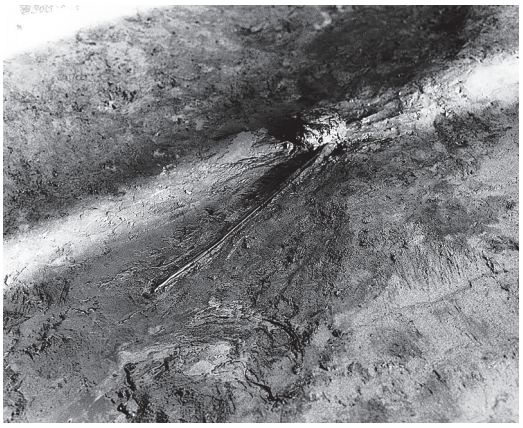
99 Ｃｅ区　全景（２面　南より）



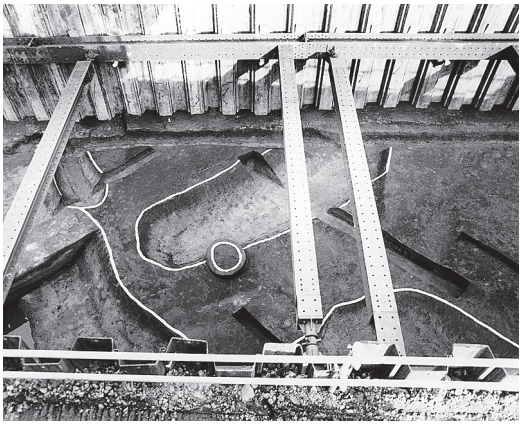
第3図　99Ｃｅ区2面（1：200）



99Ｃｅ区　2条の区画溝（ＳＤ07・08　南西より）



99Ｃｅ区　ＳＤ07出土木製品（南より）



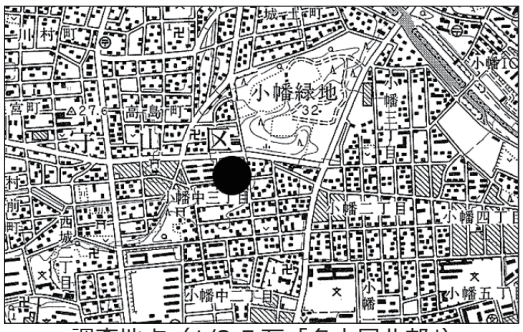
99Ｃｅ区　方形周溝墓（ＳＺ03　西より）



99Ｃｅ区　方形周溝墓（ＳＺ01　東より）

牛牧（うしまき）遺跡

所 在 地　名古屋市守山区大字牛牧・高島町・小幡中３丁目
調査理由　県営守山住宅建て替えに伴う事前調査
調査期間　平成 11 年６月～ 11 月
調査面積　1,000 ㎡
担 当 者　北村和宏・魚住英史・川添和暁



調査地点（1/2.5 万「名古屋北部」）

調査の経過　本年度の調査は県営守山住宅建て替えに伴う事前調査として、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けたものである。調査面積 1,000 ㎡をＡ・Ｂの２調査区に分けて、平成 11 年６月から 11 月にかけて調査が実施された（第１図）。

立地と環境　牛牧遺跡は、名古屋市の北東部、名古屋市守山区大字牛牧・高島町・小幡中３丁目周辺に所在している。本遺跡は、庄内川と矢田川とに挟まれた熱田台地相当の守山面上にあり、庄内川に向って広がる台地縁辺部に位置している。1950 年代末に守山市教育委員会が行った第一・二次調査と、1961 年に名古屋市教育委員会が行った第三次調査によって、縄文時代晩期の土器棺墓群・平地式住居などが検出され、縄文時代晩期の遺跡として周知となっていた。

調査の概要　調査の結果、牛牧遺跡は縄文時代晩期・弥生時代中期・古墳時代中期・中世から戦国期にかけての４時期に分けられる。その中でも縄文時代晩期の遺構数・遺物数が圧倒的に多く、この時期が遺跡の中心の時期であったと考えられる。基本層序は上から、表土および礫層（住宅建設による）・灰褐色粘土質シルト層（旧耕作土　約 20 ㎝）・黒色土（縄文時代晩期の遺物包含層　約 30 ㎝）・茶褐色土（約 10 ㎝）・明黄褐色礫層（守山面）である。

縄文時代晩期　縄文時代晩期の遺構としては、土器棺墓群・住居跡・ピット・土坑が検出された（第２図）。今回の調査成果でも中心となるのは、土器棺墓群である（第３図、写真１～８）。土器棺墓は、Ａ区で 24 基、Ｂ区で 17 基の計 41 基が検出された。検出時には旧耕作土直下にて上部が露出している例が多く、遺構自体に何かしらの破損を受けているものがほとんどである。41 基のうち、合せ口の例は２例のみであり、他の 39 基は単棺であった。単棺の土器棺では他の土器片にて蓋がなされているものも数例見られる。棺身は立位に置かれた１例を除いて、ほとんどが横位である。棺に使用された土器は、表面調整が条痕もしくはナデ・削りのみの粗製深鉢がほとんどであるものの、ＳＺ 34・41・44 のような例も検出された。土器棺墓が営まれた時期はその土器型式から、晩期前葉の元刈谷式期から晩期後葉の突帯文期まで継続して営まれたと考えられる。

住居跡としてはＳＢ 05 １軒のみが検出された。ＳＢ 05 は、２ｍ×３ｍほどの小型の竪穴式住居であり、楕円形プランを呈している。住居内床面の広い範囲で被熱した痕跡が見られた（写真 13）。その他の遺構に関しては、石剣・磨製石斧・敲石・砥石が一括して納められていた土坑や、打製石斧・磨製石斧が納められていたピット（写真 12）が注目される。

遺物も縄文時代に属するものの割合が高い。出土遺物は、土器・土製品・石器・石製品である。土器は、深鉢・浅鉢・台付鉢・注口土器などの器種がみられる。晩期初頭に属するものから

みられるが、一部後期にさかのぼる可能性もある。土製品は、土偶・土製耳飾りが出土した。石器は、石鏃・石錐・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・石錘・磨石・敲石・砥石などが出土した。点数では石鏃が最も多く、石材は下呂石の割合がとても高い。石製品は、石棒・独鈷石・垂飾などが出土している。

弥生時代　弥生時代中期の遺構としては、竪穴式住居が１軒検出された（ＳＢ 02)。床面から多くの炭化材が検出され、また弥生時代中期中葉と思われる壷が出土している。

古墳時代　古墳時代の遺構に関しては、竪穴状の遺構が２基検出された（ＳＢ 01・ＳＸ 03)。ＳＢ 01 は縄文土器を出す炉址があることから、縄文時代の住居跡に重複してつくられた可能性がある。また、ＳＸ 03 は、一辺 10 mほどの方形プランのなかに、幅１mほどの溝状の浅い落ち込みが検出されている。そのなかに、６世紀前葉の高杯・坏・器台といった須恵器が出土した。特に器台は、装飾付き器台であり、形状に特徴があり注目される。

中世以降　中世以降の遺構に関しては、柵列が一列検出された。

ま と め　今回の調査の成果は、以下の通りである。

縄文時代晩期の土器棺墓群がまとまって発見されたことである。発見数は、尾張地域においては最多となり、縄文時代晩期の葬制の研究に良好な資料を提示した。

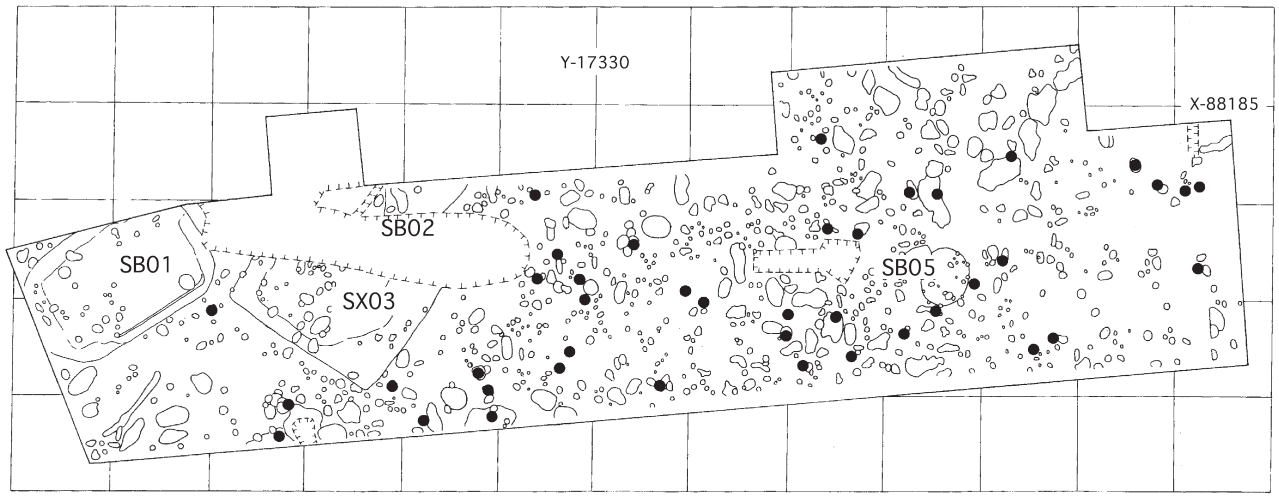
また、竪穴住居跡・土坑群・ピット群など、集落に関わる多くの遺構が検出された。当時の中心的な集落として、牛牧遺跡を検討することが可能である。

遺物も、縄文時代晩期初頭から後葉までのものが豊富に出土している。土器・石器のみならず、土偶や・石棒をはじめ、当時の精神文化に関わる遺物も出土している。また土器や土偶などに赤色顔料が施されているなど、注目すべき遺物が多い。

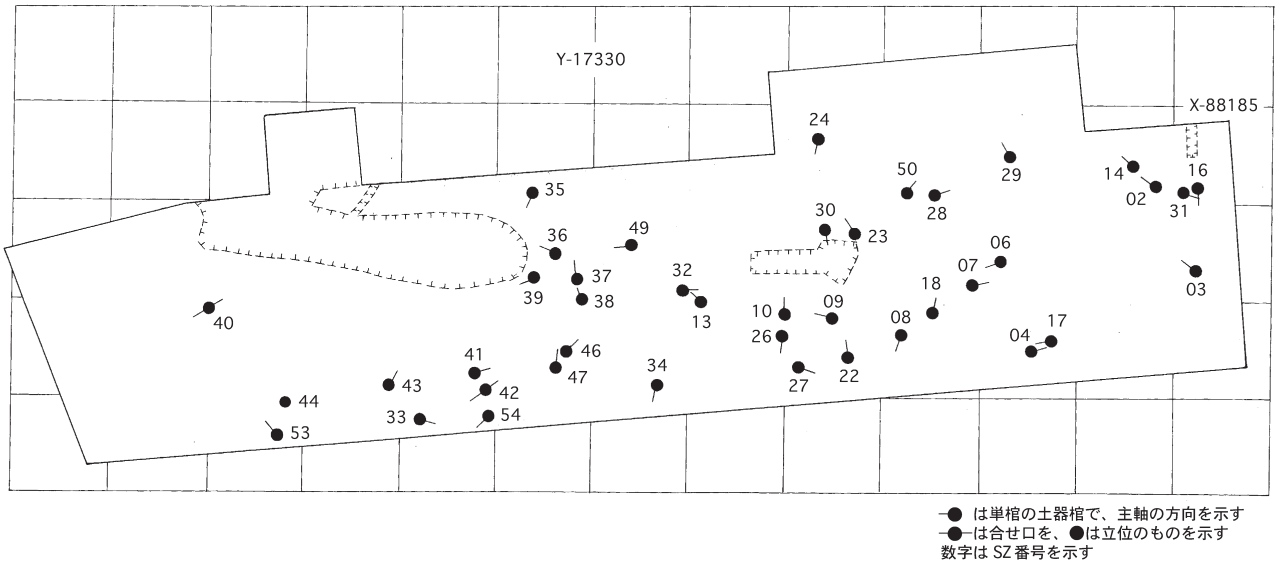
また縄文時代のみならず、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物も検出された。特に、古墳時代の装飾付器台は注目される遺物である。　（魚住英史・川添和暁）



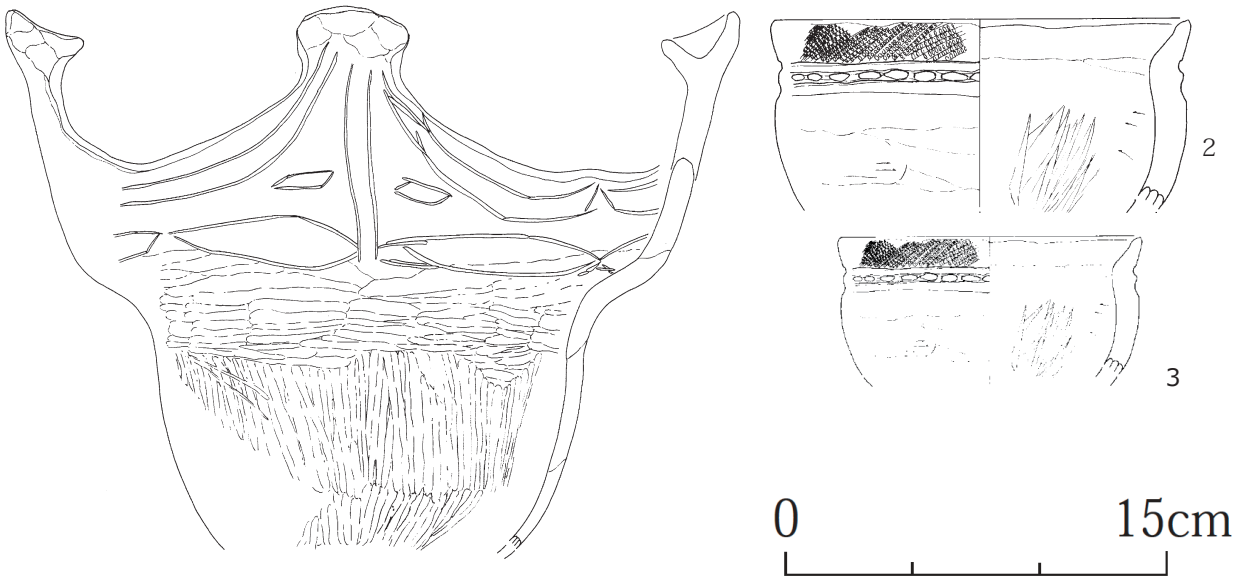
第１図　調査区配置図（１：1,000）

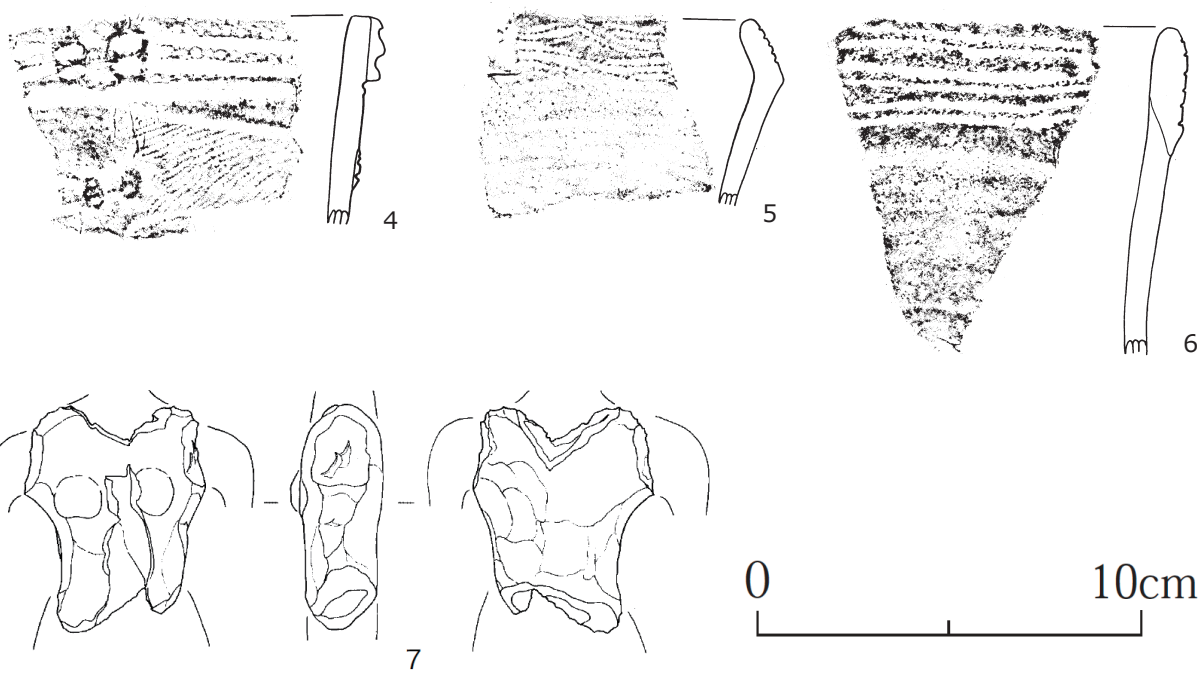


第２図　　下面遺構配置図（１：400）



第３図　土器棺配置図（１：400）





第４図　出土遺物実測図

（１～３は縮尺１：２、４～７は同１：３）



写真１．ＳＺ 04 出土状況（東より）



写真２．ＳＺ 13 出土状況（南より）



写真３．ＳＺ 24 出土状況（北より）

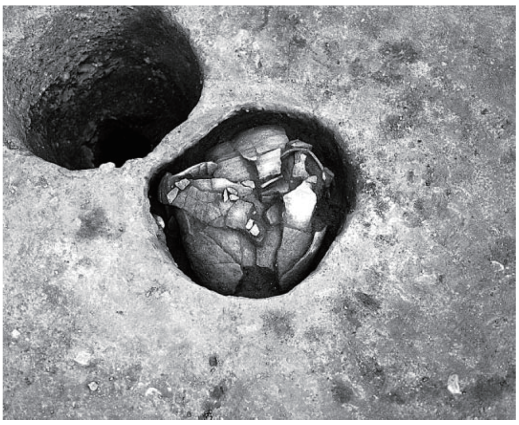


写真４．ＳＺ 27 出土状況（東より）



写真５．ＳＺ 34 出土状況（北より）



写真６．ＳＺ 41 出土状況（西より）



写真７．ＳＺ 40 出土状況（南東より）



写真８．ＳＺ 42 出土状況（南より）



写真９．土偶出土状況



写真 10．石棒出土状況



写真 11．注口土器出土状況



写真 12． P 475 遺物出土状況（打製石斧･磨製石斧）



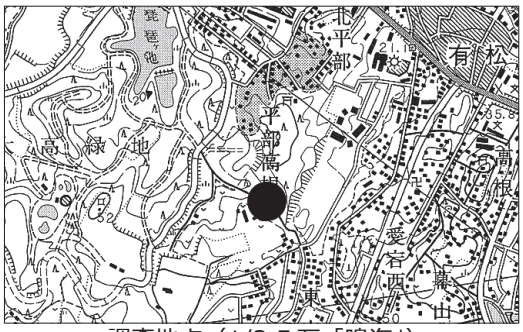
写真 13． S B 05（南より）



写真 14．装飾付器台出土状況（北西より）

ＮＡ 311 号窯跡

所 在 地　名古屋市緑区大高町平部高根
調査理由　国道 302 号線建設
調査期間　平成 10 年５月～９月
調査面積　1,800 ㎡
担 当 者　木下　一・竹内　睦・池本正明



調査地点（1/2.5 万「鳴海」）

調査の経過　今回の調査原因は、国道 302 号線建設に先立ったもので、総面積は 1,800 ㎡。調査期間は、平成 10 年５月～９月を要した。

立地と環境　ＮＡ 311 号窯は、名古屋市緑区大高町平部高根に所在する、猿投窯鳴海地区有松支群に属する窯業遺跡である。調査区周辺は、開発により旧地形が失われ、ほとんどが住宅地として利用されているが、遺跡の所在地だけが自然林として残存していた。遺跡の所在地は、地形的には、南側に向けて傾斜する緩やかな斜面である。

調査の概要　調査の結果、窯体３基とそれに伴う灰原などを検出した。検出できた窯体は、全て分焔柱を有する窖窯である。ここでは、ＳＹ 01 ～ 03 と呼称する。

ＳＹ 01 は全長 15.2 mを測る。主軸方向はＮ -24° - Ｅで、焚口がほぼ南向きに開口する。煙道部は全長 2.9 m。平面形が全て残存し、焼成室と煙道部との境界部分では、わずかな範囲ではあるが、天井部も確認できる。天井高は 0.7 mを測る。焼成室は全長 8.0 m、最大幅 2.4 m。壁面は、分焔柱基底部上端から計測して、5.2 m地点で、最大残存値の 0.7 mを測る。床面は、断面観察によれば２枚が確認できた。しかし、その残存状況は良好とは言えず、二次面がほぼ完全に流失し、一次面が焼成室上部でわずかに残存しているにすぎない。

ＳＹ 02 は全長 11.8 mが残存する。主軸方向はＮ -38° - Ｅで、焚口がほぼ南向きに開口する。煙道部は 0.9 mを残して流失している。焼成室は全長 6.5 m、最大幅 2.9 m。下半には、天井部が残存する。天井高は 1.2 mとなる。床面は、２枚が確認でき、二次面では床下施設も設置される。確認できたそれは、一次面を剥がし、焼成不良の椀を敷き詰めて、充填土と炭化物層でこれを覆い、さらに二次面を貼る作業となる。焼成不良の椀を敷き詰めた範囲は、焼成室全域ではなく、分焔柱基底部上端から計測して 1.1 mから 3.7 mまでとなる。

ＳＹ 03 は全長 10.9 mが残存する。主軸方向はＮ -48° - Ｅで、焚口がほぼ南向きに開口する。煙道部は 1.5 mを残して流失している。焼成室は全長 6.9 m、最大幅 2.7 m。下半には、天井部が残存する。天井高は 1.1 mとなる。床面は、２枚が確認でき、二次面上には若干の馬爪焼台が焼成時の原位置を留めていた。また、二次面では床下施設も設置されている。確認できたそれは、一次面を剥がし、充填土と炭化物層でこれを覆い、さらに二次面を貼った作業で、ＳＹ 02 のように焼成不良の椀を敷き詰めるものではない。

灰原は、約 230 ㎡に及び、三群の灰層によって構成される。これらは、上記した窯体にそれぞれ伴うものと考えられる。また、灰原の東側では、灰層を覆う形で遺物包含層が堆積している。分布範囲は、約 120 ㎡に及ぶ。状況から判断すると、灰層の再堆積土層である可能性が高い。調査区外に、別の窯体が存在していた可能性を考えさせる。

この他に今回確認した特徴的な遺構としては、焼成不良品が多数出土した土坑ＳＫ 03 がある。ＳＹ 01 に近接して位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は、長径 1.8 m、短径 1.2 m、検出面からの深さは 0.3 mを測る。

出土遺物は、整理用コンテナー 700 箱に及ぶ。ほとんどが、ほぼ 13 世紀前葉を中心とする灰釉系陶器と、その焼成に使用した馬爪焼台である。灰釉系陶器の器種には、椀、小皿、鉢などが確認できるが、前二者でそのほとんどを占める状況にある。

ま と め　今回検出できた３基の窯体は、いずれも窯体の残存状態がほぼ良好で、全て鎌倉時代初期を中心とした比較的短期間に集中している。灰原の堆積状況から、ＳＹ 03 が最も古く、ＳＹ 02、ＳＹ 01 へと、操業がほぼ連続している事が考えられる。このため、窯体構造差や生産内容を相互に直接比較することができ、中世猿投窯の基礎資料としての役割を担うものと考えられる。（池本正明）



調査地点（１：500）



調査区全景



全景



ＳＹ 01 検出状況



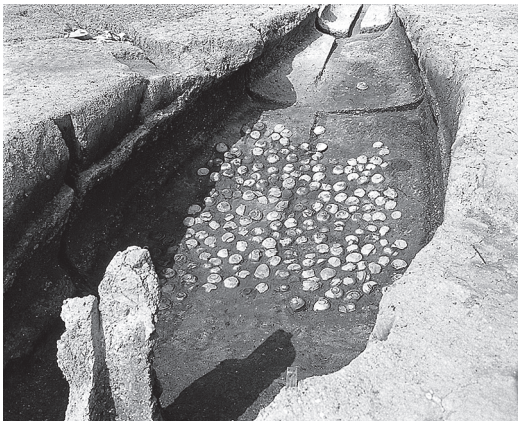
ＳＹ 02（右）・ＳＹ 03（左）検出状況



ＳＹ 02・ＳＹ 03 床面状況



ＳＹ 02 床下施設



ＳＹ 02 床下施設拡大



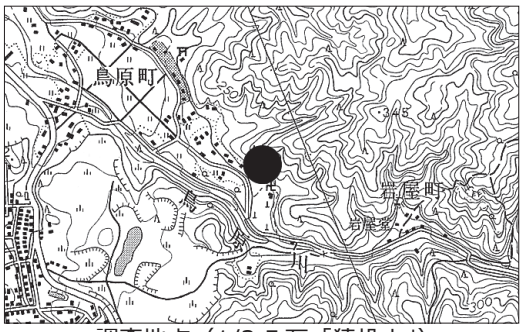
ＳＹ 03 前庭部土坑



ＳＫ 03

鶯窯跡（うぐいす）

所 在 地　瀬戸市岩屋町・鳥原町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 11 年 4 月～ 11 月
調査面積　400 ㎡
担 当 者　小澤一弘・宇佐見　守・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　鶯窯跡は、瀬戸市岩屋町・鳥原町に所在する 14 世紀の後葉から 15 世紀前半の窯跡で発掘調査は東海環状自動車道建設のため愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 10 年度は平成 11 年 1 月から 3 月にかけて灰原部分と斜面直下の平坦部分の 900 ㎡調査を実施した。平成 11 年度では窯体が想定される尾根直下の調査区Ａ区と昨年度の調査区の北側灰原部分のＢ区の二つの調査区 400 ㎡を平成 11 年 4 月から 11 月にかけて実施した。また窯体の位置を確認するためにＡ区の下方にトレンチを設定し、工事用道路の橋脚部分（昨年度の調査区の東）についてもトレンチ（Ｃ～Ｌ）を設定し、それぞれ実施した。

立地と環境　瀬戸市のほぼ中央に広がる品野盆地の一角で、水野川流域に広がる盆地中央部から南東方向へ細長く伸びる谷状の奥部分に鶯窯跡は位置し、水野川の支流鳥原川と右岸段丘上に形成された狭小な沖積地を見下ろす標高 200 mから 237 mの南側斜面に立地している。周辺には、縄文時代早期・前期の鳥原縄文遺跡や岩屋堂遺跡、古墳時代以降の鳥原遺跡、近世後期から明治にかけて磁器を焼成した浄源寺西窯、そして昨年度の調査区の東には近世後期から明治期にかけての屋敷跡、源吉屋敷が知られている。

調査の概要　今年度の調査区は、尾根部分と窯体が想定された尾根直下の南斜面のＡ区と昨年度の調査区の北側にあたる灰原部分のＢ区の２調査区、Ａ区下方のトレンチ、工事用道路橋脚部分のトレンチの調査を実施した。Ａ区とＡ区下方のトレンチ調査からは窯体 1 基と工房跡８ヶ所を検出した。工房跡の一つＳＸ 01・Ｂからは焼成前の天目茶碗 5 枚重ねたものが 13 個出土した。窯体 1 基については保存されることとなった。Ｂ区の灰原部分では昨年度の調査区と同様に、厚い堆積層から膨大な量の遺物が出土した。

窯　跡　尾根に近い南斜面のＡ区南端で窯体 1 基（ＳＹ 01）の煙道部を、Ａ区下方のトレンチでは燃焼室を検出した。

ＳＹ 01 は、真北から西に約２度振れているもののほぼ真北を主軸として築かれており、標高は煙道部で 231 m、分焔柱部分で 227 mを測り、窯体の比高差はおよそ 4 mである。

窯体が保存となり焼成室部分は調査していないが、現存長は煙道部から燃焼室の焚口までの 5 m 60 ㎝を測る。窯体最大幅の計測値は得られなかったが、平面プランから 220 ㎝から 240 ㎝程度と推定できる。

燃焼室の左右窯壁には焼台や粘土を用いた改修痕が認められ、特に左窯壁では少なくとも３度の改修が顕著に見られる。当初は大きな石なども焼台とともに用いられている。各段階の窯壁はそれぞれがよく被熱している様子が確認でき、最終段階の窯壁間は 160 ㎝を測り、築窯当初の 270 ㎝からおよそ 60％程度にまで縮小されている。左右窯壁は左窯壁が

平面プランで通常みられる膨らみを確認できるのに対し、右窯壁は多少屈曲部が認められるもののほぼ直線に近いラインで燃焼室・煙道部に至るものと推測される。

分焔柱はほとんどが失われており、かろうじて基部のみが確認でき、残存部は隅丸長方形を呈し長軸は 50 ㎝ほどまで確認でき、短軸は 48 ㎝測る。床面よりの残存高は 15 ㎝である。燃焼室の埋土は赤色土が中心であり、一部に陶片、焼台、窯壁片などを含み粗い浅黄色の土層が混じる。燃焼室の床面は被熱し 5 ㎝から 10 ㎝の厚さで赤色硬化していた。

煙道部は、先端は削平されているもののほぼ確認することができ、床面傾斜は約 45 度から 50 度、そして段をなし約 10 度から 15 度の傾斜で先端まで続く。（織部匡久）

工 房 跡　今回の調査で工房跡と考えられる平坦面を 8 ヶ所確認した。構築された位置から大きく 3 群に分けることができ、ＳＸ 01・02・08 はＳＹ 01 の西側の南向き斜面を削平して、ＳＸ 06・07 はＳＹ 01 の東側の南向き斜面を削平して、ＳＸ 03・04・05 はＳＹ 01 の北側の尾根または尾根直下の南向き斜面を削平して構築されている。

ＳＸ 01 はＳＹ 01 の 10 m程西にある。西側と南側が調査区外に続くため全容を明らかにすることはできないが、花崗岩の岩盤を掘削し、確認しただけでも 4 ヶ所（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）の平坦面を構築している。

ＳＸ 01・ＡはＳＹ 01 に一番近い平坦面で、標高は 228.8 mを計測する。南西部分がＳＸ 01・Ｄにより削平されているもののほぼ全容を明らかにすることができた。岩盤を谷側に高まりを残すように掘削し、東西約 1.9 m、南北約 3.4 mの平坦面を構築している。平坦面の中央北寄りで東西約 0.4 m、南北約 0.5 mの楕円形をした焼土面とそれに続く中央南寄りで東西約 0.75 m、南北約 1.3 mの楕円形をした炭化物の広がりを確認した。平坦面内の遺構としては谷側に掘り残した高まりの南端すぐ横で建物の柱穴と考えられるピット 1 基と、平坦面のほぼ中央、炭化物層の下からピット 1 基を検出した。

ＳＸ 01・ＢはＳＸ 01・Ａの北西にある標高 229.2 mの平坦地で、ＳＸ 01・Ａより一段高い位置にある。当初は岩盤を洞窟状に掘り抜いて平坦面を構築したと考えられるが、天井部分は崩落のため一部しか残っていない。平坦面は東西約 2.1 m、南北約 2.0 m、高さは現存するところで約 1.3 mを計測する。平坦面の中央南側で粘土の広がりとその下から焼土を確認した。出土遺物として、北壁に添うように並べられた成形後の未焼成品と思われる粘土群と 5 枚重ねの未焼成天目茶碗群を検出した。これらは上下二層に別れており、埋土の状態から埋没した時期に差があることが確認された。上層の粘土群は、残りが良くないが、椀を重ねて置いた状態のものが 22 個出土した。下層の天目茶碗は風化した花崗岩層に埋没していたため良好な状態で保存され出土したものと思われ、平坦面の北壁中央に添って天目茶碗を 5 枚重ねたものが前列 8 個、後列 5 個置かれた状態で出土した。この粘土群は粘土を成形、乾燥させた後、施釉するまでの間陰干ししていたものがそのまま埋没したものではないかと考えられる。

ＳＸ 01・ＣはＳＸ 01・Ｂの 3.0 m程西にあり、標高は 230.0 mを計測する。西側の大部分が調査区外のため、全容は明らかではないが、岩盤を掘削し平坦地を構築している。平坦面は確認できるところで東西約 0.85 m、南北約 1.0 mを計測する。ＳＸ 01・ＤはＳＸ 01・Ｂの南にある標高 228.4 mの平坦地で、ＳＸ 01・Ｂより一段低い位置にある。遺構の

残りは大変良い。岩盤を南側を開くように掘り下げ､残りの三方に高さ約 0.25 mの壁を作っている。平坦面は東西約 2.2 m、南北は約 3.0 mを計測する。平坦面で土坑６基とピット４基を検出した。土坑は平坦面南側で左右対称に検出され、建物の柱穴と考えられる。また平坦面のほぼ全域で、炭化物の広がりを確認し、さらにその下層の壁に囲まれた範囲から東西約 1.2 m、南北約 1.6 mの楕円形をした焼土を確認した。その他にはＳＸ 01・Ｄの西で平坦地を確認した。標高は 228.8 mを計測し、ＳＸ 01・Ｄより一段高くなっている。西側が調査区外へ続くため、全容は明らかではないが、南北約 2.7 m、東西は確認できるところで約 3.0 mを計測する。遺構としては平坦地北側で溝とそれに添うような形でピットを 10 基、さらに溝を切る土坑を２基検出した。

それぞれの平坦面は同時期に構築されたのではなく、埋土の状態から少なくとも３時期の使用が確認できる。上面は標高 229.1 mの高さでＳＸ 01 のほぼ全域から粘土の広がりを確認し、粘土層の下からは、ＳＸ 01・Ｄの西壁にあたる位置で直径約 1.0 mの円形をした焼土と、その周囲からは整地に利用されたと考えられる夥しい量の焼台と陶片を検出した。中面は上面の下約 0.2 mで西側を中心とした粘土の広がりと焼土を確認した。下面はＳＸ 01・Ｄの岩盤直上から南斜面に続く炭化物の広がりと焼土を確認した。

ＳＸ 02 はＳＹ 01 の焼成室から５m程西にあり、標高は 228.8 mを計測する。南側と東側が削平されているため全容を明らかにすることはできないが、岩盤を谷側に高まりを残すように掘削し平坦面を構築している。平坦面は南北約 2.3 m、東西は現存するところで約 1.9 mを計測し、北隅と西隅が丸い形をしている。平坦面の中央で東西約 1.0 m、南北約 0.5 mのほぼ楕円形をした炭化物の広がりを確認した。

ＳＸ 03 はＳＹ 01 の北西の尾根上にあり、標高は 235.3 mを計測する。大きな切り株があり完掘することができなかったが、南北約 1.15 m、東西約 2.2 mの範囲に岩盤に粘土が貼られたかのように広がる平坦面を確認した。

ＳＸ 04 はＳＸ 03 の北２m程の尾根上にあり、標高は 235.1 mを計測する。南東部分が自然流失しているものの、岩盤を深いところで 0.4 m程掘削し東西約 1.65 m、南北約 1.25 mの隅丸方形の平坦面を構築している。北壁沿い中央でピット１基を検出した。

ＳＸ 05 はＳＹ 01 の煙道部から５m程北の尾根直下の南向き斜面に構築されている。標高は 234.6 mを計測する。斜面は自然流失をかなり受けているが、東西約 2.2 m、南北は現存するところで約 1.5 mの平坦地を確認した。北壁沿い西側で建物の柱穴と考えられるピット１基を検出した。

ＳＸ 06 はＳＹ 01 の煙道部から５m程東にあり、標高は下面で 229.4 mを計測する。南側が調査区外のため全容を明らかにすることはできなかった。調査区をほぼ南北に走る地割れを利用して構築され、埋土の状態から２時期の使用が確認できる。上面は現地表から約 1.6 m下で炭化物の広がりを確認した。この広がりの多くは調査区外に広がると考えられる。下面は現地表から約 1.8 m下で炭化物と焼土の広がりを確認した。炭化物は一部密に分布するものの平坦面のほぼ全域にまばらに広がっている。炭化物層の下から平坦面中央に広がる焼土を確認した。焼土は調査区外に続くが､直径約 1.3 mの円形になると考えられる。他の遺構としては下面の炭化物検出面でピットを１基、焼土を取り除いた後ピットを２基

検出した。

ＳＸ07はＳＹ01の燃焼室から７m程東にあり、標高は226.8 mを計測する。南側が盗掘により削平されているため、全容を明らかにすることはできないが、南向きの急斜面を掘削して平坦面を構築している。平坦面は、東西約1.9 m、南北は現存するところで約1.0 mを計測する。平坦面の中央で東西約1.4 m、南北は現存するところで約0.9 mのほぼ円形をした焼土面を確認した。

ＳＸ08はＳＹ01の燃焼室から５m程西にあり、標高は227.0 mを計測し、ＳＸ02の一段下の平坦地にあたる。多くは調査区外のため北側一部を確認したに過ぎないが、岩盤を山側で約0.8 m掘削した、東西約2.5 m、南北約0.44 mの平坦地と、調査区南壁で約0.7 mを計測する円形か楕円形になると考えられる焼土面を検出した。　（宇佐見　守）

ま と め　今年の調査で２年度に渡った鴈窯跡の調査（1,300 ㎡）が終了し、古瀬戸後期の窯体１基と工房跡８ヶ所を検出した。出土した遺物の大部分は灰原よりの出土で膨大な量となった。

窯体は当初想定していた３基ではなく１基ＳＹ01で現存長５m 60 ㎝を測り、燃焼室、分焔柱、煙道部の各部位の調査を行ったが焼成室については調査区外のため未調査となった。

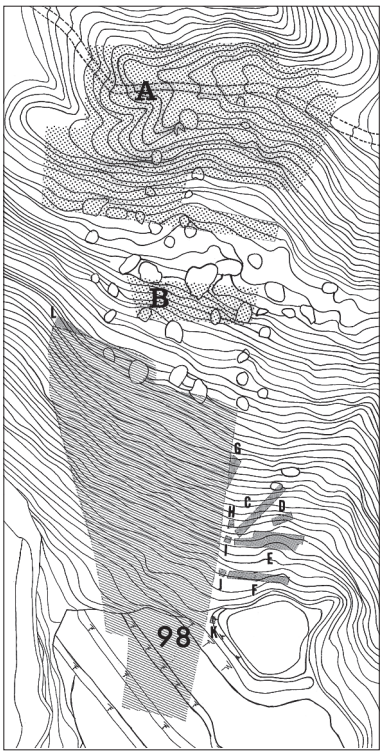
燃焼室では、床面および側壁が赤褐色に被熱硬化し、３回の改修痕が認められ、側壁間が当初の規模270 ㎝から160 ㎝にまで縮小されていた。分焔柱は全体を検出することができなかったが、基部は現存部で窯軸方向が長軸で50 ㎝、短軸で48 ㎝を測る。

窯体に伴う工房跡と考えられる平坦面を８ヶ所確認した。窯体ＳＹ01の西側南向き斜面（ＳＸ01・02・08）と東側南向き斜面（ＳＸ06・07）と北側の尾根または尾根直下（ＳＸ03・04・05）の３群にわけられ、いずれも花崗岩の岩盤を削平し平坦面を構築している。ＳＸ01・02・06・07の床面からは炭化物や焼土を確認した。

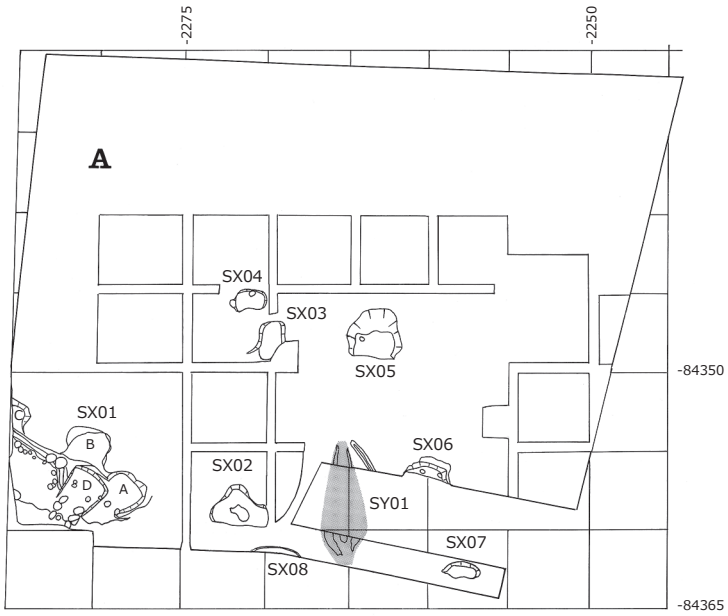
ＳＸ01は調査区内では一番大きな工房跡で、確認しただけでも４ヶ所（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）の平坦面を有す工房があり、それぞれの工房跡は同時に構築されたのではなく、焼土や炭化物や粘土の堆積等から３段階確認した。上面はＢの南側の平坦面で整地に利用された多数の焼台や陶片がまじり、Ｂの前には粘土層が広がっており、ロクロピットの可能性のあるピットＰ03を検出し、北壁添いからは未焼成の碗とみられる粘土群が出土している。未焼成の重なった天目茶碗はこの下層より出土した。Ａの南端部分ではピットを検出し、谷に面し開口した覆い屋根が考えられる。ＤはＢの南側で一段低い位置にあり、Ａの一部を切り構築され、土坑６基とピット４基を検出し、Ａと同様に谷に面し開口した覆い屋根が考えられる。推定床面積はＡ 3.71 ㎡、Ｂ 3.91 ㎡、Ｄ 4.44 ㎡を測る。

灰原を中心として出土した遺物は、天目茶碗・茶入れ・灰釉平碗・鉢・小皿の喫茶具を中心とした高級日常生活用具類と擂鉢・鍋・釜・土瓶の日常雑器類、そして四耳壺・瓶子・水注・花瓶・香炉の祭祀用具類等、２年度の調査でＰ27コンテナで3,110箱出土した。

（小澤一弘）



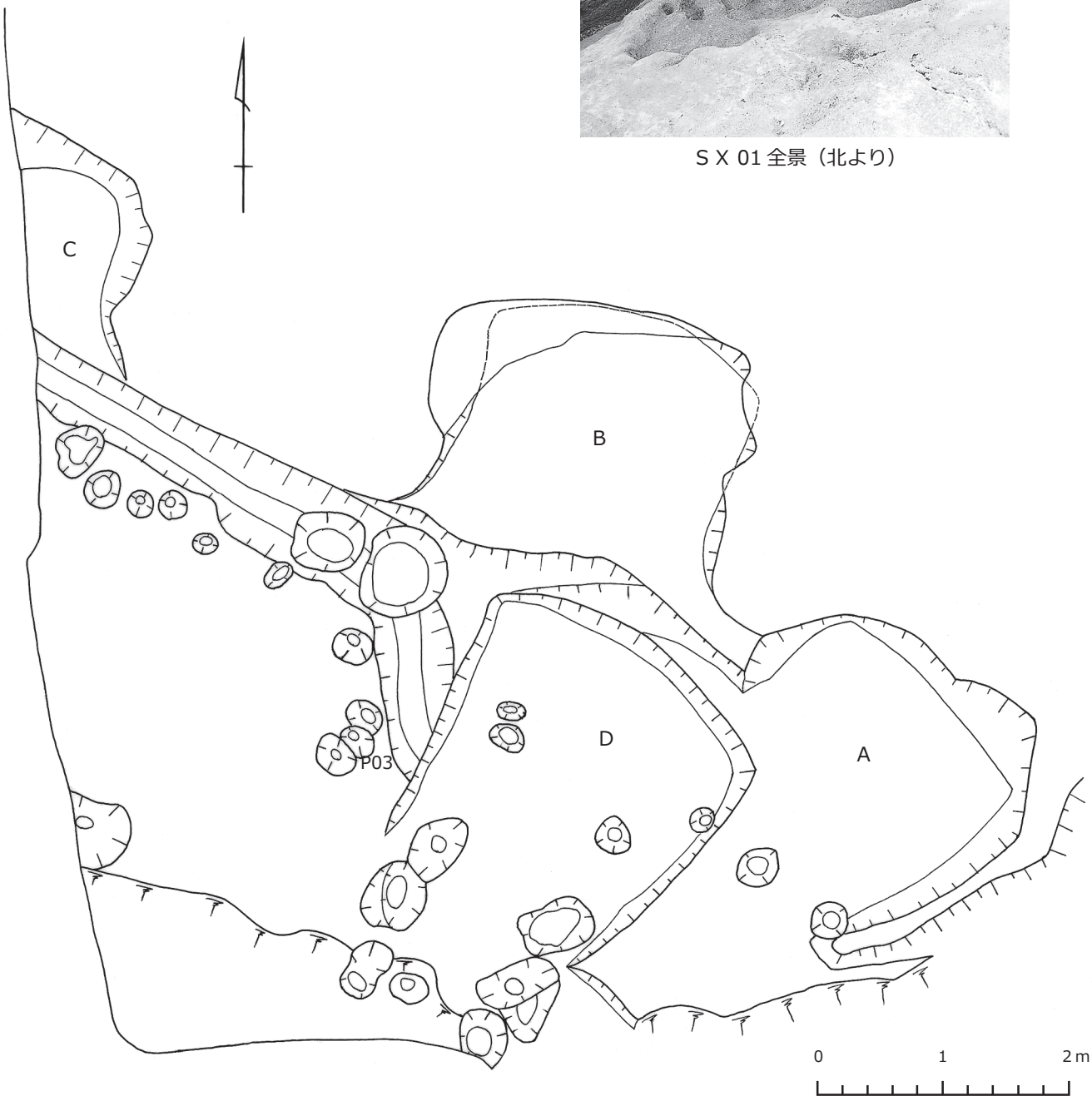
第１図　調査区位置図（１：1,000）



第２図　Ａ区遺構全体図（１：500）



ＳＸ 01 全景（北より）



第３図　ＳＸ 01 遺構図



ＳＹ 01　燃焼室



ＳＹ 01　分焔柱



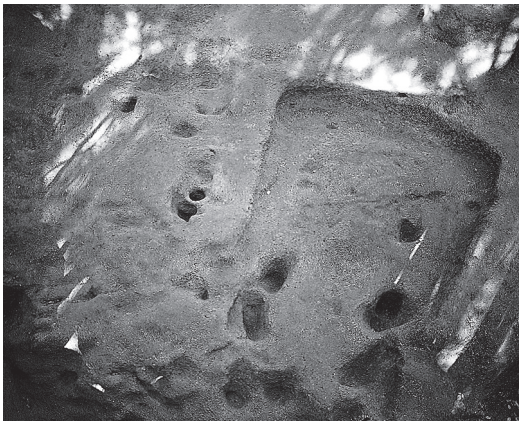
ＳＹ 01　煙道部



ＳＹ 01　窯壁（西側）



ＳＸ 04　全景



ＳＸ 01・Ｄ　全景



ＳＸ 01　上面



ＳＸ 01　下面



ＳＸ 01・Ｂ　遺物出土状況（上・下層）



ＳＸ 01・Ｂ　遺物出土状況（上・下層）



ＳＸ 01・Ｂ　遺物出土状況（下層）



ＳＸ 01・Ａ　遺物出土状況



Ｂ区　灰原遺物出土状況



Ｂ区　灰原セクション



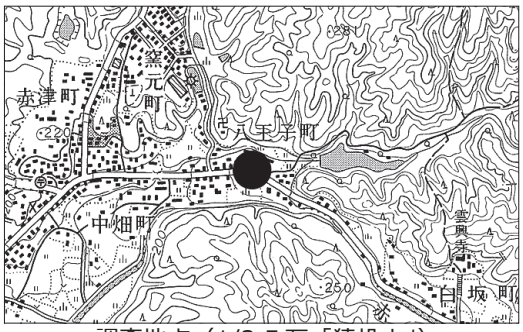
Ａ区　作業風景



Ａ区　作業風景

八王子（はちおうじ）遺跡

所 在 地　瀬戸市八王子町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 12 年 1 月～ 3 月
調査面積　1,500 ㎡
担 当 者　北村和宏・小澤一弘・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　八王子遺跡は瀬戸市八王子町に所在する縄文時代を中心とする複合遺跡で、調査は東海環状自動車道建設のため愛知県教育委員会を通じ委託を受け、平成 10 年度より調査が実施され、本年度は平成 12 年 1 月～ 3 月にかけてＡＢＣの 3 調査区 1,500 ㎡の調査を実施した。

立地と環境　瀬戸市には東部山地を水源とする 4 つの河川、北から蛇ヶ洞川、水野川、瀬戸川、矢田川があり八王子遺跡は矢田川の支流赤津川流域にあり、赤津川左岸に形成された、標高 200 m前後の河岸段丘上に立地している。八王子遺跡の東約 500 mには縄文時代と中世の複合遺跡白坂雲興寺遺跡が所在する。

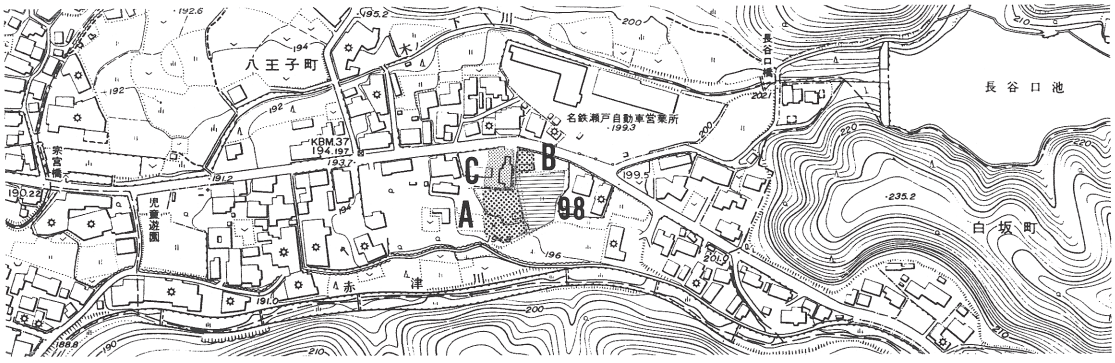
調査の概要　調査は、昨年度の調査区の西側をＡ区、北側をＢ区、北西側をＣ区として、３調査区で実施した。

Ａ区では調査区の南側で現水田下の灰褐色層より近世の水田跡、中世の溝と土坑を検出した。暗褐色層と黒褐色層は縄文時代早期を中心とする遺物包含層で調査区の中ほどから北側に厚く堆積し、調査区南西側の斜面からは多量の土器片が出土した。調査区北西側では弥生時代の炉跡 1 ヶ所を検出した。調査区北側は花崗岩の礫群が帯状にひろがっていた。

Ｂ区は北側部分がすでに削平され地山が露呈していた。南西部分が緩やかに傾斜し、傾斜部分には暗褐色層、黒褐色層の遺物包含層が厚く堆積していた。南側では昨年度調査の竪穴状土坑 1 基の北側未調査部分を調査した。

３調査区からは早期後半の貝殻条痕文系土器が多く出土している。押型文土器と茅山下層式土器がＡ区より出土している。押型文土器（第２図）は格子目文（第２図１）と、山形文（第２図２～７）がベース面直上の黒色粗砂層より出土した。茅山下層式土器（第３図）は自然の傾斜に添って、底部を東に、西に倒れた状態で出土したもので、口縁と胴部半分が欠損している。胴上部に一段の屈曲部をもつ平底の深鉢で、胎土には繊維が含まれている。器面は胴部上半部に縄文が下半分部に貝殻条痕が施され、文様は段から口縁にかけ凹線で円形文・流水文が描かれ刺突列も施されている。平底の底部には縄文痕が付いている。

（小澤一弘）



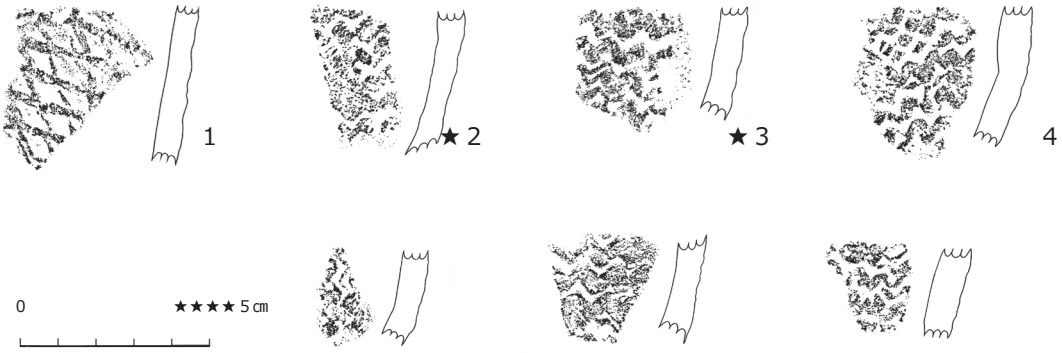
第１図　調査区位置図



A区　全景（北より）



茅山下層式土器出土状態



第２図　押型文土器拓影（１：２）

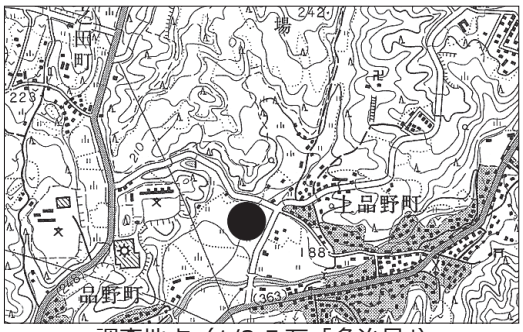


底部拓影

第３図　茅山下層式土器拓影（１：３）

上品野蟹川遺跡（かみしな の かにかわ）

所 在 地　瀬戸市上品野町地内
調査理由　国道 363 号線改良
調査期間　平成 12 年 1 月～ 3 月
調査面積　1,000 ㎡
担 当 者　北村和宏・宇佐見　守・魚住英史



調査地点（1/2.5 万「多治見」）

調査の経過　上品野蟹川遺跡は瀬戸市上品野町に所在する縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。本遺跡は水野川流域に広がる品野盆地の北東に位置し、標高 180 m程の沖積地に立地する。平成 7 年と 10 年に（財）瀬戸市埋蔵文化財センターにより発掘調査が行なわれ、自然流路・杭列遺構・掘立柱建物・溝などの遺構が確認されている。周辺の遺跡としては、本センターが平成 8 年度から 10 年度にかけて調査を実施した上品野遺跡などがある。本調査は国道 363 号線の改良工事に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。

調査の概要　調査区は北東部の丘陵斜面と北西部から南部に広がる自然流路に分かれる。遺構としては山茶椀が出土した土坑などを丘陵斜面で検出した。調査区の大部分を占める自然流路の埋土は長年の土砂の堆積により複雑な層位をしていたが、概ね旧耕作土下の黒褐色土から山茶椀・施釉陶器・木製品など鎌倉から室町時代の遺物が、それからさらに 1 m程下の青灰色粘質土直上から須恵器・土師器など奈良・平安時代の遺物が出土した。その他の遺物として丘陵斜面上の黄褐色砂礫層から戦国時代の施釉陶器が、その下の青灰色粘質土直上から縄文時代の石鏃・剥片が出土した。　（宇佐見　守）


調査区全景（北東より）


遺物出土状況（北より）

惣作遺跡・巡間Ｅ窯跡・中洞窯跡・宇トゲ窯跡・白岩Ａ遺跡　範囲確認調査

遺　跡　名　惣作遺跡
所　在　地　瀬戸市惣作町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 11 年５月
調査面積　100 ㎡
担　当　者　北村和宏・魚住英史・川添和暁

遺　跡　名　巡間Ｅ窯跡
所　在　地　瀬戸市巡間町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 11 年５月
調査面積　100 ㎡
担　当　者　北村和宏・魚住英史・川添和暁

遺　跡　名　中洞窯跡
所　在　地　瀬戸市上品野町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 12 年３月
調査面積　100 ㎡
担　当　者　北村和宏・魚住英史・織部匡久

遺　跡　名　宇トゲ窯跡
所　在　地　瀬戸市上品野町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 12 年３月
調査面積　100 ㎡
担　当　者　北村和宏・魚住英史・織部匡久

遺　跡　名　白岩Ａ遺跡
所　在　地　瀬戸市上品野町
調査理由　東海環状自動車道建設
調査期間　平成 12 年３月
調査面積　100 ㎡
担　当　者　北村和宏・魚住英史・織部匡久



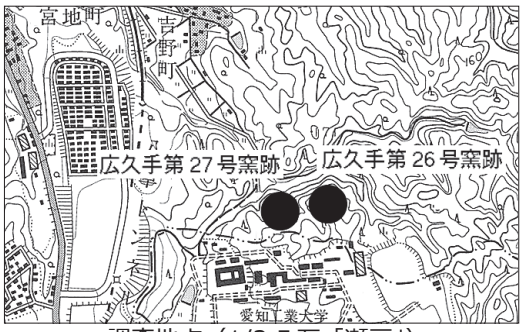
調査地点（1/2.5 万「多治見・猿投山」）

調査の経過・概要

東海環状自動車道建設にともなう事前調査として本年度は瀬戸市内において５箇所の遺跡の範囲確認調査を実施した。このうちの惣作遺跡および白岩Ａ遺跡については、調査対象地内に遺跡は及んでいないことを確認した。巡間Ｅ窯跡は、赤津盆地を囲む丘陵の一角に位置する窯跡で、山茶椀・小皿と古瀬戸後期の製品を焼成した窯体２基および灰原を確認した。中洞窯跡および宇トゲ窯跡は品野盆地を囲む丘陵内に所在する古瀬戸窯で、両者は丘陵の稜線の挟んで南側と北側に位置している。ともに調査に際しては、事前に磁気探査を行ない、あらかじめ窯体の推定位置を把握した上で、テストトレンチを設定するという方法で範囲確認調査を行なった。調査の結果、中洞窯跡では、古瀬戸中期の窯体１基と灰原の広がりを確認した。宇トゲ窯跡では、灰原の一部が対象地内に展開するにとどまり、窯体は用地外に位置することが明らかになった。出土遺物から古瀬戸後期の古瀬戸専焼窯とみられる。（北村和宏）

広久手（ひろくて）第 26 号窯跡　範囲確認調査

所 在 地　瀬戸市広久手町
調査理由　若宮八草線建設にともなう事前調査
調査期間　平成 11 年 12 月
調査面積　100 ㎡
担 当 者　北村和宏・小澤一弘・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「瀬戸」）

広久手第 26 号窯跡は、瀬戸市南部、愛知工業大学の北側の丘陵内に位置する。

調査は、遺跡の範囲確認調査として実施したものである。平成 10 年に磁気探査がおこなわれており、複数基の窯本体の存在が推定されていた。そうした探査結果および遺物の散布状況をふまえて、総計で 13 箇所のトレンチを設定した。調査の結果、窯本体は磁気探査の所見とは幾分離れた位置で 1 基検出されるにとどまり、その下方斜面から谷底にかけて灰原が検出された。出土遺物には山茶椀・小皿および各種古瀬戸製品が認められた。


Ｔ．９－Ｂ　窯体検出状況

（北村和宏）

広久手第 27 号窯跡　範囲確認調査

所 在 地　瀬戸市広久手町
調査理由　若宮八草線建設にともなう事前調査
調査期間　平成 11 年 12 月
調査面積　100 ㎡
担 当 者　北村和宏・宇佐見　守・魚住英史

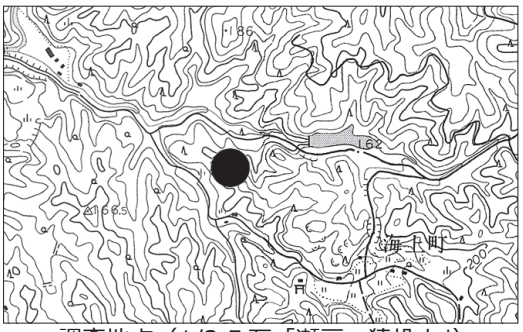

Ｔ．０２　ＳＹ 02 検出状況

広久手第 27 号窯跡は、瀬戸市南部、愛知工業大学の北側の丘陵内に位置する山茶椀窯で、いわゆる瀬戸古窯跡群に所属する。今回の調査は、遺跡の範囲確認調査として実施したものである。平成 10 年に磁気探査がおこなわれており、３箇所で窯本体の存在が推定されていた。そうした探査結果および遺物の散布状況をふまえて、総計で 25 箇所のトレンチを設定した。調査の結果、推定された３箇所中２箇所で窯体（ＳＹ 01・02）が検出され､その下方斜面から谷底にかけて灰原が検出された。出土遺物はそのほとんどが山茶椀･小皿で、古瀬戸製品は数点が認められたにすぎない。

（北村和宏）

海上（かいしょ）Ｂ窯跡　範囲確認調査

所　在　地　瀬戸市海上町
調査理由　新住宅開発にともなう事前調査
調査期間　平成 11 年 12 月
調査面積　100 ㎡
担　当　者　北村和宏・宇佐見　守・魚住英史



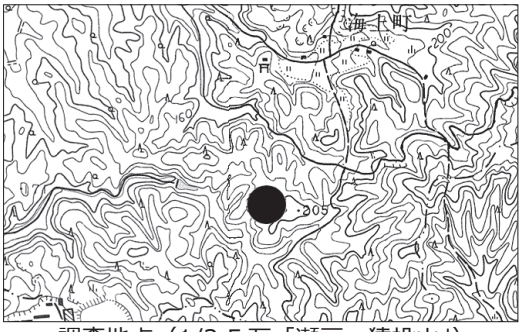
調査地点（1/2.5 万「瀬戸・猿投山」）


Ｔ．17　ＳＹ 02 検出状況

海上Ｂ窯跡は、海上砂防池南側の丘陵内に位置する山茶椀窯である。今回の調査は、遺跡の範囲確認調査として実施したもので、調査に先立って調査対象地で磁気探査をおこなった。その結果、斜面上部において２ヵ所で窯跡の存在が推定された。こうした所見および遺物の散布状況をふまえて、トレンチは総計で 19 箇所設定した。調査の結果、磁気探査の所見とほぼ一致する位置で窯本体が２基検出され、その下方斜面から谷底にかけて灰原が検出された。出土遺物はそのほとんどが山茶椀･小皿で､古瀬戸製品は数点が認められたにすぎない。　（北村和宏）

広久手第 24 号窯跡　範囲確認調査

所　在　地　瀬戸市広久手町
調査理由　新住宅開発にともなう事前調査
調査期間　平成 11 年 12 月
調査面積　100 ㎡
担　当　者　北村和宏・小沢一弘・織部匡久



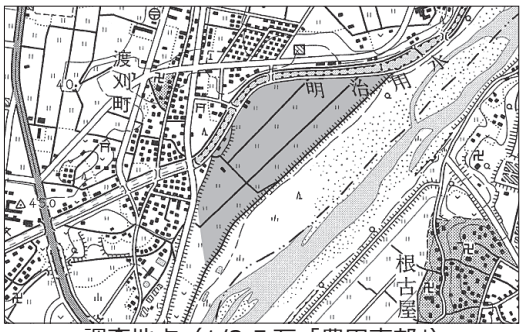
調査地点（1/2.5 万「瀬戸・猿投山」）


Ｔ．12　灰原検出状況

広久手第 24 号窯跡は、吉田川北側の丘陵内に位置する。調査は、遺跡の範囲確認調査として実施したもので、調査に先立って調査対象地で磁気探査をおこなった。その結果､斜面上部において２ヵ所で窯跡の存在が推定された。こうした所見および遺物の散布状況をふまえ、開発対象地域（斜面下方）およびその周辺にトレンチを総計で 12 箇所設定した。調査の結果、灰原が斜面下方へ及んでいることを確認した。出土遺物はそのほとんどが山茶椀・小皿で、古瀬戸製品は少量が認められたにすぎない。　（北村和宏）

水入（みずいり）遺跡

所 在 地　豊田市渡刈町字下糟目及び大屋敷
調査理由　第二東海自動車道豊田東ＩＣ建設
調査期間　平成 11 年４月～平成 12 年３月
調査面積　56,250 ㎡
担 当 者　佐藤公保・花井　伸・中野良法・酒井俊彦・池本正明・川井啓介・小嶋廣也・竹内　睦・鈴木　裕・鈴木達也・洲嵜和宏・成瀬友宏・皆見秀久・永井邦仁



調査地点（1/2.5 万「豊田南部」）

調査の経過　水入遺跡は豊田市渡刈町字下糟目・大屋敷地内に所在する。「水入」はこの地の通称であり、古来より頻繁に水害を被っていたことを窺わせる。発掘調査は第二東海自動車道の豊田東インター建設に伴う事前調査であり、平成 10 年 10 月から継続して行っている。今年度の調査は 56,250 ㎡に及び、Ａ～Ｌまでの 12 調査区を設定し調査を実施している。

立地と環境　遠く長野に源を発した矢作川は山間を経て一端、豊田市の中心である挙母盆地に至り、その後、台地を侵食し沖積平野に流れ出る。水入遺跡は矢作川が台地から平野に注ごうとする矢作川右岸の標高 23 ｍの埋没段丘上に立地する。周辺には遺跡が多く立地しており、周知の遺跡として北には縄文土器の散布地として大明神Ａ遺跡・西糟目遺跡・北田遺跡（共に消失）や鳥狩塚古墳等、西には渡刈富士塚古墳がある。南に目を転じると、第二東海自動車道予定地内に天神前遺跡・郷上遺跡があり、昨年度までの調査によって前者では古墳時代・古代・中世、後者では古墳時代から近世までの遺構を検出している。東にあたる矢作川左岸では、中世の山城である細川城山城がある。（佐藤公保）

調査の概要　水入遺跡は中央部に矢作川に直交する谷地形が入り込んでおり、この谷地形より南側の低位段丘面上においてＡ～Ｃ・Ｌの調査区を設定、縄文時代早期および古墳時代中期から戦国時代末までの多数の遺構を確認するに至った。

Ａ　区　Ａ区では、昨年度の 98 Ｂ区で確認された古墳時代中期の開削になる大溝の延長部分を調査、新たな見解が得られた。まず、開削当初の規模は、幅約 5.5 ｍ、深さ約４ｍの薬研状の断面形であり、低位段丘下部の拳大から人頭大の円礫からなる礫層を大きく掘り込んでいる。掘削で出た土は溝の両側に積み上げ、土塁としている。土塁は残存状態の良好なところで観察した結果、基底部約４ｍ以上、高さ 40 ㎝以上の規模で、土塁盛土中には礫は含まれない。礫をどう処理したかについては不明である。また、掘削で表れた礫層に対しては、粘質の強い土で上から覆い、崩落を防ぐとともに平滑な表面に仕上げてある。また、同じ土で溝下部に不規則な間隔で土橋状の構築物をつくっている。この目的については定かではない。ところで、土塁盛土下からは尾張の廻間Ⅱ式併行の高杯がコンテナ１箱分出土している。現在のところ大溝内からはそのような古墳時代前期にまで遡りうる土器の出土はみられないが、大溝開削時期を考えるうえで看過できない資料であろう。

古墳時代中期の大溝堆積層は大きく２層に分けられ、下層は、昨年度 98 Ｃ区で矢作川に面する崖下から大量に土師器が出土した層に対応している。須恵器を含まず、高杯・小型丸底壺で構成され、概ね５世紀中葉とみられる。この層は植物質を多く含み、木製品を多数出土した。木製品は、鋤・機織具・木錘などの農工具類のほか、特徴的なものとして高床建物に関わるとみられる梯子・板状建築部材、祭祀具である刀形木製品がある。また、剣

形石製模造品・臼玉・管玉が出土しており、当該期における祭祀場の可能性がより強くなった。上層からは、下層に後続する土師器群に初期段階の須恵器が多数混じった状態で出土した。ほとんどが大溝と矢作川に囲まれた空間から投棄された状態である。土師器は高杯が多くを占め、杯部が椀形のものである。また、須恵器は概ね５世紀後半とみられ、蓋杯・無蓋高杯・大型甕があり、特に大型甕の存在は注目される（第４図）。

その後７世紀中葉から８世紀初頭の堆積、８世紀末から９世紀代の堆積、13 世紀代の堆積がある。大溝が大きく改作されるのは戦国時代から江戸時代初頭にかけてのことで、溝上半部の幅を約 10 mにまで広げる大規模な工事をおこなっている。

矢作川に面する崖は 98 Ｃ区の南端で若干内側へカーブし、99 Ａ区でもその一部が確認され、５世紀代の土器が多く出土した。

大溝と矢作川に面する崖の間の段丘面上では幾時期もの遺構が重複して確認された。古墳時代中期には大溝脇で４間×２間の総柱建物がある。７世紀代は竪穴住居 10 数棟からなる集落がある。この時期の竪穴住居は一辺約５mの隅丸方形で、真北に主軸をとらずに大溝と平行に主軸をとっている。また大溝より西側の空間にも確認されている。造りつけの竈が確認されたものもある。この集落は８世紀に入ると姿を消してしまう。そして８世紀末になって復興する。ただしこの時期には掘立柱建物中心の集落となっている。この時期に属する特徴的な遺物として瓦塔が出土している。13 世紀代には谷地形から北側同様土坑墓群が形成される。形状は円形、副葬品は灰釉系陶器椀が中心だが、長方形のものが１基あり、そこからは銅製和鏡が出土している。関連遺物として五輪塔の各部が挙げられる。さらに戦国時代には屋敷地が形成され、溝区画内に井戸を有している。井戸は段丘下部の礫層上面まで掘り込まれ、素掘りの状態で構造物は確認されていない。

Ｂ　区　Ｂ区では大溝の他、５世紀代と考えられる一辺約７mの竪穴住居が確認され、矢作川に直交する戦国時代以降の構築になるとみられる堤状遺構が確認されている。堤状遺構は大溝東側の土塁に直角に接合している。

Ｃ　区　Ｃ区は、谷地形の南端の一部が確認された。大溝は谷地形に接続するが、接続地点は既に破壊されており、その具体相は不明である。大溝からはＡ区と同様に土師器と木製品が出土する層、その上に須恵器を含む土器群の層があり、須恵器は甕・把手付椀が含まれ、有孔円盤形石製模造品２点と臼玉約 40 点が出土している。

段丘面上では古墳時代から戦国時代までの土坑・ピットがほとんどであるが、調査区東端付近で壁面が焼けて赤化した長軸 30 ～ 50 ㎝の不整形な土坑が約 20 基確認された。時期不明の土器片が若干出土している。覆土中の炭化物を炭素年代測定にかけたところ、約 9,000 年前という年代得られた。従って縄文時代草創期から早期にかけてのものということになる。

Ｌ　区　Ｌ区では遺跡中央の谷地形を確認するにとどまった。（永井邦仁）

Ｄ　区　99 Ｄ区は、昨年度調査された 98 Ｄ区の南西側に隣接し、範囲確認調査において入江状の小規模な谷地形の存在が想定された地区にあたる。

98 Ｄ区では、古代の竪穴住居や掘立柱建物、中世の土坑墓、戦国時代の方形区画溝と掘立柱建物が確認されている。99 Ｄ区は、98 Ｄ区に連続する位置にあるため、98 Ｄ区で検

出された遺構と同様の遺構が確認されている。つまり、古代の竪穴住居や掘立柱建物、中世の土坑墓、戦国時代の方形区画溝が検出された。また、新たに縄文時代の竪穴住居と最終埋没期が江戸時代と考えられる谷状の落ち込みも確認された。この落ち込みは、範囲確認調査において想定された入江状の小規模な谷地形と認められ、調査区の南西側約1/3の範囲に展開し、さらに南西方向に広がる様相を示している。湧水と崩落と軟弱地盤によって完掘することができなかったが、調査区南西端で最も深く、落ち込み面から約３mを測り、さらに南西方向に深さを増す状況がうかがえる。

次に99 D区の概要を時代ごとに記していく。

縄文時代の遺構は、竪穴住居が４軒と土坑が数基検出された。これらの遺構の多くは、谷状の落ち込みから20 mの範囲に限られている。４軒確認された竪穴住居のうち１軒は、一辺約４mを測る隅丸方形プランをしており、中央に方形の炉が重なり合う状態で２基確認された。また、住居内の南端付近にある土坑からは縄文土器が立位で検出されている。土器の遺存状態はあまり良好ではないが、出土位置と検出状況から埋甕の可能性が考えられる。この住居の床面付近から加曾利Ｅ－２式期並行と考えられる土器が出土しており、この竪穴住居の時期は縄文時代中期と想定できる。他の３軒は、いずれも直径約４mの円形プランをしているが、そのうち石組みの炉が検出されたものもある。時期に関しては、土器が小片のため確定できない。出土遺物は、土器以外に石鏃や磨製石斧・石匙・石錘などがある。

古代の遺構は、竪穴住居が30軒以上、１間×２間の掘立柱建物が２棟、東西方向にのびている幅50㎝、深さ70㎝の溝が１条、土坑が多数検出された。竪穴住居は、一辺５m前後のものが多く、竈を有するものも８軒認められ、ほとんどが北側に位置している。竈の中には、被熱部分が灰色を呈しているほど高熱を受けたものが集中する区域が確認されている。この竈の平面形態には円形と方形がある。高被熱の土を持ち帰り、フローテーションを行なったところ、多量の骨片が検出された。以上の状況から、高被熱のものは、煮炊き用の竈以外の施設とも考えられる。出土遺物から竪穴住居の時期は、７～８世紀が想定される。

中世の遺構はわずかしか認められなかったが、そのほとんどが直径70㎝～１m、深さ20㎝程の円形プランをした土坑である。遺物は少量出土しているのみであるが、昨年度の成果から土坑墓と考えられる。

戦国時代の遺構は、98 D区で確認された幅２m、深さ１mを測り、箱型の断面を呈する区画溝の南角部分が検出された。溝内から長石釉を施した瀬戸・美濃産の皿が出土しており、概ねその時期の遺構と想定できる。（中野良法）

Ｅ・Ｆ区　Ｅ・Ｆ区は、遺跡の北西部にあたり、遺跡が立地する段丘より高い段丘に移行する位置にある。Ｅ区の全体及びＦ区の南西部は、水入遺跡がのる低位段丘面上にあり、平坦な地形である。Ｆ区の北東部は、上位の段丘面あるいは低位段丘面の一段高い部分に相当し、平坦であるが、Ｆ区の中央は、南西から北東にむけて上る緩傾斜地となっている。Ｅ区南端は、矢作川から北西にのびる谷地形（谷Ａ）の北東辺にあたり、ここから北に浅い支谷（谷Ｂ）が延びてＥ区の中央部を横断する。Ｆ区の南端にはこれに平行する浅い支谷（谷Ｃ）が谷Ａからのびる。

検出された遺構遺物は、Ⅰ期：奈良時代　Ⅱ期：中世～近世の２時期がある。Ⅰ期の遺

構としては、E区の99 D区に接する部分で竪穴住居２軒を検出した。これより洪積台地側にはこの時期の遺構はなく、集落の西限と考えられる。Ⅱ期については、中世の方形土地区画が確認された。谷Ａ・Ｂ・Ｃは、中世の段階ではほとんど埋没して周囲より低い窪地状になっていたものと推定される。この窪地によってコの字状に区画された幅約30ｍ長さ約50の方形の部分に谷Ｂと谷Ｃを結んで谷Ａに平行する溝を２ヶ所巡らせ、方形の土地区画が２区画形成されている。この区画内には掘立柱建物の柱穴が集中し、屋敷地になるものと考えられる。同時期の井戸は、谷の比較的浅い部分に検出され、谷Ｂで５基、谷Ｃで９基が検出された。また、近世の集落は確認されなかったが、同時期の井戸は谷Ａと谷Ｂで近接した位置に各１基を検出した。これらの井戸は、すべて構造物は遺存していなかった。その他、E区で縄文時代晩期後葉の条痕文系と削痕文系の土器の組み合わさる土器棺墓１基を検出した。

H　区　H区は、調査区北西部が後世の削平を受けていたこともあり全体に遺構は希薄であった。遺構の展開の中心は調査区中央から南部に広がっており、主な遺構として古代の竪穴住居１棟、中世の土坑墓にきられる掘立柱建物１棟、中世の土坑墓７基を検出した。このうち掘立柱建物は、２間×３間の総柱の建物で柱穴の底に黄褐色の土を入れつきかためてあった。これらの遺構の分布状況から、水入遺跡における古代の居住域と中世の墓域はともにH区の南部あたりが北限になると考えられる。この地区での主な出土遺物としては、調査区の中央を北西から南東にかけて走る溝から鉄族が１本出土しており、また中世の土坑墓からは灰釉系陶器椀が出土している。この他の主な出土遺物として遺構の検出段階を中心にナイフ形石器１点、スクレイパー１点、礫器２点を含むチップ・フレークなど旧石器時代に属すると考えられる遺物数十点が出土しており、この付近に旧石器時代から人々が生活していたと考えられる。（成瀬友弘）

G　区　G区は昨年度調査された98 D区北東に位置しており、検出状況は98 D区に類似したものとなっている。検出された遺構は奈良・平安時代、鎌倉時代、江戸時代の３時期に大別することができる。奈良・平安時代の遺構としては、98 D区側、すなわち調査区南西部を中心に15軒の竪穴住居が展開している。竪穴住居の規模は一辺４～５ｍ程度で、隅丸方形のプランを呈している。北壁又は西壁にカマドが残存しているものも見られた。また、SB 19の竪穴住居の床面からは被熱したと思われる土坑が確認された。熱残留磁気測定の結果、竪穴住居に伴う遺構であることが判明したが、性格は不明である。これ以外に、掘立柱建物７棟を検出した。

鎌倉時代の遺構としては、まず土坑墓をあげることができる。土坑墓は約70基確認され、少数の隅丸長方形のもの以外は、円形のプランを呈する。とりわけ調査区南端部に位置する土坑墓において、遺構の中心部に灰釉系陶器（椀・皿）とともに白磁の合子が、調査区東部の土坑墓からは灰釉系陶器（椀・皿）とともに古瀬戸前期の四耳壺が出土している。また、この時代に属する遺構として竪穴状遺構３基を検出した。うち１基の竪穴状遺構は床面が２度構築されており、作り直しが行われた可能性が高い。この遺構の性格については検討を要するが、遺構内部から礫とともに土坑墓と同時期と考えられる灰釉系陶器が出土しており、土坑墓との関連性がうかがわれる。上記以外の遺構として、掘立柱建物、溝、土坑などがある。

江戸時代には耕作地が展開されたと想定される。それに付随する遺構として、畦畔及び

２基の常滑窯産の埋め甕を検出した。（川井啓介・皆見秀久）

Ｊ区上面　Ｊ区は、水入遺跡の東端に位置し、すべての調査区のなかで最も矢作川と明治用水が接近する地点にある。表土を除去した際に、ベースとして考えた面が、湧水が著しい黄褐色粘質土のエリアと比較的乾いた暗褐色粘質シルトのエリアに識別されたため、その境界線の画定と下部の堆積状況の調査のために、水抜きも兼ねて、調査区中央部に合計５本のトレンチを設定した。

Ｊ区上面は、およそ幅 1.5 ～３ｍ・深さ 50 ㎝の溝を境として、遺構の在り方に相違がみられ、このことについて、溝の北側が黄褐色粘質土のエリア、南側が暗褐色粘質シルトのエリアに大別されることとの関連が着目される。ただし、溝については、灰釉陶器・椀１点のみしか出土していないため時期や性格については不明な点が多い。他の遺構については、まず、北側であるが、床面が被熱している土坑３基と、縄文時代のものと思われる袋状土坑以外には、主だった遺構は検出されなかった。床面が被熱している土坑はおよそ長軸 2.5 ～ 3m・短軸１ｍ・深さ 20 ㎝ほど、袋状土坑はおよそ長短軸 50 ㎝・深さ 60 ㎝であるがベース面から 20 ㎝ほど下がったところで長短軸が 60 ㎝ほどに拡がるものである。次に、南側であるが、比較的、遺構が密であり、土坑群やピット群のほかに数条の溝が検出された。しかし、これらの遺構は、遺物を伴っていないものがほとんどであったため、時期や性格については推測することができないものが多かったが、なかには、中世墓と思われる隅丸方形土坑もあった。これは、およそ長軸２ｍ・短軸１ｍ・深さ 50 ㎝であり、数点の灰釉陶器・椀が出土したもので、この辺りが昨年度調査区 98 Ｄ区から続く墓域の北限である可能性を示唆するものである。（鈴木達也）

Ｊ区下面　上面での遺構検出の段階から、フレークなどが確認され、水抜き用に設定したトレンチより、縦長剥片から作成された石刃が出土した。そのため、下面の調査を行うことになった。トレンチ断面の土層を見てみるとＪ区の基本層位としては、黄褐色粘質土層の下に灰白色粘質土層・礫層が確認された。火山灰分析の結果から、姶良 Tn テフラ（ＡＴ）が検出され、灰白色粘質土層にそのピークが見られることが確認されている。それにより、ＡＴ降灰期の下位に灰白色粘質土層・礫層が河川の運搬に伴って自然に堆積し、ＡＴ降灰期頃にこの辺りが陸地化して風成堆積物の供給が多くなって、黄褐色粘質土層を累積させた埋没段丘上に調査区が位置していることが明かとなった。

下面の調査は、調査区全体ではなく石器類が集中して出土した北東部を対象に行った。５ｍグリッドを４分割して、千鳥方式で掘り下げを行った。まず黄褐色粘質土を掘り下げ、石器類が出土したところはさらに掘り下げ範囲を拡大した。続いて、灰白色粘質土を掘り下げた。掘り下げの段階で礫を多く検出したが、明確に礫群や配石と認識できるような遺構を検出することはできなかった。遺物の石材としては、頁岩やチャートが大半である。コア・フレーク・チップがほとんどで、ナイフ形石器やスクレイパーなどの製品は数点に留まっている。出土した石器類は、全部で 330 点を越えている。このような石器類の出土はＪ区が中心ではあるが、他の調査区でも確認されている。

なお、本遺跡の周辺の旧石器時代の遺跡としては、矢作川に沿った北側に大明神Ｂ遺跡があり、川の対岸の岡崎市には千地遺跡や仁木八幡宮遺跡などが知られている。（小嶋廣也）

ま と め

以上２カ年の調査の結果を時代別にまとめておこう。

水入遺跡の始まりは後期旧石器時代にまで遡る。遺跡北端付近の窪地を中心に石器作りの痕跡が確認された。付近の石材のみならず黒曜石や頁岩・土岐石といった遠隔地から入手したものがあり、旧石器時代人の活動範囲に関する基礎資料として注目される。

縄文時代は草創期から早期・中期の遺構・遺物が、晩期の遺物が確認された。草創期から早期の焼土坑は谷地形より南側の段丘端部に集中し、中期の住居は谷地形の北側の段丘端部に展開しており、水場を意識した立地である。なお、中期住居内埋甕は県内では貴重な例である。

古墳時代中期の遺構は谷地形より南側に限られる。大溝を開削したものの、大型のものを含む竪穴住居数棟しかなく、一般の集落というより、祭祀場を含む特殊な空間として整備したと考えられる。そのような場で初期段階の須恵器が多数出土したことは注目すべきであろう。また、当遺跡の立地が加茂郡と碧海郡の境にあることも重要である。

古代の集落は７世紀中葉に谷地形南側に展開し、８世紀になって北側の段丘面の奥へと進出している。この時から住居の方位が真北を意識するようになる。しかし住居が竪穴から掘立柱へと推移するのは８世紀中葉以降となるであろう。そして、９世紀には谷地形の南側にて、瓦塔・仏鉢形須恵器を用いた仏教信仰が展開する。

鎌倉時代には、遺跡のかなりの部分が墓地になっていた。方形の土坑墓は 100 基以上ある円形の土坑墓にはない副葬品を有し、階層差がうかがえる。また、この地が墓地に選ばれた条件として、郡境という立地が大きな要素であったことと想像される。

戦国時代は谷地形南側・段丘奥部を中心に屋敷地が展開し、堤状遺構もこれに伴って構築されたのであろう。また、鎌倉時代の墓地跡に方形の区画溝が掘削される。しかしそれも江戸時代初めには終わり、耕作地へと姿を変えていく。　　（永井邦仁）



D区　調査区全景

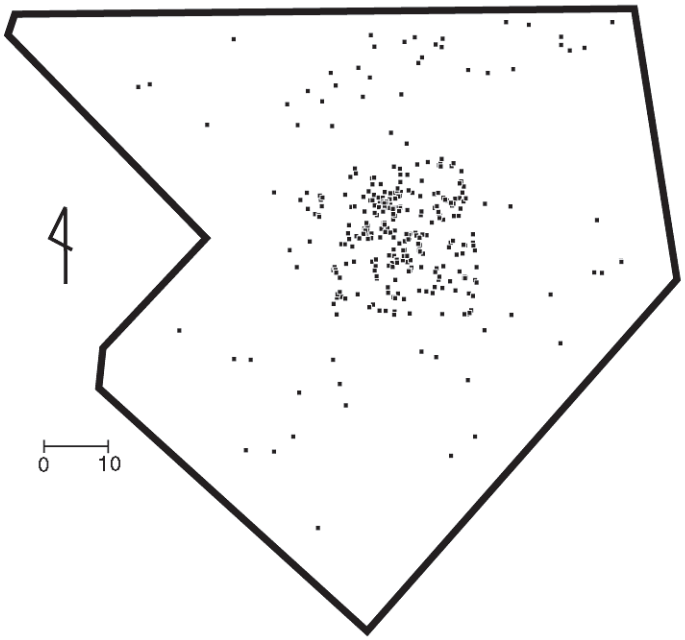


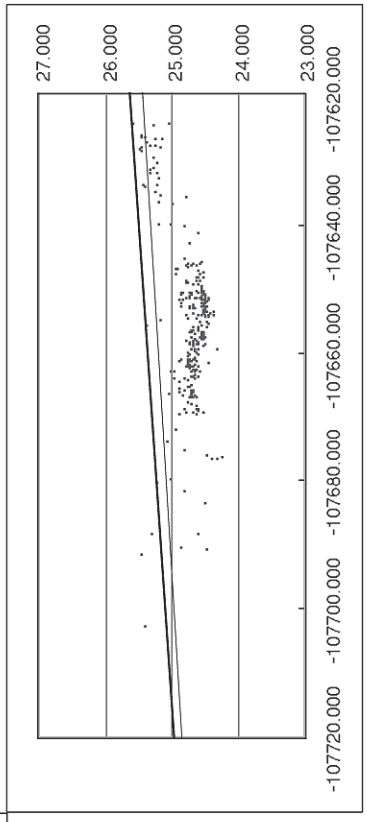
F区　全景（南西より）

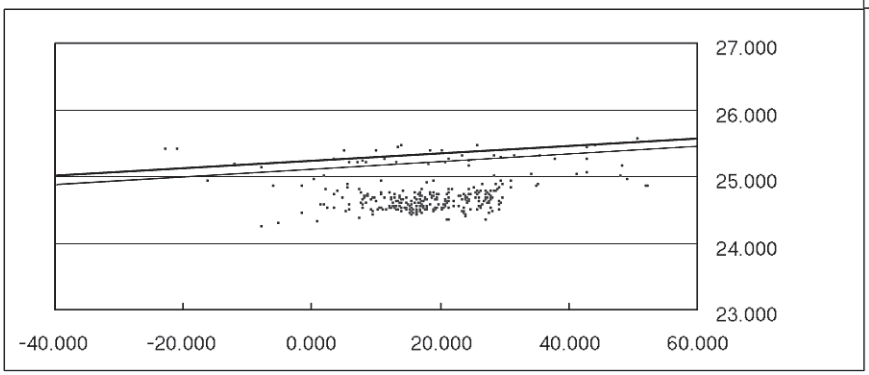


F区中世屋敷地

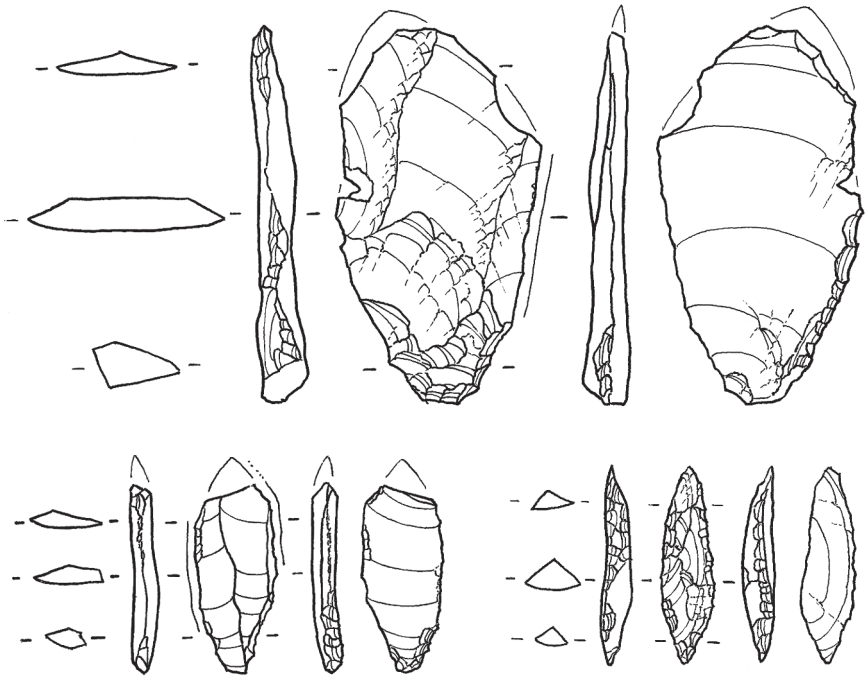
第１図　水入遺跡全体図（１：3,000）







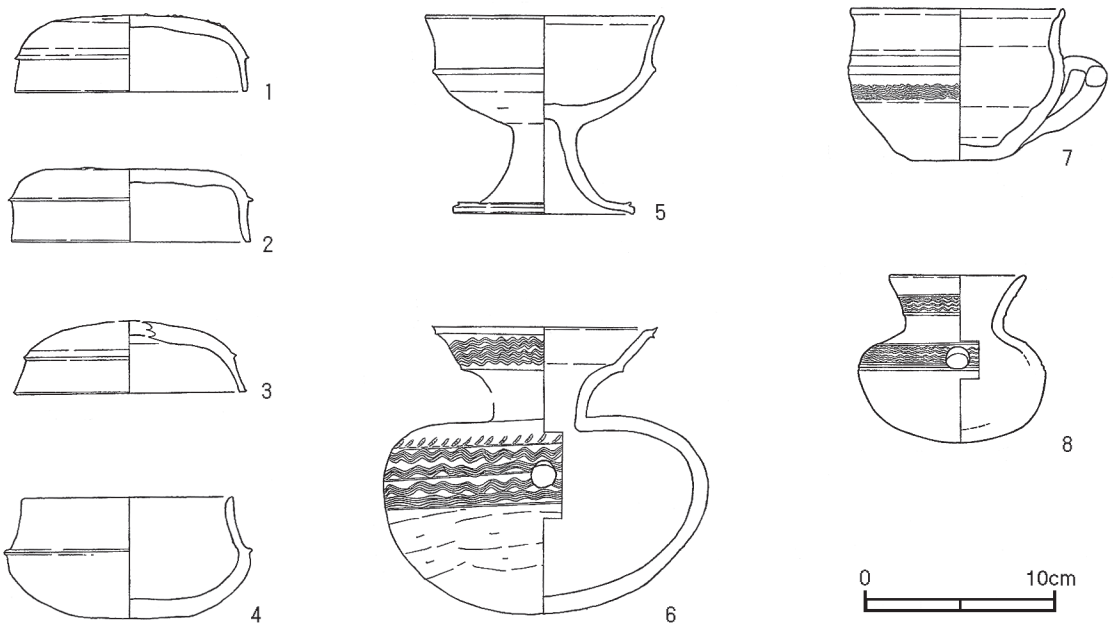
第２図　Ｊ区下面石器類分布図



第３図　旧石器遺物実測図（１：１）（斎藤基生氏による実測・トレース）



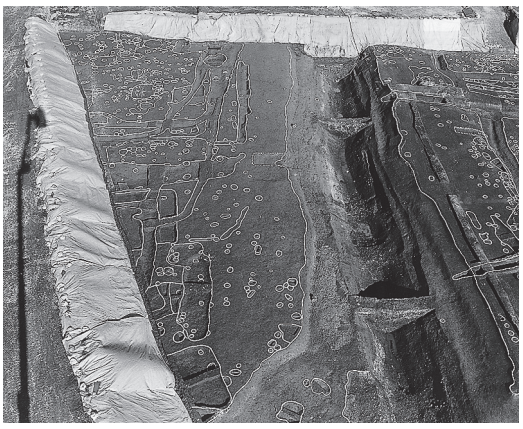
Ｊ区　下面調査作業風景



第４図　大溝出土の古墳時代須恵器（１：４・１～６はＡ区、７・８はＣ区）



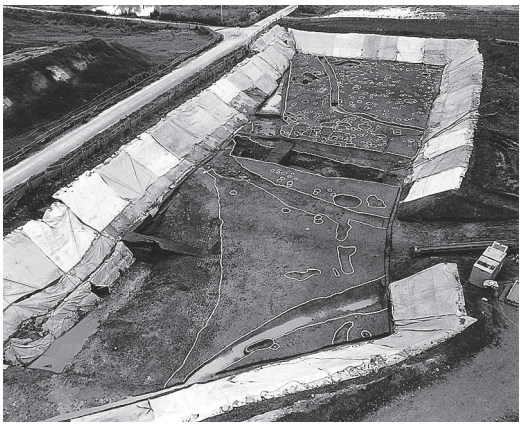
Ａ区　大溝東側全景（西より）



Ａ区　大溝西側全景（南西より）



大溝土器群出土状況



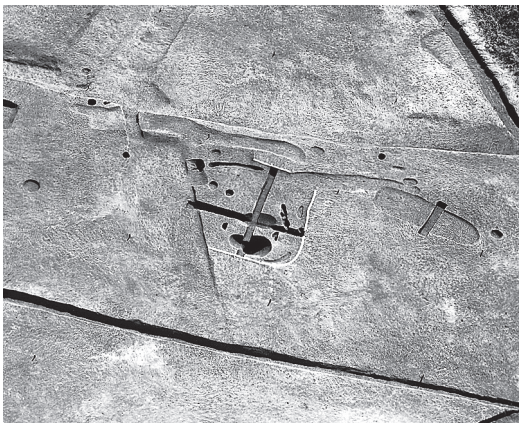
Ｃ区　全景（西より）



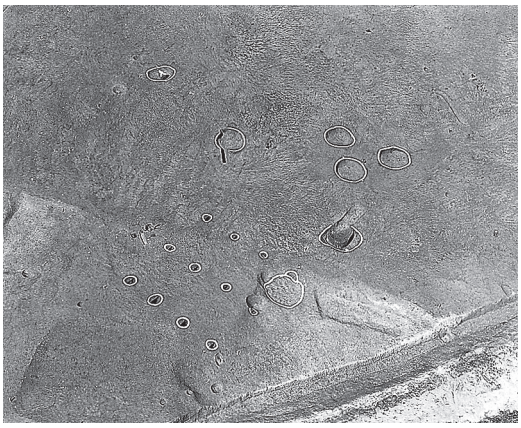
D区　縄文時代の竪穴住居



E区　縄文時代晩期土器棺墓



H区　竪穴住居



H区　掘立柱建物・中世土坑墓



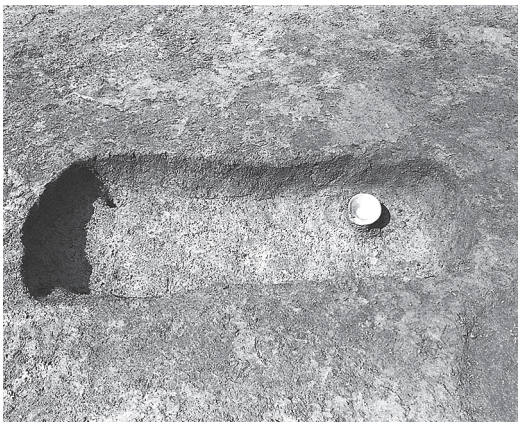
G区　竪穴住居



J区　ＳＤ 24 完掘状況



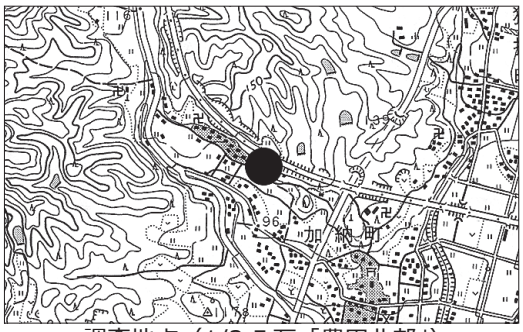
G区　合子出土土坑墓



F区　中世土坑墓

寄元（よりもと）古墳群

所 在 地　豊田市加納町字寄元地内
調査理由　猿投グリーンロード建設
調査期間　平成 11 年 4 月～ 6 月
調査面積　150 ㎡
担 当 者　佐藤公保・花井　伸・鈴木正貴



調査地点（1/2.5 万「豊田北部」）

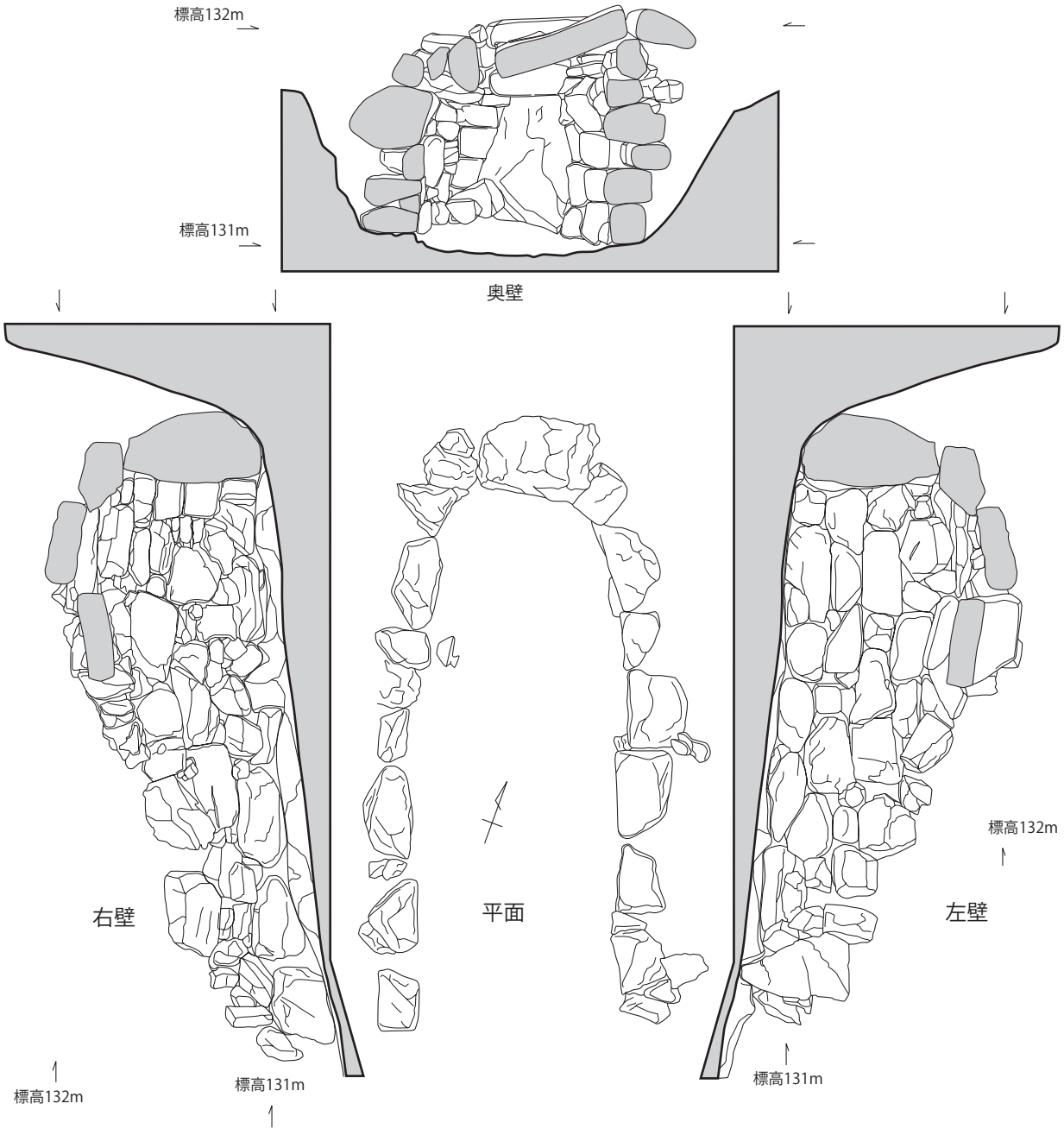
調査の経過　調査は猿投グリーンロード拡幅に伴う事前調査として、愛知県道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成 11 年 4 月から平成 11 年 6 月までで、面積は 150 ㎡である。調査は道路建設予定地内に分布する古墳の範囲を確認するため、2 地区で地形測量調査と試掘調査を行った。

この結果、A 地区では石室を持つ古墳 1 基（寄元 3 号墳）を確認した。B 地区では、既に滅失したとされる寄元古墳（愛知県遺跡番号 63048）を確認することはできなかったが、小石室を持つ古墳 S Z 01（寄元 4 号墳）を確認した。この S Z 01 に関しては引き続いて本調査を行った。

立地と環境　猿投山から南西方向に舌状に伸びる尾根上に立地する。付近には池田古墳群や藤山古墳群などの古墳群が点在し、調査地点に隣接する形で寄元 2 号墳が所在する。

調査の概要　**寄元 3 号墳**　地形測量の結果、南方向に伸びる尾根上（鞍部中央）に直径約 15 m、高さ 2 m以上を測る円形の高まりとその南東部に低い張り出し状の高まりが確認された。円形の高まりに存在する盗掘坑を調査した結果、石室の両側壁と思われる石列や折損して崩落した天井石が確認された。これらの状況から、この部分は幅約 90 ㎝の横穴式石室の羨道部と推定される。石室前庭部付近には閉塞石または石室側壁の石材が標高約 118 mの高さまで散乱していた。墳丘裾部に 2 ケ所設定された試掘坑では、地山の花崗岩上に黄褐色細粒砂の盛土が堆積していることが確認されたが、埴輪や葺石、外護列石などは確認されなかった。以上の結果から、横穴式石室を有する円墳、あるいは張り出し状の高まりを評価すれば帆立貝形の前方後円墳が存在する可能性が考えられる。

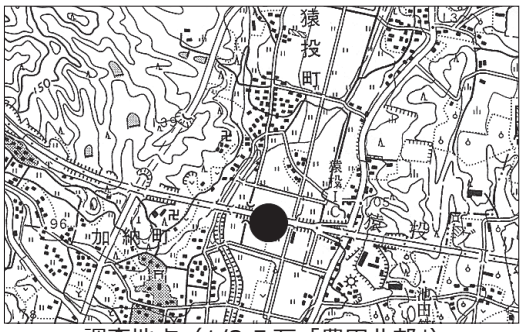
寄元 4 号墳　地形測量の結果、南西方向に舌状に伸びる尾根上（鞍部中央）の南斜面にわずかな盛り上がりが確認された。土層の断面観察の結果、調査区南部にあるわずかな盛り上がり部が、黄褐色粗粒砂質土による人為的な盛土であることが判明した。この盛土を除去すると、地山を最大で深さ 1.0 m掘り込んだ墓坑内に、全長約 2.4 m、最大幅約 1.0 mの大きさを持つ小石室（横穴式石室）が確認された。この石室は寄元 1 号墳（旧寄元古墳）とは異なるものであると考えられ、寄元 4 号墳に伴うものであると思われる。石室内からは 8 世紀初頭に位置付けられる須恵器平瓶 1 点のみが出土した。　（鈴木正貴）



寄元４号墳石室実測図（１：30）

上ノ段（うえのだん）遺跡

所 在 地　豊田市加納町字上ノ段地内
調査理由　猿投グリーンロード建設
調査期間　平成 11 年６月～７月
調査面積　250 ㎡
担 当 者　佐藤公保・花井　伸・鈴木正貴

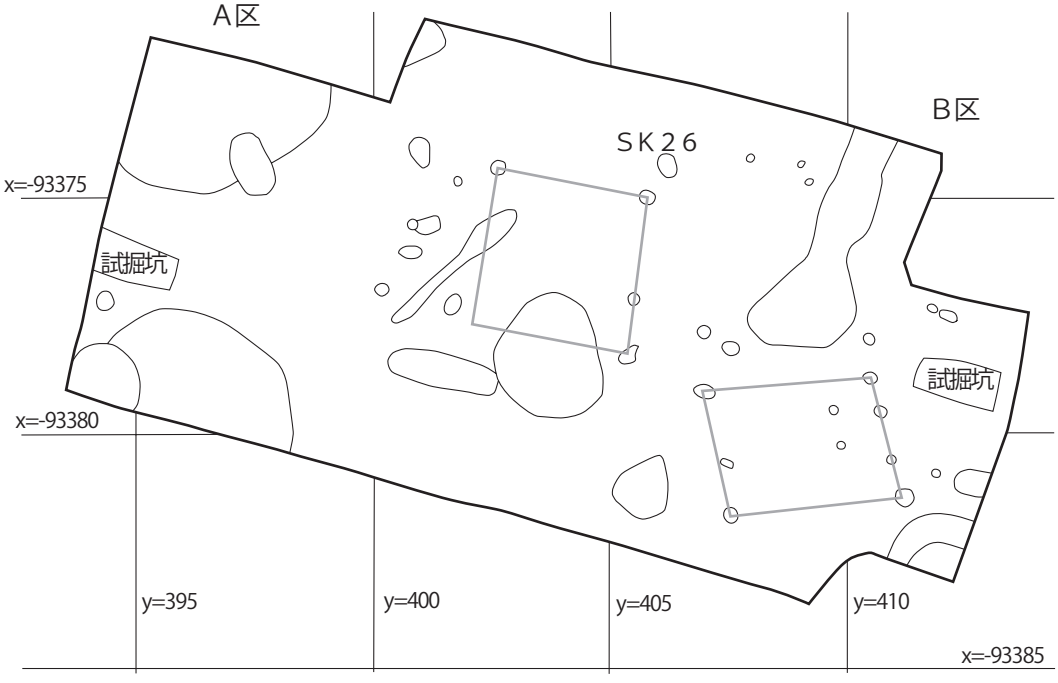


調査地点（1/2.5 万「豊田北部」）

調査の経過　調査は猿投グリーンロード拡幅に伴う事前調査として、愛知県道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成 11 年６月から平成 11 年７月までで、面積は 250 ㎡である。調査は便宜上Ａ・Ｂ区に分けて行った。

立地と環境　上ノ段遺跡は猿投川に開析された狭長な谷底平野のほぼ中央段丘低位面の微高地上に立地する。標高は約 94 ｍを測る。調査地点の南には昭和 46 年に調査された上ノ段古墳が所在する他、付近には池田古墳群、藤山古墳群などの猿投川上流域古墳群が形成されている。また、この微高地上には、縄文時代の神郷下遺跡や弥生時代から古墳時代の亀首本郷遺跡などが所在する。

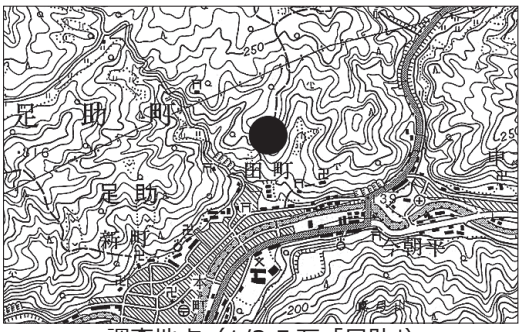
調査の概要　調査の結果、耕地整理に伴うと思われる整地土とわずかに残存した黒色遺物包含層が確認され、そこから古墳時代から江戸時代までの遺物が約 400 点出土した。黒色包含層直下の遺構面で奈良時代の掘立柱建物２棟や時期不明の土坑などが検出された。土坑ＳＫ 26 から８世紀の須恵器杯身が１点出土した。なお、上ノ段古墳に関わる時期の遺構は確認することができなかった。（鈴木正貴）



上ノ段遺跡遺構図（１：160）

城山（しろやま）城遺跡　範囲確認調査

所 在 地　東加茂郡足助町地内
調査理由　国道 153 号足助バイパス建設
調査期間　平成 11 年 7 月
調査面積　300 ㎡
担 当 者　佐藤公保・鈴木正貴・花井　伸

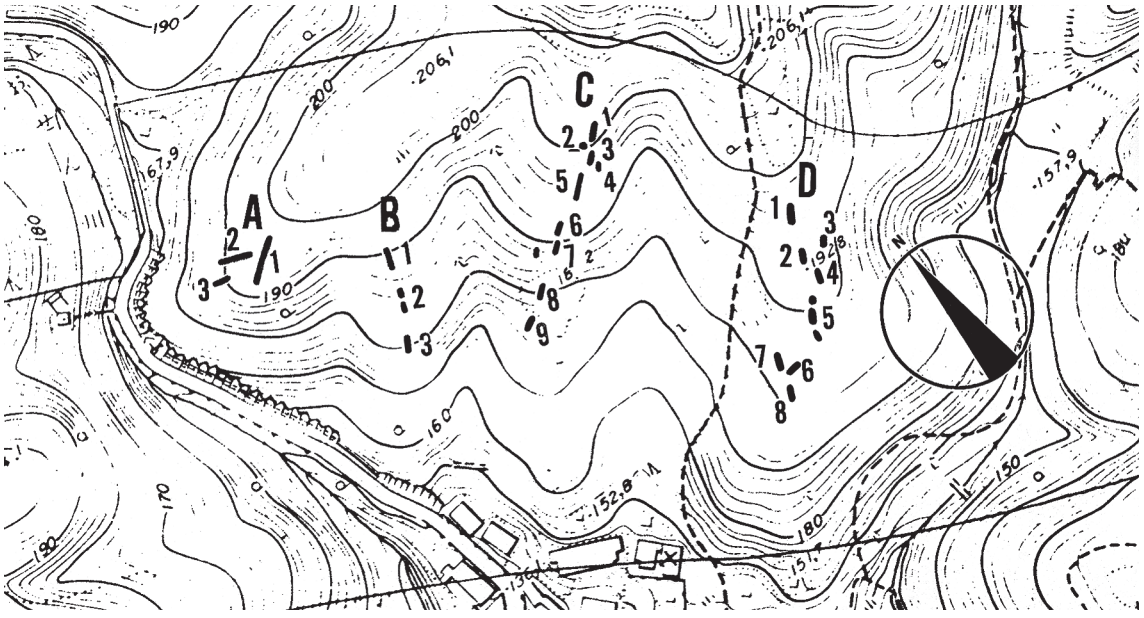


調査地点（1/2.5 万「足助」）

調査の経過　調査は、国道 153 号足助バイパス建設に伴うもので、建設省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 11 年 7 月に行った。道路予定地内における城山城遺跡の埋蔵文化財包蔵地の範囲を推定するために、23 か所にテストトレンチを設定した。調査面積は、300 ㎡である。なお、テストトレンチは、尾根ごとに西からＡ～Ｄの 4 地区に大別した。

立地と環境　城山城遺跡は足助川の右岸、城山の南側に延びる尾根上に存在する遺跡で、標高約 200 mに立地している。足助町には、飯盛城をはじめ数多くの中世城館が存在している。

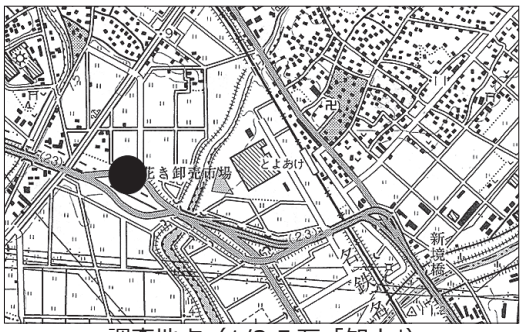
調査の概要　Ａ地区の T.T 1 及びＤ地区の T.T 1 から戦国時代の堀切状の遺構が確認された。これにより、Ａ地区及びＤ地区の上半部の平場は曲輪として機能していたと考えられる。また各地区で戦国時代から江戸時代までの遺構・遺物が確認された。これらの大半は、城山城主郭から延びる各尾根上に展開した小規模な曲輪群に伴うものと考えられる。調査の結果、城山城遺跡の範囲は、従来中世城館分布調査などで知られていた城郭の範囲よりも若干広く考えなければならないと思われる。なお、遺物は 15 世紀中頃まで遡る資料はなく、16 世紀以降のものばかりである。近世の遺物も比較的多く認められることから、近世に至っても何らかの土地利用が行われていたと考えられる。



城山城遺跡範囲確認調査地点（１：2,500）

大脇（おおわき）城遺跡

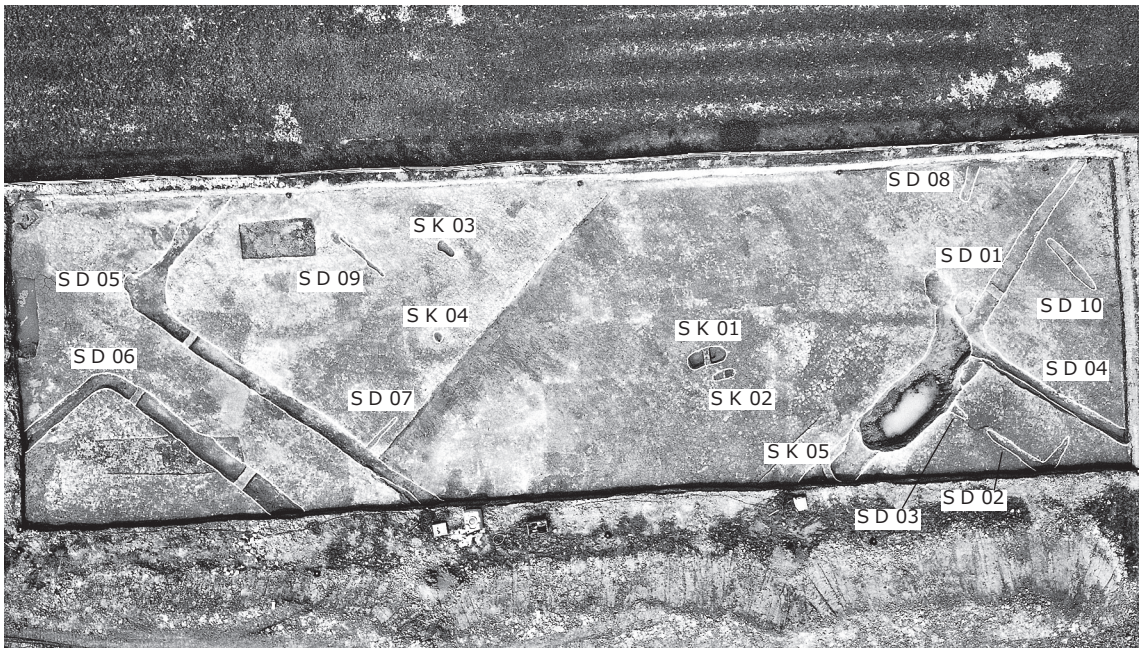
所 在 地　豊明市栄町梶田及び元屋敷地内
調査理由　第二東海自動車道関連施設の建設
調査期間　平成 11 年 4 月～ 5 月
調査面積　750 ㎡
担 当 者　木下　一・池本正明・竹内　睦



調査地点（1/2.5 万「知立」）

調査の経過　調査は、第二東海自動車道関連施設の建設に伴う事前調査として、建設省及び日本道路公団より愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成 11 年 4 月～ 5 月に実施した。本年度は、750 ㎡の 1 区画を調査した。

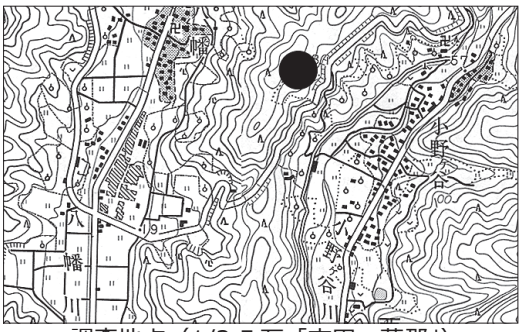
調査の概要　大脇城遺跡は豊明市栄町梶田及び元屋敷地内に所在する。尾張・三河の国境を流れる境川の支流である正戸川右岸の平坦な沖積地に立地する。平成 8 ・ 9 年度に実施した発掘調査で、16 ～ 17 世紀の城館跡を中心とする遺跡であることが判明している。今年度の調査は、平成 8 年度に実施した調査区の北東部分にあたり、過年度調査と同じく、遺構検出面は 3 m前後である。遺構・遺物とも希薄であるが、埋土の状況や軸線方向等が過年度調査結果に符合するため、「大脇城跡」の一部を構成するものと考えられる。遺物は S D 05、06 からの出土が多く、そのほとんどは土器・陶磁器類である。また、鞴の羽口も出土しており、城館の周辺部を構成していた遺跡と考えられる。（竹内　睦）



調査区全景

西川原（にしがわら）古墳

所 在 地　幡豆郡幡豆町大字西幡豆西川原 31-39
調査理由　内陸用地造成
調査期間　平成 11 年 10 月～ 12 月
調査面積　500 ㎡
担 当 者　木下　一・池本正明・竹内　睦

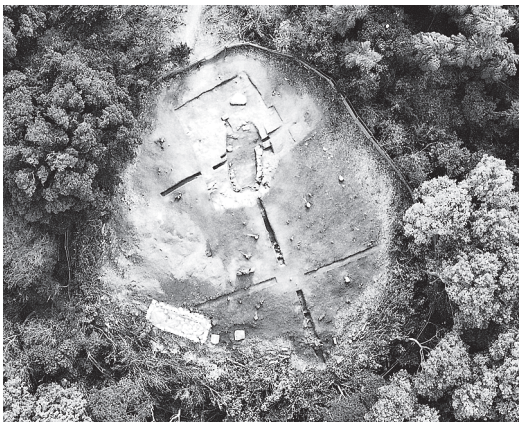


調査地点（1/2.5 万「吉田・蒲郡」）

調査の経過　調査は内陸用地造成に伴う事前調査として、愛知県企業庁より愛知県教育委員会を通した委託事業として平成 11 年 10 月より 12 月にかけて実施した。調査面積は 500 ㎡で、1 基の古墳を発掘調査した。

調査の概要　西川原古墳は幡豆郡幡豆町大字西幡豆の北部の山林に所在する。標高 148.12 mの三角点の南斜面に当たり、渥美半島から知多半島を一望できる場所に立地している。過去に幾度か掘削された形跡があり、表土には石室の一部と思われる石と石棺の一部が地域の信仰の対象として祀られていた。石室の底辺部が集石の直下約 1.5 mから検出され、岩盤をくり抜く形で作られた横穴式石室の円墳と考えられる。近辺の土地は結晶片岩の岩盤であるが、石棺は佐久島の砂岩を使った組み合わせ式箱式石棺である。遺物は石室からは出土されなかったが、石室の前面、表土の約 20 ㎝下から若干の土器、銅製品が出土した。7 世紀後半の古墳であると考えられる。

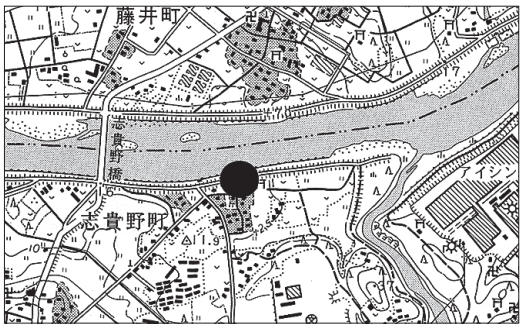
石室の規模は、幅 2 m、長さ 7 m、石棺の長さは明らかでないが、幅 47 ㎝と、7 世紀後半ではかなりの規模である。暗文土師器と銙帯が出土していることや立地条件を考え合わせると、埋葬者がかなりの勢力をもっていた可能性が強い。古墳時代から律令期へといった過渡期の様子が偲ばれる。　（竹内　睦）


空中写真


調査区全景

古新田（こしんでん）遺跡　範囲確認調査

所 在 地　西尾市志貴野町
調査理由　矢作川河川改修における範囲確認
調査期間　平成 11 年５月～７月
調査面積　500 ㎡
担 当 者　木下　一・松田　訓・武井繁樹

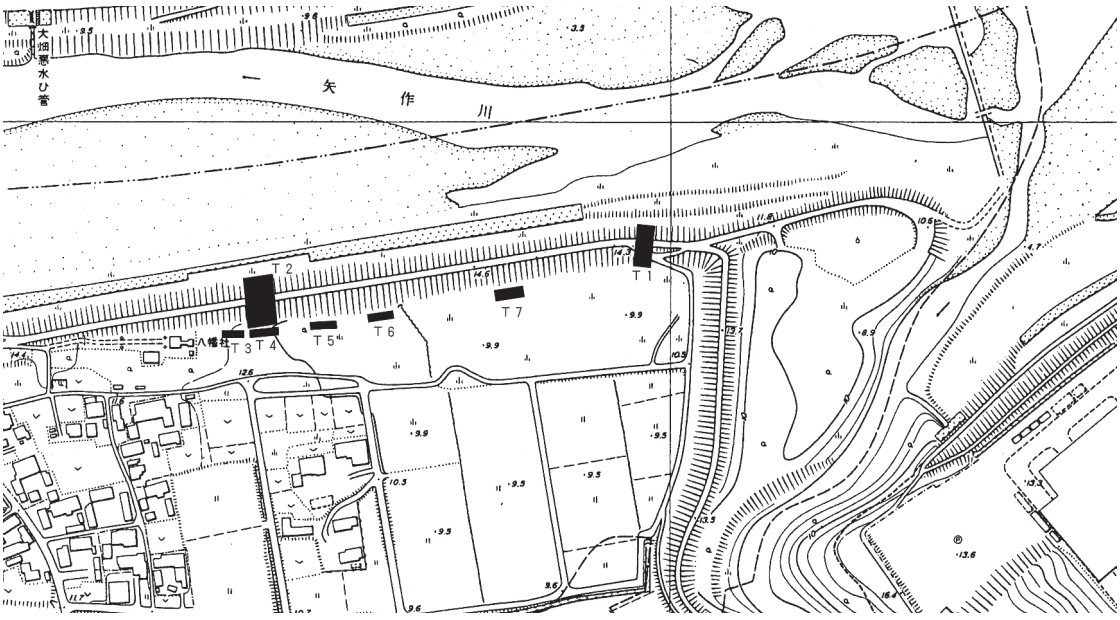


調査地点（1/2.5 万「西尾」）

調査の経過　調査は矢作川河川改修予定地内における範囲確認調査で、建設省豊橋工事事務所より愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成 11 年５月 31 日から７月８日にかけて実施した。調査面積は、500 ㎡である。

立地と環境　古新田遺跡は、西尾市志貴野町の矢作川と矢作古川の分岐点付近に所在する。この付近の地形は、矢作川の掘削によりその形は変容しているものの、対岸から延びる碧海台地の舌状に延びた東端にあたる。遺跡の南東には、弥生時代の遺跡として本センターが発掘した岡島遺跡や室遺跡がある。

調査の概要　今回の調査地点は、矢作川左岸の新堤防内側直下で、長さ約 350 ｍ内に７ヶ所のテストトレンチを設定した。この試掘坑の中で、近世以前の人為的な掘削及び盛土行為が確認できたのは、Ｔ２～４の３ヶ所であった。Ｔ１・２で確認できた旧堤防盛土は、明治期以降の磁器、瓦片が混入しており、近世以前までさかのぼる築造行為の可能性はないと思われる。各地点での盛土以外の堆積土層は、Ｔ２の中ほどから下流方向には、台地の基盤層である黄橙色粘質土が認められ、このＴ２より上流に向かってはこの基盤層が段を呈するように下がっていた。この段差ラインはほぼ南北方向に認められるため、矢作（新）川の掘削以前では、碧海台地の舌状にのびた端部がＴ２の中ほどを東端として、現矢作川の対岸から南北方向に続いていたものと思われる。　（木下　一・松田　訓・武井繁樹）



調査地点位置図（１：5,000）

鹿乗川（かのりがわ）流域遺跡群　範囲確認調査

所 在 地　安城市小川町・木戸町
調査理由　鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査
調査期間　平成 12 年 1 月～ 3 月
調査面積　1,000 ㎡
担 当 者　木下　一・松田　訓・武井繁樹



調査地点（1/2.5 万「西尾」）

調査の経過　調査は、愛知県土木部による鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて昨年度より実施している。本年度は、昨年度の成果を元に、工事予定地における範囲確認調査を行った。調査期間は平成 12 年 1 月から 3 月、調査面積は 1,000 ㎡である。

立地と環境　鹿乗川は、碧海台地縁辺に沿って安城市東部を南北に流れており、この碧海台地からみた外側を矢作川が併行する。周辺の地形は、これらの河川により沖積地が形成され、現況として水田や畑地が広がり、また、自然堤防上の微高地には小規模な集落が形成されている。調査地の南西には本センターが調査を行った加美遺跡や志貴野遺跡がある。

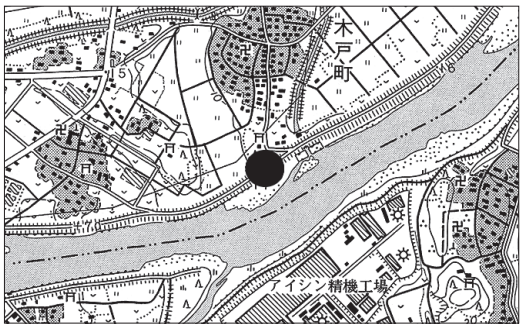
調査の概要　本年度の調査では、昨年度行った 8 カ所の調査区における遺構、遺物の濃淡を元に、良好な結果が得られた部分の範囲を確認する事に主眼を置いた。調査対象は、昨年度のＥ区南よりＨ区南までとし、この範囲に任意でテストトレンチを設定した。各調査地点では現在の水田耕作土が約 0.2 m入れられており、この下にオリーブ灰・浅黄色シルトの堆積が認められた。この下には灰・緑灰色シルトが堆積している地点があり、この層から、弥生時代中期末葉～古墳時代前葉にかけての遺構、遺物が確認できた。これらがもっとも良好に確認できたのは、昨年度のＦ区北側である。　（木下　一・松田　訓・武井繁樹）



調査地点位置図（1：20,000）

木戸（きど）城跡　範囲確認調査

所 在 地　安城市木戸町・藤井町
調査理由　矢作川河川改修における範囲確認
調査期間　平成 11 年 4 月～ 5 月
調査面積　500 ㎡
担 当 者　木下　一・松田　訓・武井繁樹

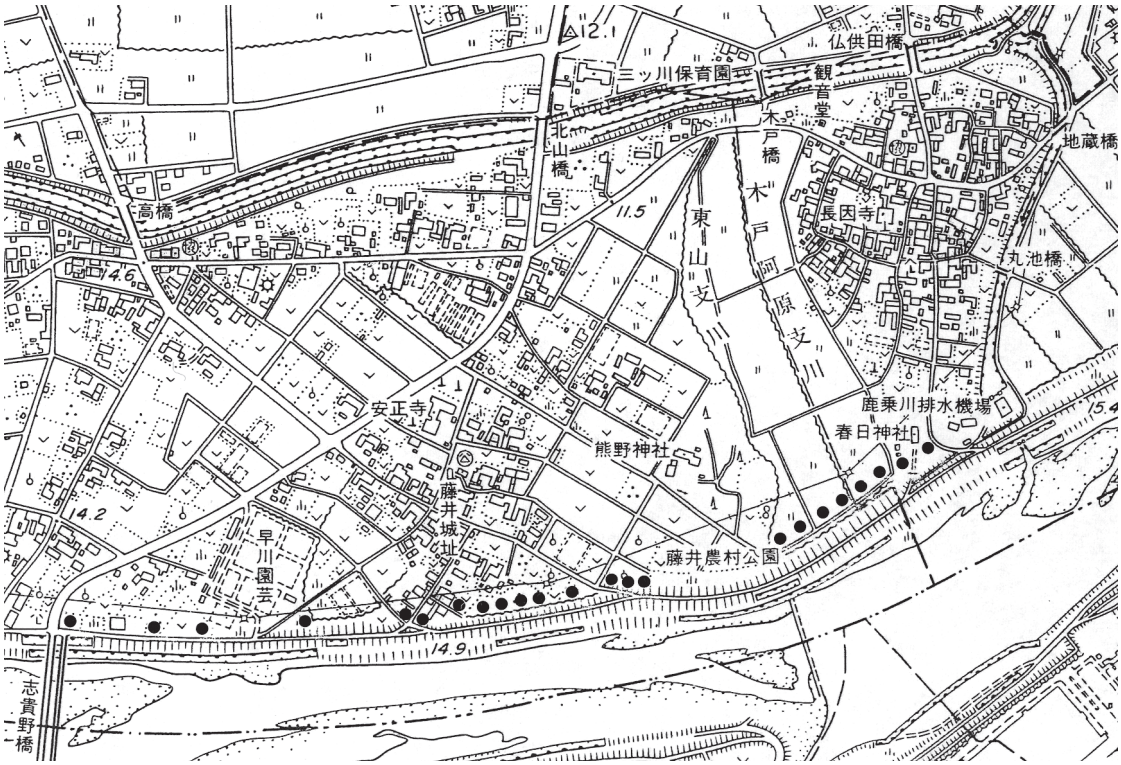


調査地点（1/2.5 万「西尾」）

調査の経過　調査は矢作川河川改修予定地内における範囲確認調査で、建設省豊橋工事事務所より愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成 11 年 4 月 12 日から 5 月 24 日にかけて実施した。調査面積は、500 ㎡である。

立地と環境　木戸城跡は、矢作川右岸脇に位置し、安城市木戸町・藤井町に所在する。この周辺は、碧海台地の縁にあたり、また、矢作川によって形成された沖積地でもあることから、水田や畑地が点在し、自然堤防上には小規模な集落が形成されている。木戸城跡の北には、碧海台地の縁辺部に沿って鹿乗川が流れ、その流域は、弥生時代から古墳時代の遺跡が広がっていることが、過去の調査から確認されている。

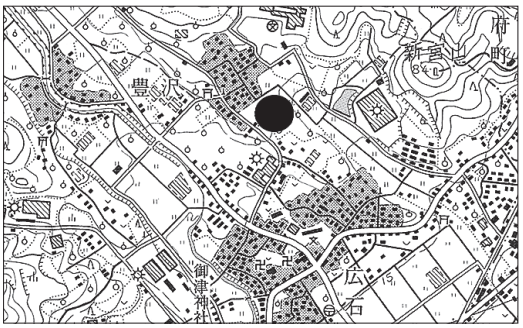
調査の概要　今回の調査地は、矢作川右岸の堤防直下で長さ 1,300 m内に 24 ヶ所のテストトレンチを設定した。この試掘坑の中で、人為的な掘削及び盛土行為が確認できたのは、最東端の２ヶ所のみである。特に東端の試掘坑は､現存する木戸城東側における濠と土塁の南側に設定し、現存遺構の延長線上にあたる部分で、掘削及び盛土行為が確認できたため、木戸城関連遺構の残存と判断した。　（木下　一・松田　訓・武井繁樹）



調査地点位置図（１：10,000）

広石（ひろいし）散布地　範囲確認調査

所 在 地　宝飯郡御津町大字広石
調査理由　県道大塚国府線建設工事における事前調査
調査期間　平成 11 年７月～８月
調査面積　200 ㎡
担 当 者　木下　一・松田　訓・武井繁樹

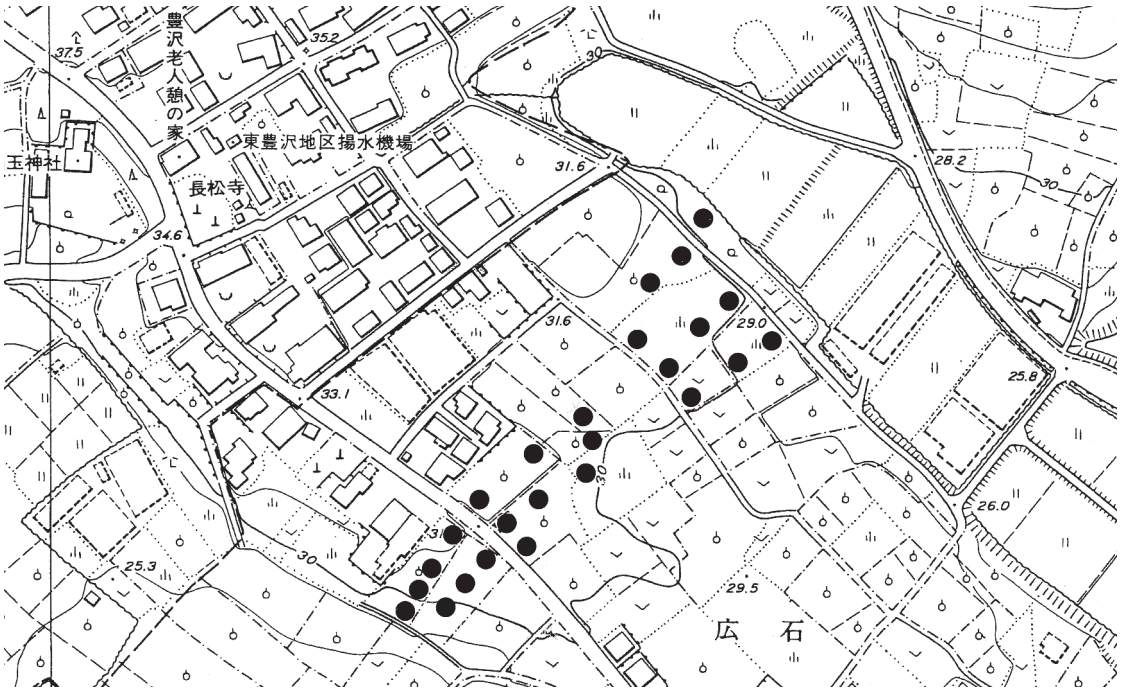


調査地点（1/2.5 万「小坂井」）

調査の経過　発掘調査は、県道大塚国府線建設工事予定地内における事前調査で、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 11 年７月 19 日から８月 11 日にかけて範囲確認調査を実施した。調査面積は、200 ㎡である。

立地と環境　広石散布地は、ＪＲ東海道線愛知御津駅より北西約２㎞の、宝飯郡御津町大字広石に位置する。調査地は、北西から南東に向かってゆるやかに下る舌状の高まりと、小河川によって開削された浅い谷によって形成されている。標高は、約 29～31 mを測る。調査地の北西には、弥生から古墳時代を主体とする石堂野遺跡、東には扁平鈕式の流水文銅鐸を出土した、広石銅鐸出土地などが近接する。

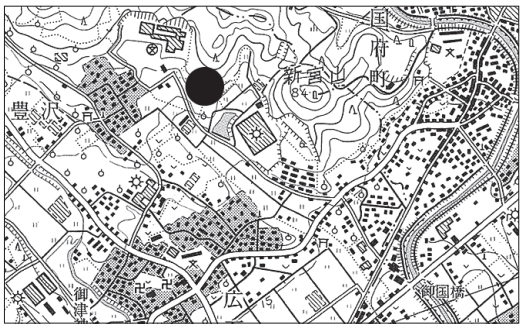
調査の概要　今回の調査地は、幅約 20 ～ 45 m、長さ約 210 mの道路建設予定地内で、この中に任意でテストトレンチを設定した。各調査地点の層序は、10 ～ 20 ㎝の表土の下ににぶい黄褐色シルトが 10 ～ 20 ㎝堆積しており、この下は基盤層であるにぶい赤褐色粘土または黄褐色粘土が認められた。中世以前の遺構と思われるものは、この基盤層を直接掘り込むように検出され、にぶい黄褐色シルト内から掘り込まれているものは、中世以降の遺構と思われる。検出された遺物は、古式土師器を主体とし、須恵器、灰釉系陶器、陶磁器などがわずかに認められた。　（木下　一・松田　訓・武井繁樹）



調査地点位置図（１：3,000）

高坂（こうさか）遺跡

所 在 地　宝飯郡御津町大字広石字新宮山地内
調査理由　県道大塚国府線建設工事における事前調査
調査期間　平成 11 年８月～ 12 月
調査面積　1,800 ㎡
担 当 者　木下　一・松田　訓・武井繁樹

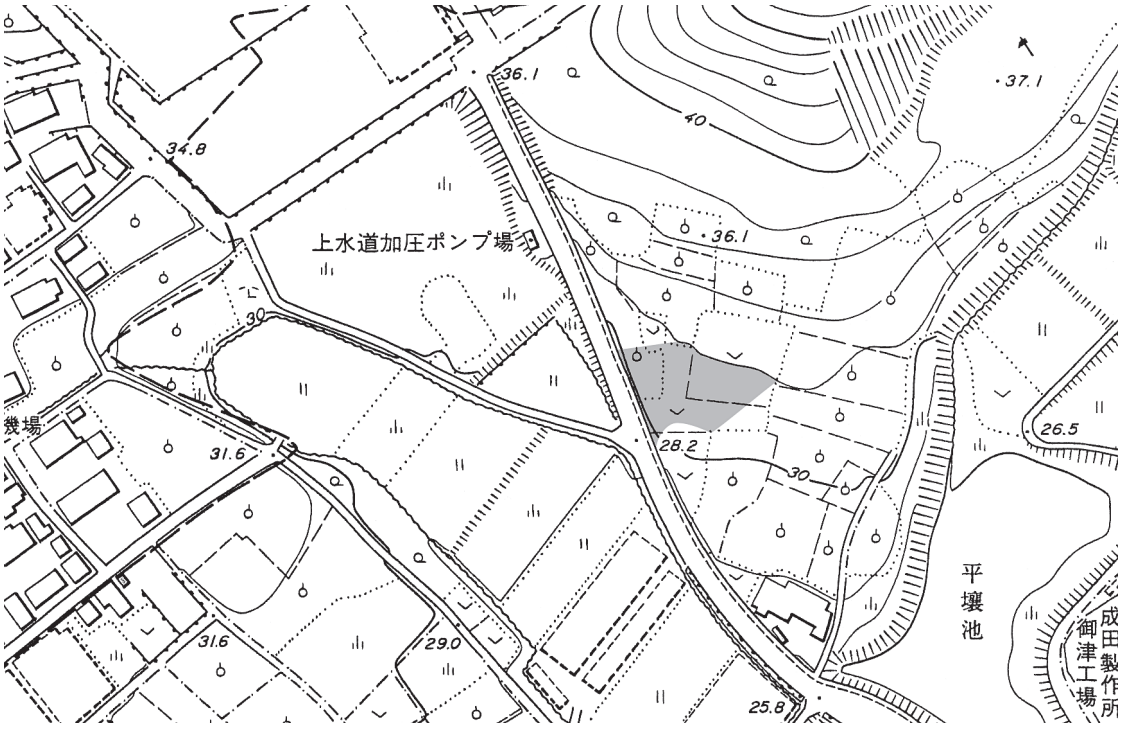


調査地点（1/2.5 万「小坂井」）

調査の経過　発掘調査は、県道大塚国府線建設工事予定地内における事前調査で、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成 10 年度に範囲確認調査を、平成 11 年８月 17 日から 12 月 24 日にかけて本調査を実施した。調査面積は、1,800 ㎡である。

立地と環境　高坂遺跡はＪＲ東海道線愛知御津駅より北西約２㎞の、宝飯郡御津町大字広石字新宮山地内に所在する。調査地は、北西から南東に向かってゆるやかに下る舌状の丘陵地の南側斜面に立地し、標高は約 29 m～ 34 mを測る。調査地の北西には、古墳時代を主体とする石堂野遺跡、東には、広石銅鐸出土地などが近接する。

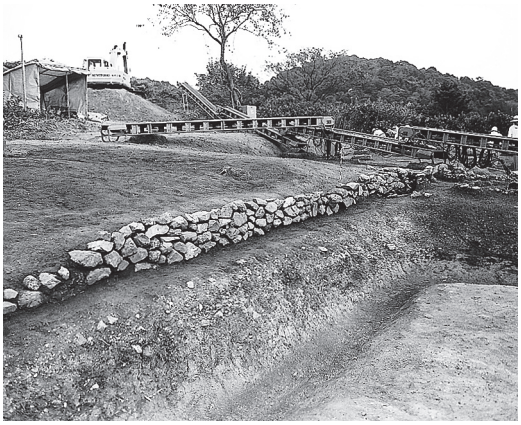
調査の概要　調査地の旧態は畑地で、この耕作土 10 ～ 20 ㎝を機械掘削によって除去した。この段階では、ゆるやかな斜面を段状に造成し、一部に石積みを残す明治期の耕作地を検出する。さらに、この耕作地跡の段直下で削り出された部分を埋める土と、段直上の盛土を人力により除去し、遺構検出を行った。この時点では、一部ににぶい黄褐色シルトを残すも、大部分はにぶい赤褐色粘土または黄褐色粘土が露呈する。検出された遺構は、土坑 62、不定形土坑 15、ピット 169、溝２、住居址３である。検出された遺物は、遺構に伴うものは欠山式を主体とし、わずかに古代・中世・近世遺物が含まれた。（木下　一・松田　訓・武井繁樹）



調査区位置図（１：2,500）



調査区全景　北東より



石積み（明治期）



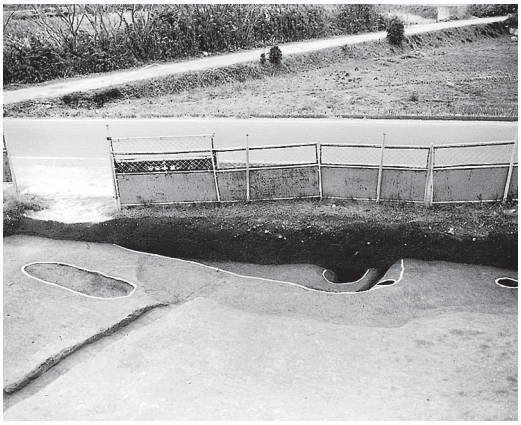
ＳＢ 02 全景　南西より



ＳＢ 02 東側ブロック遺物出土状況



調査区　東側



調査区　南側



調査区　西側



調査区　中央付近